

# 関野 昂著作選 2

## 機巧館殺人事件



現代図書



関野 昂 著作選 2

機巧館殺人事件

現代図書





著者ポートレート  
小樽にて  
2001年8月



## 凡 例

- 一、この著作選は関野昂(せう)（二〇〇三年八月二十四日死去、享年十四歳）によって執筆され、本人のMOに残された作品から、二〇〇〇年以降のものを選んで構成した。なお、一部にMO外で本人のメモ・ノートの記述を採用した。
- 一、本著作選は全三巻で構成される。
- 一、著者関野昂については、第一巻の編集者による解説・年譜を参照されたい。
- 一、底本としたのは全て著者が残したMO中のものである。同名で細部の異なる作品がある場合は、編集者の責任において、正文を確定した。
- 一、正文の確定に当たっては、明らかな誤記・脱漏のみ訂正し、その他は原文のままとした。
- 一、本著作選の編集には著者の父である関野豊が当たった。



## 目次

口絵	1
凡例	3
著者選第2巻に関する編集ノート	9
機巧館殺人事件	
前書き	13
登場人物	15
第1エピソードイオン 魔神の降臨	
一館（未完）	19
プロログス	21
序章、探偵	25
1. 記憶	43
2. 突風	82
第2エピソードイオン 魔獣の鉄檻	
3. 惨劇	125
4. 放動	161
5. 曲線	201

第3エピソードイオン	曲線の波間	239
6. 洞窟		241
7. 混沌		280
8. 幻惑		320
第4エピソードイオン	白夢の迷宮	359
9. 無限		361
10. 崩壊		403
終章・余韻		483
エクソドス		493
―館―(既視)		499
付録		
1. 自作解説		ii
2. 第4エピソードイオン特殊用語解説表		iv
3. 参考文献		vii
4. 「館に関する記憶」		x
5. 機巧館殺人事件年表		xii
編集者による解題	関野 豊	519
後記		563

第二巻収録作品の著者の遺したMO中のファイル最終更新日時とその他データ一覧

献辞	二〇〇一	九・二十七
前書き	二〇〇一	十・十六
冒頭引用(オイディプス王)	二〇〇一	十一・十一
登場人物	二〇〇二	八・二十二
第1エペイソディオ —館—(未来)	二〇〇一	十一・十
プロロゴス	二〇〇二	十二・四
序篇・探偵	二〇〇一	十一・二十三
1. 記憶	註①参照	
2. 突風	註②参照	
第2エペイソディオ	二〇〇二	三・十
3. 惨劇	二〇〇一	十二・一
4. 波動	二〇〇一	十一・二十九
5. 曲線	二〇〇一	
第3エペイソディオ	二〇〇一	十・十四
6. 洞窟	二〇〇一	
曲線の波間		

7. 混沌	二〇〇二	五・十
8. 幻惑	二〇〇一	十・十五

第4エピソードイオン 白夢の迷宮

9. 無限	二〇〇一	十一・二十五
10. 崩壊	二〇〇二	七・十三
終章 余韻	二〇〇一	十・十二
エクソドス	二〇〇一	十一・十二
―館―(既視)	二〇〇二	四・二十九

付録 自作解説

第4エピソードイオン特殊用語解説表	二〇〇一	十一・五
参考文献	二〇〇一	十一・五
「館に関する記憶」	二〇〇一	十・二十六
機巧館殺人事件年表	二〇〇三	八・二十
	二〇〇一	十一・二十八

註①・註② ここのみ、MO中にファイルが遺されていなかったため、プリントアウトされたものを入力・編集。更新日時は、二〇〇一年秋から二〇〇二年初夏までのいずれかと思われる。

## 著作選第2巻に関する編集ノート

『機巧館殺人事件』には多くのヴァリアント（異稿）が存在する。本著作選では、講談社発行の推理小説専門誌「メフィスト」のメフィスト賞に応募することを前提に著者がまとめたものを底本とする。

(1) 作品の名称であるが、本巻十一頁に掲げた題名の『虚構の漆闇 第一部 機巧館殺人事件』とは、メフィスト賞への応募を前提とした名前である。即ち、「虚構の漆闇」という全四部の長大な作品の第一部、という位置付けである。ただし、第二部以降は書かれなかった（第二部の、冒頭部十数行のみが存在する）。

(2) 献辞は、メフィスト賞応募の際のもの。著者自身が製本した自家版（祖父母に贈ったもの）では、「家族、そして祖父母へ——」となっていた（一人っ子であった著者にとつては家族とは両親のことであり、祖父母とは、幼時から近くに住んでいて日中はそので過ごしていた父方の祖父母のことである）。

(3) 前書きは、講談社のメフィスト編集部審査部門の人々に読んでもらうつもりで著者が書いたもの。真面目な中に稚気あふれる言葉が散見されるが、資料的価値を考慮し、冒頭に掲げた。なお、笹城蒼穹（ささき・そうきゅう）とは、著者が当時使用していたペンネームである。

(4) 本文に関しては、著者が小学校五年生の初冬の十二月に書き始めたものであるが、最終更新日時（即ち、上書き保存がなされた日付）によって、大きく二つのカテゴリーに分類される。

第一に、小六の秋から初冬にかけ、上書き保存がなされたもの。これが最も多い。メフィスト賞への応募を前提に完成を急いだ時期のものである。いったん完成していた第一稿の自家版に比べ、内容的にもかなりの変化が見られる（詳しくは編集者解題を参照）。

第二は、本作への愛着深い著者が、再読した際に加筆したもの。まず、二〇〇二年三月（小六の三学期の終わり）に更新した「3. 惨劇」が挙げられる。その後、二〇〇二年四月に館林市立第四中学校に入学した著者は、数回に亘り、旧稿に手を入れて示すとおりであり、二〇〇二年三月を起点として、ほぼ月に一度は本作に手を入れている様子がわかる。

	二〇〇二年	三月	3. 惨劇
		四月	—館—(既視)
		五月	7. 混沌
		七月	10. 崩壊
		八月	登場人物一覽
		十二月	プロログス

以上二つのカテゴリとは別に、ディスク中にファイルが見あたらず（何らかの理由で、恐らくミスで上書き保存がなされなかったと思われる）、プリントアウトされたものから入力したものであることは、「データー一覽」に記した通り。

(5) 第四エピソード冒頭に塔晶夫『虚無への供物』からの引用を置くことは、編集者（著者の父）の責任で行った。他の稿本と異なつて、メフィスト版では各エピソードごとに冒頭引用を使うことを著者は考えていた。第一エピソードで小栗虫太郎を使用するところまでは著者の決定稿に明示されているが、他の三つのエピソードに対して、引用文として保存されたものは残り一つしかファイル中になかった。これを生かすべく、編集者が第四エピソードで使用することは、著者も許容してくれるのではないかと考える。

(6) 「館に関する記憶」は、著者が自ら命を絶つ四日前の二〇〇三年八月二十日に書かれた。既に胸中に決するものがあった著者が、最後に自著に関して記した文章であるため、特に掲載することとした。

虚構の漆闇 第一部

機 巧 館 殺 人 事 件

——  
街路樹教うる人々へ

## 前書き

本作品『虚構の漆闇第一部 機巧館殺人事件』を読まれるに当たり、幾つかの前述と事前の前置きが必要であるかと考えたために、ここでそれらの事柄を、この場でまとめておく事にした。

まず第一に、この作品を純粋な探偵小説として期待しないで頂きたい、という事である。しかし、この一文を読み、憤慨して原稿を投げ飛ばさないで欲しい。探偵小説、というものの根本にあるものを探求する上で、この作品は不純な探偵小説にならざるを得なかった。そこで行われている私の工夫というのが、例えばトリックの解明とか、犯人探しとかを、読者に絶対に悩ませない、という事である。つまりは、既に世に出回っている探偵小説において使用されたトリックの応用と一瞬にして分かるものや、犯人についてもそれ以外の選択肢はないという程に明確に描いている。この事については、最後の自作解説において、詳細に後述する事としよう。

第二に、この作品の内、特に「第四章 白夢の迷宮 10. 崩壊」の後半部分に来る探偵の言葉が、果たしてこの作品を「小説」という形態で発表すべきであったのかという原初的問題点さえも検討せねばならない程の説明的文章となっている、という事実である。この点は筆者自身としても甚だ問題であると考えるが、この「虚構の漆闇」を現代文学への挑戦（「反文学の定立」として成立させるには、必然的に物語としての確立を図る以外の選択肢を見つけない事が出なかった。この点は、特に注意して頂きたい部分である。

第三に、この物語は物語的完結を一応という形で成してはいるものの、それが1つの作品として未だ完成を見ていない、という事実である。「虚構の漆闇」は機巧館殺人事件を第一部として、現在の予定において全四部作となる予測が立っている。

以上の三点を、最初の段階において意識した上で、この作品を評価して頂きたい。  
健闘を心から祈る。

\*誤解防止を目的とする詳細注意

1 本作品における探偵役布川京太郎だが、西村京太郎氏（申し訳ないが、氏の作品は一切未読）から取ったものではない。では何

から取ったのか、と言われれば困る事から、それが意味をこめられた名前ではない、という事である。

2 本作品に登場する刑事、支倉の名字は、飽く迄も小栗虫太郎の作品における探偵役・法水麟太郎の所謂マーカム役支倉検事から取ったものであり、甲賀三郎氏の「支倉事件」(未読)とは一切関係ない事をお断りしておく。

3 本作品の最後にある「エクソドス」であるが、一般ではこれをユダヤ系民族の離散として使用されている場合があるようだが、この場合ギリシア悲劇で使われる、エピソードとしての意味で理解して欲しい。終章、という意味である。

4 本作品は反推理小説(IIアンチ・ミステリ)の系譜を継ぐものとして、さらには反文学という概念の定立を図るといふ野心的欲望に満ち満ちた作品である。そのために、キャッチコピーにおいても前述した「コペルニクスの転回」に纏わる要素が大量に盛り込まれるであろう事をお断りしておく。

5 本作品における特に「1. 記憶」においてほのめかされる、遣伝子小説の雰囲気であるが、それは筆者の施した巨大な罫であり、読者を翻弄するための機巧である事をお断りする。この文章こそ二重の罫であると考えた読者の方は、見事筆者の施した罫にかかったわけである。一筋縄ではいかない事をお断りしておく。

6 本作品において、意図的に片仮名を使用していいと思われる部分が文章中に多数発見される事と思う。それは読者の過剰意識ではなく、事実筆者が作品の雰囲気のため、意図的にそうしたものである。

7 本作品の読了後、どこを見ても解消されない、不可解な探偵役の発言が残る。それは勿論そうである。本作品は四部作の第一部であり、核心部分の展開は第二部以降である。

8 本作品の後半において、度々「サディズム的」または「マゾヒズム的」との言葉が多用されるが、それは飽く迄も比喩であり、一般に知られる性倒錯とは無縁のものである事を前置きしておく。

2001年9月30日

笹城 蒼穹

機巧館殺人事件 登場人物表

\*記載されている年齢は2001年現在のもの

芦屋 鷹一郎 (78)	天才画家 膨大な資産を所有 機巧館の建設・命名者
芦屋 由利子 (故)	鷹一郎の妻 癌により子宮切除 赤姫山鍾乳洞に行った後原因不明の病死
芦屋 雪乃 (51)	鷹一郎の長女 画家 鷹一郎の肖像画を描いた
芦屋 幸弘 (48)	鷹一郎の長男 彫刻家 東館の主人
芦屋 月乃 (43)	鷹一郎の次女 西館在住
芦屋 花乃 (39)	鷹一郎の三女 西館在住
芦屋 弘康 (38)	鷹一郎の次男 西館在住
芦屋 風乃 (32)	鷹一郎の四女 毎日自作宗教の礼拝をする 六角塔に住む
芦屋 和弘 (故)	雪乃の夫 仮面を作った 病死
芦屋 信子 (39)	幸弘の妻 銅版画家
芦屋 昭人 (28)	幸弘の長男 版画家
芦屋 和秀 (14)	幸弘の次男 彫刻家
芦屋 美子 (9)	幸弘の長女 オルガニストを目指す
芦屋 潤一郎 (34)	雪乃の長男 画家
芦屋 紗智子 (故)	潤一郎の妻 潤一郎により殺害される
芦屋 幸利 (12)	潤一郎の長男 画家
芦屋 浩一 (故)	風乃の夫 病死
芦屋 俊秀 (5)	風乃の長男 (真康・紗智子の長男) 職業無し ベチユーンという犬を飼育

芦屋 鷹二郎 (不)	——	鷹二郎の弟・双生児 行方不明 (植物状態)
芦屋 時恵 (69)	——	鷹二郎の妻 率丸性女性化症候群 西館在住
芦屋 真弘 (54)	——	鷹二郎の長男 西館在住
芦屋 真康 (52)	——	鷹二郎の次男 音楽家
芦屋 真秀 (51)	——	鷹二郎の三男 銅版画家
芦屋 真俊 (48)	——	鷹二郎の四男 西館在住
芦屋 真幸 (46)	——	鷹二郎の五男 彫刻家 風乃とサド・マゾ的關係にあつた
芦屋 秀美 (49)	——	真康の妻 ヴァイオリニスト
芦屋 真子 (26)	——	真康の長女 ピアニスト
野上 健一 (71、76)	——	東館の執事 鷹一郎の戦友
矢木 龍之介 (77)	——	東館の医師 かつてガダルカナルに投入された軍人
布川 京太郎 (?)	——	探偵
支倉 俊之 (37)	——	警視庁の刑事 妻と別居
支倉 恵子 (13)	——	支倉の長女 妻と共に別居 現在中1
支倉 真知子 (11)	——	支倉の次女 妻と共に別居 現在小5
妻 (?)	——	支倉の妻 別居
市村 秀二郎 (39)	——	警視庁 幹部
法村 夏彦 (58)	——	布川邸の老執事
三浦 幸太郎 (不)	——	江戸末期国府町に生まれた医師・知識人 赤姫山に研究所を持つ 行方不明
糸崎 英一郎 (故)	——	大本営陸軍部の将校 昭和18年三浦の研究所に当時の警察を派遣する
萩原 (?)	——	西館の執事 鷹一郎の東京宅で執事をしていた男
高見 中太郎	——	「大理石館」の主
野沢 茜	——	「大理石館」の使用人 大理石館殺人事件の犯人

江崎 健吾	二重人格者 パラパラ殺人の犯人
望見 恵子	パラパラ殺人の被害者
大塚 平右衛門	赤坂山の屋敷で隠居していた商人
大塚 和右衛門	平右衛門の息子 商人
寺山 貴之	幕末の資産家
北野 昭英	戦時中国府町で大流行した伝染病の感染者の弟 国府町放火・惨殺事件の犯人

おお 聞よ、

わしを包む暗い雲よ、いとわしく、名状しがたく

不吉の風に運ばれて 抗うすべなく やつて来たお前――。

ああ、

ああ、ふたたび洩れる苦悶のうめき。いかばかりにこの身をつらぬく、

鋭い針の刺傷と かさね来し罪業の想い出。

ソボクレス「オイディプス王」

藤沢令夫訳 岩波文庫

## 第1エペイソティオン 贖神の降臨

（と云うのは、四百年の昔から通説としていて、臼杵耶穌会神学  
林以来の神聖家族と云われる降矢木の館に、突如真黒い嵐みたい  
な毒殺者の彷彿が始まったからであった。その、通称黒死類と呼  
ばれる降矢木の館には、何時か必ずこういう不思議な恐怖が起こ  
らずにはいまいと囁かれていた。）

小栗虫太郎「黒死館殺人事件」

### 一館（未妻）

霧に包まれた山の中、私はその、廃墟と化した館を見つけた。私はそこに、いつでも好きな時に足を運ぶ事が出来る。昔はいかめしいという他の表現の見つからなかった頃はもう大半が崩れ去り、中への侵入を防いでいた場所、今では完全に乾ききったものになっていた。鉄ねじを引き上げるのに使った綱は、とっくに切れてしまっている。

東、西と分かれたその館の六角形の塔は、今でも健在だ。その奥の丘の上のアトリエには、もう誰も足を運ぼうとしない。そのアトリエには、まだあの絵が飾られている。

館の内部も、昔の通りだった。入るとすぐにある正面ホール。そして、廊下を折れたところに広がる、階段ホールには一枚の絵が飾られている。「11. 夢燕」そう下に札が出ている。その札も、一つの釘だけでぶら下がりが、いつその埃だらけの床に落ちるか分からない。その埃だらけの床にひかれた絨毯の、その部分だけが妙に赤いのは、気のせいではない。昔、ここで血を流した人間がいるのだ。

石造りの階段を上り、三階にある六角形の塔に出る。館を取り囲む樹林が見えた。そして、黒い沼が。そして、敷地を取り囲む、8本の鉄塔と、そして、樹林に隠された、古井戸。

私はここに、いつでも足を運ぶ事が出来る。そう、ここは廃墟と化した機巧館。目さえ閉じれば、私はいつでもここに来る事が出来るのである。

## プロロゴス

何処からともなく沈殿した漆黒の闇が、その館を、包み込む。その夜は窓の外にある漆黒の闇が、細かい霧となり、扉や窓の細い隙間から、部屋の中に流れ込んでくる。そんな事を思わせる夜に、包まれていた。

山奥にあったその館の中で、数少ない明りのついている部屋の中、その部屋は1階にあった。中心には、大きな丸いテーブルがある。

その丸い大きなテーブルの上に乗った蠟燭の炎が、まるで生物のように、くねりゆらめいていた。

その周りを取り囲む複数の人間達の顔を、その蠟燭の光が、不気味に照らしている。部屋の時計は、すでに午前零時を回っていた。

テーブルを取り囲んだ椅子で、1番中心とも言えるべき場所の椅子だけが、妙に別のもので異なっていた。それ以外の椅子は、その椅子とは、明らかに異なっていた。そして、誰もその椅子に座ろうとはしない。

その椅子の隣の椅子に、1人の男が座っている。いかめしいという表現が、一番当てはまるのだろうか。その広い肩、筋肉で占領された太い腕と腿は、冬、これだけ厚い服を着ているにもかかわらず、外からも窺える程のものであった。――

その叫び声は、間違いないく3階の部屋からのものだった。その場にいた人間達が、ほとんど同時に反応した。

「父さんー！」

男は叫び、さらに叫ぶより早く、先頭を切ってその部屋を飛び出した。

一気に廊下を駆け抜ける。その間この男は、3階の灯りのついていた部屋にいた「父さん」つまり父親についての考えを、思い巡らせなければならぬ。あの父親の事だから、わけが分からなくなつて、ただ叫んだのみかもしれない。しかし、男は知つていた。自分の父親には、避ける事のできない、重い悪魔の影が、常につきまといつている……。

階段を駆け上がり、2階まで上がった。3階はこの先だ。

今まで毎日のように見てきたこの階段が、父親の安全を心配しつつ、全力で走り抜ける階段になるとは、あまり考えていなかった。

3階に到着した。男は、不気味な彫刻の施された天井の下、細い廊下を、一直線に走り抜けた。男は、すぐに部屋の前にやつて来た。すぐに扉に手をかける。しかし、中から鍵がかかつており、開かない。

「父さん！」

男は、叫んだ。この男は、これだけの歳になりながら、自分の父親を「父さん」と呼ぶ事を忘れない。さらに、こんな事態の中ででもだ。

男の叫びに対し、奥から年老いた老人の、弱々しい声が聞こえてくる。

「ああ、幸弘……闇が……窓の外から、闇が流れ込んでくる……闇の魔獣が来た……闇燕が……もう駄目だ……」

「父さん、しっかり！ 扉を、開けてください！」

「……うっ……うぐぐ……」

「父さん！ 父さん！」

「……」

声はだんだんと細くなつていき、やがてまったく聞こえなくなつた。

「くそっ！」

男は、その頑丈な体で、扉に突進した。しかし、扉は壊れない。1回……2回……3回……4回……。

「バキーン」

やつと、扉の3つある蝶番のうち、一番下のものははずれた。

男は、扉を今度は足で蹴った。しかし、びくともしない。男は、下の蝶番に手をやった。しかし、ここで男はこの行為が、自分の手の負傷という二次災害に及ばないともかぎらない事に気付いた。男はやむをえず、もう一度扉に体当たりした。

「ガシーン」

すると、今度は上の蝶番がはじけ飛んだ。男は、思い切つてその扉を両手で力一杯に叩いた。すると、最後に扉の真ん中の蝶番が、横に折れるように捻じ曲がり、それを固定していた螺子ごと、はじけとんだ。男は扉を部屋の中に押し倒し、中に踏み込んだ。ここまで、およそ30秒程だ。

「父さん！」

男は、部屋に踏み込んだ。が、そこには誰もいない。

「父さん？」

男以外の人間も、扉の前に集まつてきていた。

「父さん！」

男の後ろからも、次々と他の人間が部屋に踏み込んで来た。部屋の中には、確かに誰もいない。立ち並ぶ本棚、絵画の道具の入った複数の戸棚、そしてその他の道具類。しかし、その中に男の父親の姿はない。負傷した体も、魔獣によつてむしばまれた死骸さえも見つからないのだ。蒸発……とでも言うべきなのだろうか。

「鷹一郎様は、どうなさつたのでしょうか？」

男の後ろに立っていた執事らしき男が、男に向かつておろおろとたずねた。

「うるさい！ あつちに行つていろ！」

男は右腕で、年老いた細長い執事の体をはねのけた。

男は、部屋の奥に歩み寄ると、開いた窓の外を見た。男は、部屋の外から父親の声を聞いていた。父親が中にいた事は、間違いない。さらに、ここは3階。この部屋から出るとすれば、この窓だけだ。しかし上にも下にも、ここから飛び移れるような場所はない。男の父親ならば、いくら老人とはいえ、ロープを使った特殊部隊のような技ならば、平気でやり得るだろうが、そこで逃げ込む場所が、そこには皆無だった。しかも、30秒たらずのうち、だ。この男でさえ、おそらく無理だ。

男は窓の下に目をやった。下にある沼——子霊沼の暗い水面に、波紋の広がった様子はない。男の父親なら、ここにさえ飛び込みかねない。が、水面に波紋を立てずに飛び込む事は、不可能

だ。飛び降りた可能性は、否定される。

しかしだ、男の父親ならば部屋から消える事くらい簡単かもしれない事も、確かなのだ。あの父親だ。やっても、おかしくはない……。

「西の奴らでしょうか？ 月乃や花乃のたくらみかもしれません。」

男の横から、男よりも少し若いくらいの、青年というには多少歳を取りすぎている、背の高い男が口を挟んだ。

「そうかもしれないな。」

この館に住んでいる人間達の中には、そういった事をする人間がいたとておかしくない。

「月乃達、お父様をどこにやつたのかしら？」

後ろにいた、50代前半という感じの、いかにも高貴な風貌の婦人が、つぶやくように言った。そこで男は言った。

「……雪乃姉さん。もしかすると、父さん程の人ですから、ちよつと僕らの知恵を試すために、やつた事かもしれません。」

「……そうね。そうかもしれないわね。」

「きつと、出てきますよ。何しろ、あのお父さんなのでですから。それに、西の奴らに、こんな事が考えられるとは思えない。」

何なのだろう。この、異様な雰囲気は、まず、話し方だ。異様という他の何でもない事は、明確だ。しかし、ここに住む人間達

は、このような異様な言語を、ごく日常に使用しているのだ。さらに、この親しい関係にありながら漂う、何となく、おたがいに騙しあっているような、たがいに心の底では笑い合っているかの

ような、異様な雰囲気、疎外感とでも言おうか。そして、この男のしやべり方。まるで、世に口を開く、戦争直後の裕福な暮らしをしていない、少年のようではないか。その野太く、力強い声の内容は、果たして少年であった。さらに、人によつて使い分ける数々の言葉からは、またも過去の、身分制社会を連想せざるを得ない。

そして、ここにいる人物達の「父親」に対する考え方。通常の人間達とは、明らかに異なっている。おかしいと言わざるを得ないのかもしれない。父親を偉大と思う一方、まるでいたずら好きの子供のような、取り扱いであった。

「どうしましょう？」

先ほどの長身の男が、再び言った。

「いいわよ、蒲一郎。この館には、声屋敷の人間以外、絶対に近づけない。それを忘れたの？」

「……分かりました。母さん。」

男はふと、もう一度窓の外に目をやった。雪だ。

「姉さん。雪ですよ……」

男はその時、初めて気付いた。今起こったこの事こそが、あの夜、自分の父親が言っていた、千言めいた言葉の、意味なのではないか。いや、そうに違いない。

「……姉さん。」

男は、先程の女に向かって、静かに、自分の決心を告げた。

ともかく今は、父親の言っていた、あの人間を呼ぶ事が、第一だろう。

女は男の言葉に対し、しばらくの間沈黙を続けていたが、やがてその重い口を開いた。

「……そうね。きつと、そうだね。」

女の口調は、問題の深刻さとは反対に、かなりの軽いものだった。

男は、深く息を吐いた。胸もなく、終わる。ずっと繰り返されてきた、この異様な日常も、ついに終わりを告げるのだ……。

この時点で、この場の人間達は、この後次々に起きる狂気の連続殺人を、完璧に予知する事は、出来なかった。そしてこれが、永久に続く狂気の世界への階段をずっと閉ざしていた。そして今、静かな旋律が音も無く、崩壊を遂げたその館を今、包み終わつた。

## 序篇 探偵

霧を連想させる白い光が、朝陽を浴びる地面から立ち昇っている。陽に照らされた土が、白く光り、その光が、白く陽炎のように立ち昇っているのだ。朝陽に照らされた風景であるにも拘わらず、それは幻想的な風景、という他の形容がないように思われた。東に低く昇っている太陽は、ちょうど正面に位置している。そのために、正面から来る人間の風貌等は、余程近付かなければ、確認する事は不可能であった。

——蒼穹。突き抜けるような蒼穹は、さらに高い位置で、どこか曇りが感じられた。空の真上から高度を下げながら見て行くと、色は徐々に褪せ、離れた場所にある樹木の頂上辺りでは、限りなく白に近付いていた。

そこで舞台は、暗転する。闇が全てを支配する。存在する漆黒の闇と、瞼を閉じた瞬間に訪れる闇。視覚において、両者を判別する事は不可能だ。——闇。瞼を閉じた瞬間の闇は、ノンレム睡眠に継続される事はない。脳が活動を停止するその状態において、そこには闇さえも、存在する事は不可能なのだ。

生まれつきの盲人は、どうなのだろう。その視覚はあるいは、通常の人間のノンレム睡眠中の状態と同様なのかもしれない。無論の事、そこに色は存在しない。暗い、という概念にしても、あり得ないだろう。

——この男は確かに、盲人だ。しかし、生まれながらの盲人ではない。

田園調布三丁目、ちよとど宝来公園の南側の、およそ1000

坪という巨大な敷地の中に、その男は住んでいた。年齢は、定かでない。

この男は、1000坪という、この巨大な敷地の中に、1人の執事と自分との2人で住み、20数名という通いの使用人を雇っていた。それは無論、東京にも有数の資産家であった。この男の父親の資産と、警視庁の幹部を勤める弟の収入があつてこそその事である。通常の食事をするとすれば、弟と呼ばれて行く事のある、某ホテルの最上階に位置するフランス料理レストランでの食事くらいであろうか。酒はワイン以外を口にせず、煙草も吸わないようだった。さらに、この男は弟からの食事の誘い以外、この1000坪の土地の外に、出ようとしないのだ。

外見と云えば、長身、という形容のみが当てはまつた。服装において特徴的なのは、円形のレンズを袴つ、濃いサングラスだった。言うまでもなくこれは、男が盲人であるがためのものだ。この男は過去に両眼を摘出し、そのために現在では視力を失つてしまつていた。

それ故に男は、書物を朗読させた。執事の法村夏彦が、普段その朗読の役目を果たしていた。その執事の朗読の速度には、一般社会における生活人の感覚からすれば、驚異的なものがあった。ある時には、何人もの使用人を呼び、同時にかなりの量の書物を朗読させる事もあつた。その重なり合う複数の音声を、この男が全てとらえている事を、屋敷の使用人達は知っていた。

男には、2つの犯罪歴があつた。そう、警視庁の幹部の弟を持つこの男には、前科があつたのだ。警視庁の幹部の弟とは、横溝

という点でいくらか助かつているのかもしれない。男は父親が妾に産ませた、いわゆる戸籍で言う「子」だった。

男は、多量の書物を所持していたが、その大半は、海外の言語で執筆された、さまざまな原書であつた。

IQ……つまり知能指数についてだが、米国の心理学者コックスの、あらゆる歴史上の人物の知能指数の推定によると、ナポレオンは145、リンカーンは150、モーツァルトは165、レオナルドダヴィンチが180、ニートンは190、ゲーテは210となつていて、が、この男のIQ、知能指数は、多分それらを遙かに上回ると思われた。もしも、犯罪など犯していなければ、あらゆる学問において、世界を制していたであろう。

この男が一般社会における生活人の追求する、いわゆる「人間性」と呼ばれるものを、全くという表現が過言でない程に所持していないという判断は、この男を知る人間達の男に対する印象の、大半を占めているものだった。人形……そう、何か得体の知れない力に動かされる操り人形、と言う者がいた。

男は、その1000坪という、巨大な敷地を持つ庭の、築山、池、林の中を、延々と散歩にふけていた。

2月4日 日曜日

感熱紙が電話機から滑り落ち、電子音が一度鳴り、ファックス

機は静止した。支倉俊之はその紙をフーリングの床から拾い上げ、紙面に目を通した。仕事に関係するものであった事は、予想していた事だ。しかし、その事で支倉は、多少の安心を得た。

支倉と妻の現在の別居という状態が、離婚という未来に結びつくのかどうかは、現時点において定かではなかった。その事は、日に日に支倉の苛立ちを募らせ、今では、その事を出来るだけ脳裏から追いやるようにしていた。

東京警視庁の刑事を職業としている支倉に、本部からの指令があったのは、1週間程以前の事だった。実際に支倉にそれを告げた人物も然る事ながら、その命令は警視庁の幹部である市村秀二郎から直々に出たものという事だった。命令内容は絶対に極秘と指令されていたが、その理由は、その内容を聞き、理解できた。それは、「機巧館で起きた事件に当たれ」というものだったからだ。そう——あの機巧館なのだ。すぐに、脳裏に地図を描くことができた。鳥取県岩美郡国府町、赤姫山の山腹。支倉はそれ以前から、機巧館に興味を持たないわけではなかった。と、言うより、多大な興味を持ち続けていたのだ。ただ、疑問なのはなぜその任務を任せられるのが自分かという事だった。そして何故、山陰の鳥取などで起きた事件に、東京警視庁の刑事が派遣されなければならないのか、という事だ。

ともかくも、極秘の理由はもう1つ考えられた。命令は、「布川京太郎と一緒に機巧館に向かえ」というものだったからだ。

——警察関係者という職業の中で、布川京太郎という名の存在を、支倉は知っていた。それが「盲目の探偵」という名で呼ばれ

ている、という事も、である。警察としては、あまり、部外者に詳細を知らせたくない猟奇事件の解決を、いわゆる「幹部」といふべき役柄の人間が、依頼しているらしい、という事だった。しかもその人物は盲目である、というのだ。奇妙な話、というよりも、現実である事が疑わしかった。そう……その、布川京太郎なのだ。

しかし何故、自分と一緒になのだろう。しかも、自分と布川京太郎、機巧館に行くのは、たった2人という。人員をそれ程までに削減出来ない程の大事件は、無論の事、現在発生していない。言うまでもなく、派遣される警察関係者が自分1人という指令も、事実とは考えられない。しかし、機巧館と布川京太郎、という2つの情報から、その指令も多少は理解可能なもののようにも思われた。

支倉は、住んでいるマンションの部屋を出ると鍵をかけ、その車のキーと一緒にキーホルダーにつないである鍵を、いつものようにコートのポケットに入れた。別居した妻が連れていった娘から、幼稚園の参観日にプレゼントされた、粘土細工のキーホルダーだった。あれからまだ1年半、もう1年半になる。

支倉は、マンションの3階から1階までの階段を降り、マンションの入り口まで来た。自分の304号室の郵便受けに何か入っているのが目に付いたが、戻る時に取ろうと思ひ、車に向かった。マンションの前の路上に駐車されている白のセダンのドアに、ポケットから取り出したキーを差し込む。ドアに触れた手

から、静電気が伝わり、反射的にドアから体を離れた。その後ゆつくりとキーを回し、鍵穴から引き抜くと、ドアを開け、すぐにそのキーをイグニッションに差し込んだ。

寒気を覚えた。暖房のスイッチとラジオのスイッチを、同時に入れる。目の前の小さな画面に、AM7.23の文字が静かに浮かび上がった。今日の8時、田園調布3丁目の布川京太郎の自宅を訪ねる。この事は、1週間前から、ポケットのスケジュールノートに記してあった。

静かに車が大通りに出た。目的地への道は完璧に記憶していた。

支倉は目的地に向かいながら、青年時代の妻との付き合いを想起していた。自分が警察学校に通っている間、特に接触の多かった教官がいた。そのただ1人の娘が、妻だった。別居した後には想起を試みる妻の姿は、その当時の妻だ。時間に正確だった、という事を、明確に記憶していた。

支倉と始めて会った時、黒い髪は、細くしなやかな首筋に触れて伸び、肩までは届かなかった。開いた眼は、外側に行くにしたがって極端に細くなり、つり上がり気味だ。鋭い、という形容が合っている。眉間のすぐ下から通った鼻筋の下にある小鼻は、上品な形にまとまっており、小さく尖った顎に達するまでの頬は、極端に直線的な描写で描かれている。そして、まだ高校生だというのに、薄く唇にひいていた桃色の口紅が、初めて会った時は莫迦に生意気に見えたのを覚えている。スカートの裾を手前に引いて、ベンチから立ち上がる姿は、今でも脳裏に記憶されていた。

——何故、別居などする事になったのだろうか。どうして、こうならなければならなかったのか。過って、アクセルを強く踏み込みかけ、急いで我に戻った。

そう……何よりも、娘達のことだった。恵子、そして真知子。今はそれぞれ中学1年生と小学5年生になっているのだろうか。あれから1年半、娘達は父親のいない父兄参観日を、どのような思いで過ごしたのだろうか。その事の方が、妻への思いよりも、強いようにも思われた。2人の娘。あれ以来、会っていない。

その時支倉は、妻が自分がまだ警察学校に行っていた頃、1度自殺未遂をした事を、思い出した。なぜ自殺などしようとしたのかは、今でも分からない。こんな状況にある妻と自分なのに、今でも、もう今更どう思われてもいいと、電話をかけて、あの時なぜ自殺を試みたのかと聞いてみようとは本気で思う時があった。それは支倉が、妻が自殺をはかったのと同じ頃、祖母の葬式から家に戻る車中において空腹を感じた際の罪悪感に、どこか類似しているようでもあった。妻が自殺未遂をして病院に運び込まれた時、連絡を受けると、支倉はすぐに自分のマンションを鍵もかけずに飛び出し、病院に向かったのを覚えていた。手を切った、と聞いていた。支倉が病院へ到着した時点で義父には、医師から「命に別状はない」と報告されていたようだった。支倉の義父が、警察学校の教官だったのは、前述した通りだ。支倉と妻の交際を知り、それを認めていた義父は、娘と支倉との間に何かあったものと思っただけ、顔を見るなりいきなり殴りかかって

きた。支倉は黙って殴られていたが、慌てて止めに入った医師のために、助けられた。その後だ。妻は意識を取り戻し、病室に入ってきた父親に本当の理由を話したらしい。すると病室から出てきた妻の父親は支倉に、「済まなかった。君には罪はなかったようだ」と話してきた。「何故彼女は自殺なんか……」聞いた支倉に対し、相手は、「君は、知らなくてもいい。娘とは、今まで通りに付き合ってやってくれ」と話した。妻の父親の手前、妻にはその日から、別居して今日まで、その話題を持ちかけた事はなかった。が、別居の理由には、もしかするとその事が関係していたのか、などと莫迦な事も考えたりもする。

別居の真実の理由が、2人の弱さにあつた事は、分かり切つていた。一般社会における生活人——即ち社会の成員として、合理的に存続する社会に適応するには、当然の事、事態の核心部分に纏わる疑惑は、個人の内部において、時に隠遁に存在しなければならぬのだ。2人に、それが出来なかつたまでの事だつた。やはり今でも、後悔はしているのかもしれない。あの時、ああ言つていれば、ああやつていればと。しかし、自分の思惟が、あれ以来会つた事もない妻や娘に何らかの感情的変化を起すものでない事は、理解していた。

正面の時計を見た。それにより支倉は、指定された時間よりも多少早く目的地に到着しそうな事に気付いた。

——まあ、いい。

支倉は指定された午前8時、という時刻を再び想起した。8時という時刻は、言うまでもなく、相手が指定した時刻だつた。

田園調布の街並みは、見えてきている。そろそろ視界に入るはずの宝来公園の南に、目的地はあるはずだつた。

市村秀二郎は、暇を持て余していた。警視庁幹部という役柄で、やつととれた休暇に、妻と娘を驚かせようと思つていたので、妻は近所の婦人方と外出し、娘は友達と買い物に行く、と言う。子供が何を買っているのかは知らなかつたが、友達と一緒に買い物などと言ひ出したのは、いつ頃からだろう。

結果、市村は久しぶりに家の書庫で本を読む事になつた。書庫には窓からよく日が当たつており、今が2月で気温が低い事実を除けば、書庫にも読書にも理想的な空間だつた。市村は読書を、趣味としても意識していた。しかし、机で一通り、青年時代に読んだ記憶のある小説類に目を通したところで、ふとある事を、思い出したのだつた。とは言つても、格別に重要な事柄でもない事実に加え、生産的な思考とも思われなかつたのだが。

ともかくも、そういった理由から今、スケジュールノートのページを破り、奇妙な図を書いていくわけだ。自分でも何故、このような行為に時間を費やすのかとは思つたが、それだけ例の事件が、市村という人間に対し、強い衝撃と印象を与えていた、という事だろう。

市村の腹違いの兄……と言つても実際はそうでないのを市村は自分で理解していたのだが、その人物、布川京太郎が最初に殺人事件を解明したのは、今から何年前だつたらう。市村と布川と食

事に行っていた時、事件を知らされ、2人で足を運んだのだ。

「大理石館」は、そのレストランから然程離れた場所にはあるわけではなかった。そして、その館にあるものは、何もかもが大理石、即ち「マーブル」で作られていたのだ。そこに、大勢の使用人達を除けば、たった1人住んでいた老人が、高見中太郎だった。戦後事業で成功した資産家であり、そのありあまる資産を使い、すべてが大理石という家を建ててしまったのだ。中太郎氏の部屋については、床から壁から天井から机から椅子からソファから寝台から窓枠まで、すべてが大理石だった。そこで、殺人は起こった。その中太郎氏が、その部屋で、怪死を遂げたのであった。市村はその時、まだ今の役職にはついていず、とりあえずは警察関係者の幹部に近い役柄、という事だった。ともかく、市村は布川と共に、その現場に行く事にしたのだ。

状況は、極めて不可解なものであった。老人は、自分の部屋の中、鍵は閉めてはいないものの、その扉だけはしっかりと閉め、そのすぐ奥に倒れていた。老人の胸には銃創が確認でき、調べたところ、貫通せずに内部に弾が残っているはずなのだが、それが全く見つからないと言う。凶器が現場から発見できなかったために、拳銃が凶器でないのかもしれない、という説も出た。しかし、館の召使い達は発砲らしき物音を確かに耳にしているというのだ。屋敷全体が振動するような、巨大な轟音が、鳴り響いたという。死体を発見し、警察に通報したのが午前11時。発砲の音はその日の午前零時ほぼちようどという事で、死亡推定時刻もほ

ぼ一致している、という事だった。午前零時の2、3分前に、中太郎氏は自分の部屋に向かい、発砲音はその直後聞こえたという。しかし警察への通報が何故ここまでに遅れたのかという疑問が、無論の事発生する。それについて使用人達の取り調べを行ったところ、中太郎氏本人が自分の部屋には絶対に入るなど周囲の人間に常時訴えており、そのために近付く者はなかった、というのだ。部屋の前まで行ってみても中太郎氏はおらず、部屋の中という事で、誰も手を出せなかった。翌朝の11時頃になってやっと、1人の使用人が中に踏み込み、そこで死体を発見したと言う。しかし、発砲らしき音がした後11時間も黙って見ている、というのはどう考えてもおかしかった。その辺りが、この事件と大理石館、そしてこの事件を構成する諸要素における異常なところであると、布川は後にも言っていた。

その時の現場の状況を、市村は図にしていたのだ。現場の状況は、奇妙という以外の形容のないものであった。

老人は扉のすぐ奥に倒れていた。その正面に、大理石のソファがある。なぜかその下を中心に、部屋には水滴が飛散していた。が、その理由は程なく分かった。部屋には1つだけ大理石でない、金魚鉢が置かれており、その金魚鉢が床に落ち、割れ、水が散乱していたのだ。金魚鉢に、その時まだ金魚は入れられておらず、水のみが入っていた、という事だった。——金魚鉢の水が散乱していたのは、硝煙反応を隠すための、犯人の工作と思われた。

部屋の奥には、壁に食い込んだ、大きな壁時計があった。オル

ゴールつきの時計で、毎日午前零時という真夜中に、オルゴールが音楽を奏でよう作つてあるという。老人の悪趣味の1つで、どうやらポーの赤死病の仮面の時計をモデルにしているらしい、という事だつた。その時計さえも、内部の機械はともかく、外見は全そ大理石なのだ。

凶器と見られる拳銃は、発見されなかつた。さらに、館の人間には、午前零時の時点で全員の現場不在証明、即ちEVIDENCEが成立しているという。つまり、中太郎老人を殺害し得た人物は、いないのだ。しかし、屋敷の外部の人間の犯行である可能性は、あらゆる方向から想定した上で、否定された。

布川は、その時既に、眼球を摘出していた。しかし、生まれ持つた、直感とも言うべきものだろうか——最初から布川という人間は、常人の域を越えた何かを所持していたが——そんな能力を使い、ごく普通に行動しており、周囲は最初布川が盲目であるとは気付かなかつた。そう……その動きは、まるで、通常人間の眼球が存在している位置以外の場所にも、別の視覚器官が、発達しているかのようだつた。

布川は、その時すぐに市村に現場の状況を確認してきた。市村は、自分の目に見えるものを全て説明した。その時布川が言った言葉を、市村はまだ覚えていた。「オルゴールに、紐などはからみついていませんか？」壁時計のオルゴールの部分には、四角い穴があいており、オルゴールの内部がそこから見ることができた。その時、ちょうど鑑識関係の人間が、時計のオルゴール部分を、調べているところだつた。すると、そのオルゴールの筒状の

本体に、細い糸のようなものが巻きついていて、痕のようなものが見つかつたのだ。——それは恐らく、ピアノ線であると思われた。市村はすぐにそれを布川に報告した。すると今度は布川は、大理石のソファの下に、何か傷がついていないかと、聞いてきた。そう、その通りだつた。先程から目に付いていたのだが、それとなく、説明では省いてあつたのだ。実際、ソファの下近くには、多少目立つ、傷があつたのだつた。館の使用人たちに聞いてみると、それは以前からあつたものではないらしい、という事だつた。鑑識の人間達に、複数の人数で、重い大理石のソファをどかさせると、大理石の床のその部分には、大きな亀裂が走り、一部砕けていた。そして、最後に布川は、天井に何か突起物のようなものはないかと、市村に聞いた。市村が天井を見ると、それはすぐに見つかつた。何かコの字型の、突起物がついている。使用人に聞くと、それはこの天井に使用されている大理石の板を、遠くから輸送してくる時に、取り付けたものだという。主に、この屋敷をつくる時の、クレーン輸送の時に使つたそうだ。見ると、ソファにも寝台にも机にも、同じものがついていた。家具の突起物は、重い家具を模様替えの時に動かすためのものらしい。市村は、それもすぐに布川に報告した。もしかすると市村の中には、この時点で布川がこの事件を解決してしまうのではないかと、という期待のようなものがあつたのかもしれない。もしそうだとすれば、市村の期待は見事的中した事になる。布川は次の瞬間、この不気味な猟奇事件を、その場で解決したのであつた。市村は、それを自らの聴覚で、布川の口から、聞いた。

布川の話によると、まず、凶器は銃ではなく、水、という事だった。市村も外国の推理小説などで読んだ事があった。水を弾丸の形にけずり、銃に装填して撃てば、撃たれた人間の体内で弾丸は水となって溶け、弾丸は消える。その応用で、人間の血液を弾丸の形にけずる、塩の塊を弾丸にするなどがあったと思つた。しかし、この事件では銃等の凶器は見つかっていない。しかし布川は、銃は大理石のソフアーだった、と説明した。市村は、そこでソフアーに銃弾発射の特殊なメカニズムがあるのかと考えたが、鑑識が調べた後、そのような事実が出てくるはずはない。そこで布川は、弾丸を発射する動力がソフアーと、壁時計のオルゴールにあると言つた。

まず、ピアノ線の一端をオルゴールの筒状の本体に固定する。そしてそのピアノ線のもう一端を輸送に使つた天井の突起に引つ掛け、その先を下にあるソフアーの突起に結びつける。それからオルゴールの本体を少し回し、ソフアーを上を持ち上げてから、その下に、時間を見計らつて氷の塊を置く。そして午前零時、中太郎氏は部屋に入る。するとオルゴールが鳴りだし、ソフアーが持ち上げられていく。そして突起のところまで来ると、ピアノ線は張りつめられる。そこでちょうど糸が切れるように、細工があつたのだろう。そこで糸は切れ、ソフアーは下に落ちる。水は砕け散り、弾丸となって中太郎氏の胸に食い込み、後は溶けてしまふ。数学的なメカニズムを使えば、中太郎氏に向かつて水が飛ぶように仕掛けはできる。部屋の中に水が散乱していたのは、砕け散つた水が溶けたものだったわけだ。金魚鉢が割れ、散乱した

水は、水を水がとけたものと感づかれないためのカムフラージュだ。水の一片が金魚鉢にも当たるようにしてあつたのだろう。最初はその事を、硝煙反応を誤魔化すため、または、犯人と中太郎氏の乱闘の結果などと思われていたが、いずれも違つたという事になる。そして使用人達の聞いた発砲の音というのは、ソフアーが床に落ちた音で、傷はその時にできたというわけだ。そう、仕掛けが進行する間、おかしな物好きな中太郎氏は、自分を殺す仕掛けとは知らずに、面白がつてこれは何だろうと、凝視してゐたというわけだ。

はて。これだけの細工をする時間があつたのは、誰か。それは屋敷の使用人の一人の、野沢茜ただ一人だった。午前零時の不在証明は成立しているものの、その後、見た者はいない。犯人は、野沢に決定だつた。話しによれば、発砲音の後、やはり野沢以外の使用人達は、「いくらなんでもおかしい」、「様子を見に行つた方がいい」と言つてゐたのに、野沢が、「やめた方がいい、あの人の事だから、むやみに行つたら何をするか分からない」と、行こうとするのを引き留めていたそうだ。これは、水が溶けるまで事件の発覚を防ぐための工作、と布川は説明した。聞くところによると、老人の部屋に金魚鉢を置いたのも野沢だと言ふ。驚きながらも布川の推理を市村が野沢や警察関係者を含めた全員に話すと、野沢茜は自分の犯罪を認めた。

動機は野沢本人が説明する事となつた。まず、野沢がここで動いてゐた理由から説明が必要があつた。野沢の父親は既に他界してゐたのだが、中太郎氏の昔の友人であり、その関係で、こ

れといった仕事もなかった野沢は、大理石館で家政婦として働く事になったらしい。実は野沢は母親までも他界しており、黒胆汁質的な性格から友人もおらず、趣味等もないようだった。頼りになるのは、昔の父の友人の中太郎だけだったと、そう思ったそう。それも屋敷で働いていた理由の1つらしい。しかし、中太郎氏は野沢の思っているような人間ではなかった。人格も歪みきっているばかりか、中太郎氏は、毎日のように野沢をつかまえては自分の部屋に押し込み、強姦同然の性交渉を働いていたのだ。オルゴールの音に合わせてその行為を進める事を中太郎氏は遊戯の装飾としていたらしく、屋敷の使用人の殆どは、実際、その事実を知っていたらしい。それでも、誰もその事を、口にしようとはしなかったのだ。

結局、野沢茜の目的が、最終的に、中太郎氏の殺害へ至った、という事だった。手錠をかけられ、部屋を出る野沢の姿を、市村は現在でも記憶していた。

布川は後になって、その事件に対し、ある見解を述べた。もし、殺害のみ目的ならば、もっと別の方法があったはずであり、あのような複雑なメカニズムで殺害を試みたのが、不可解だ。それに、自分の罪をその時隠しても、後の人生に全くの希望の持てない状況で、どうしてあのような事を試みてまで、自分の罪を隠さねばならなかったのか。そう——恐らくこの事件が報道関連で発表されれば、布川でなくとも、多くの人間が次々と真相を指摘してきていただろう。野沢にしても、それは理解出来たはずだった。つまりは、野沢のつくった状況は、野沢にとっても、全

くの意味を成さないもの、とも取れるのだ。

何故野沢は、そのような事をしなければならなかったのか。

その他にも幾つかの、一般には全貌の知られていない猟奇事件を、布川は今日まで解決している。しかし無論の事、布川京太郎の真の能力は、そういった事柄とはさらに別の部分・分野に存在していた。布川京太郎という人間に度々与えられる「天才」という言葉にしても、無論の事、そういった能力に対し与えられるものだ。しかし、度々「天才」という形容を与えられる種々の兄に対し、市村はある種の恐怖をも抱いていたのだ。

「天才」という名詞を示す英語である「genius」という言葉は、かつて豊または幽鬼を表す言語として用いられていた。生来性犯罪人説で知られるイタリアの精神医学者ロンブローゾは、天才と狂気を紙一重とする、天才狂気説を発表している。ゴルトンは、4000人に1人の割合で出現する天才を卓越した人、即ちエミネントと呼び、100万人に1人という天才を超越した人、即ちイラストリアスと名付けていた。

ロンブローゾ、ゴルトンの両学者とも、天才、という言葉は、その異質性故に畏れられるもの、との意味で使用している。市村の意識する、布川に対し与えられる「天才」との言葉は、常人と連続した水準で意識される現代的意味での天才としてのものではなく、ロンブローゾやゴルトンといった学者の唱えたような、畏怖されるべき存在としてのものであるのかもしれない。

支倉は敷地を囲む塀沿いに車を置くと、屋敷の門前に立った。目前の屋敷には、館、という形容の方が適切であるようでもあった。その大きさには、ものすごいものがあった。

約1000坪という敷地は、築山、池、低い樹木の建ち並ぶ林に覆われ、その奥に佇む布川京太郎の住居は、その中で、奇妙に形容しがたい、異様な存在感を放っていた。支倉は門の前に立ち、周囲を見回した。そこで門の横に呼び鈴のボタンがある事を気づき、支倉はそれを押した。

横に、塀に埋め込まれた郵便受けがある。しかし、表札がどこにも出ていないのが気にかかった。確かにここが布川邸である事は周知の事実であろうが、表札がない、というのは奇妙だった。もしかすると、屋敷の玄関の所にあるのかもしれない。支倉はそんな思考を巡らせた。

「はい。」

我に返ると、どこからか声が出た。おそらく何らかの装置を使用し、屋敷の中から話しているのだろうが、今声を自分に聞かせている装置がどこにあるのかは分からなかった。代わりに、塀の上に取り付けられた監視カメラらしきものを見つけた。

「今日の午前中、布川京太郎さんのお宅に向うことになっていた、警視庁の支倉です。」

すると、

「警察手帳を見せてください。」

という声が聞こえた。その声に、一瞬支倉は、圧倒されたようだった。支倉は、すぐに背広の胸ポケットから出した手帳を、カメラに向かって差し出した。声の主は、老人のようだった。この「屋敷」の執事といった役柄の人間だろうか。支倉は、思考を巡らせた。何か、その冷静かつ冷徹な口調には、抵抗出来ないものがあった。

「——どうぞ。」

再び声があると同時に、目の前の鉄の門が静かに左右に開き始めた。支倉はすぐに、小さな頃に見ていた記憶のある、テレビアニメを想起した。

——こんな事が出来るようになったのか。

ふと、脳裏に浮上したその言葉に、支倉は、内心動揺した。突如脳裏に浮上したその言葉を、支倉は、想定していなかった。

「お入りください。」

もう一度声が出た。支倉は手帳をしまおうと、急いで門を通過し、庭に作られた道を屋敷に向かって歩きた。後ろの門が、静かに閉まっていく。屋敷まで、どれだけあるのだろう。少なくとも、30m程はありそうだった。

支倉は屋敷の玄関にたどり着いたが、そこにも先程気にかかっていた表札は見えなかった。しかし、表札があるとすれば、正に掛けられているであろう場所に、直立不動の姿勢で立つ、初老の男を見つけた。どうやら、男が先程の声の主らしかった。支倉が頭を下げるより早く、男が一礼した。

「おはようございます。——警視庁の、支倉俊之様でございます

ね？」

相手の言葉に支倉は、急いで返答した。

「ええ、そうです。」

支倉は、動悸を感じた。明らかに動揺している自分に、支倉は気付いていた。

同時に、ここまで自分を動揺させる原因を、支倉には理解しかねた。何かしら、予感めいたものの存在を感じた。微かな、そして確かな、崩壊の予感——

「私は、この屋敷の執事をしております、法村夏彦と申します。布川様は只今、お部屋におられますので……どうぞ、こちらへおいでください。」

やはり、男は執事だったらしい。執事——その言葉に、支倉は無論の事、馴染んでいなかった。

支倉は言われるままに、玄関に足を踏み入れた。執事の法村は、支倉の先に立って歩き出した。完全な西洋式のものであり、靴を脱ぐ事は、しなくても良いようだった。

「この屋敷は、15年程前に、布川様のお父上が、布川様のためにお建てになられたものです。屋敷そのものの敷地は200坪ほどですが、敷地の全体面積は、およそ1000坪でございます。」

その時目前に、エレベーターらしきものが現れた。

「これにお乗りくださいませ。」

執事——法村は言うのと、自分から先に、エレベーターに足を踏み入れた。屋敷は外見からは2階程に見えたが、エレベーターの中に入ってみると、3階までのランブがあった。布川京太郎の部

屋は、2階か3階なのだろう。支倉はエレベーターの理由を、「盲目の探偵」であると聞く布川京太郎の身体的障害のためなのであろう、と支倉は考えた。

この屋敷を作るのにどれだけの費用がかかったのかは、計り知れない。費用を出した布川京太郎の父親という人間の財力を、支倉は想像した。

法村は支倉が中に入ると、3階のボタンを押した。エレベーターは普通のものよりもゆっくりと上昇していたが、程なく3階で止まった。扉が開くと、細い廊下の奥に、1つだけ扉が見えた。それ以外は、左右にも扉は見当たらない。

——どうやら3階の部屋は、そのみのもようだった。

「あの突き当たりが、布川様のお部屋です。多分、支倉様をお待ちだと存じます。」

支倉は、法村について廊下を進み、扉の前に来た。そこで、法村が扉をノックした。

「布川様。本日の午前8時にとお呼びしておりました、警視庁の支倉俊之様が、お見えになっております。」

奥から、声がした。

「ええ。お通ししてください。」

——支倉は無論の事、今まで、布川京太郎に会った事はない。その声を聞く事も、初めてだった。

法村が、扉を開けた。しかし、部屋には誰もいなかった。「バルコニーに、おいでのようでございます。」

法村は言うのと、支倉を部屋の中に案内した。部屋の一面は書棚

で覆い尽くされており、その一角に、扉にガラスの入った棚が見えた。部屋の隅には机があり、少し離れたところに背の低いテーブルがある。どうやらそれは応接用らしく、向かい合った2つのソファがあった。部屋の扉と反対側の壁は全てはめ殺しの窓になっていてようで、その近くに、バルコニーに出るためらしいガラス戸がある。

——その向こうのバルコニーに、1人の男が立っているのが見えた。長身——恐らく190cm程か。横顔に、恐らく盲目のためであろう、レンズの黒く刷かれた眼鏡が確認できた。

支倉は、法村を見た。

「布川様。支倉様を、お通ししました。」

法村は、バルコニーの布川に向かって言った。

「——ええ。すみませんが、少し、待っていてもらってください。」

それは2度目に聞いた、布川京太郎の肉声であった。

その時支倉は布川京太郎の手に、小さな袋のようなものを見つけた。透明な袋の中に、何かしら黄土がかったものが入っているのが確認出来た。

次の瞬間に、バルコニーに2羽の鳥が舞い降りた。

「あっ——」

支倉は思わず声を上げた。

しかし、その鳥は、思いもよらず布川の肩に片方ずつとまり、羽を下ろしたのだ。布川が、その鳥の嘴に、袋から出した手を、持っていくのが見えた。

どうやら、布川の手から、餌を受けているようだった。

「布川様は、この鳥を、放し飼いなさっているのです。ごいいます。」

法村は、言った。

布川京太郎が、鳥を飼っている。実際、同僚からそんな話を聞いた事があつたかもしれない。

餌を受けた鳥が布川京太郎の男の両肩から、飛び立った。

「すみませんでした。劉とブラウンに、餌をやっていたのですよ。」

布川が、こちらを振り向く。

支倉はそこで、初めて布川京太郎を見た。

その時支倉は、全身に電撃を受けたかのような衝撃が走つたのを感じた。次の瞬間支倉は、一時的に全身の機能が停止したかのように、動く事が不可能になっていた。

……その眼。支倉は一瞬、崖から深い海へ落下していく自分が、光り揺らめく海面を上に見つ、徐々に迫る息苦しさの中、海底に沈んで行くかのような錯覚さえ起こした。

その眼は、見えていない。それは、理解していた。第一、その眼があるべき部分は落ち窪み、深い翳りのみがある所にあり、眼球は既に無かったのだ。しかし、その事が反対に、見える者に与える衝撃を、一層強いものにしたのかもしれない。

窪みの奥にある、深い翳り。その奥から湧き起こる、あらゆる存在を超越した何か、そこに感じられた。

支倉は、息を呑んだ。

「劉というのは、昔ベトナムで対フランス抵抗運動を起こしていた義勇軍、黒旗軍の首謀者の、劉永福からとったものです。ブラウンというのは、南北戦争以前奴隷反対運動を組織し、極めて少人数の部隊で武装蜂起を実行した、ジョン・ブラウンからとったものでございます。」

法村の説明の半分以上を、支倉の聴覚は、とらえていなかった。——その感覚は、いつかの立ち眩みにも似ていた。支倉は思わず、その場に転倒しそうになった。一瞬の、眩暈。その視界が徐々に漆黒の闇に閉ざされていく光景を、支倉は一瞬、確かに認識していた。

「布川京太郎です。」

布川は支倉に向かい、握手を求め、右手を伸ばした。——その口元に、微かに、不可解な微笑が見えた。

支倉は、込み上げる恐怖に類似した感覚を振り切った。自分の右手を差し出された布川の右手に重ね、握った。

——それは、冷え切った鉄のようだった。

ジョンサン・ハーカーが初めて、御者に扮したドラキユラ伯爵の手を握った時の感触は、このようなものだったのだろうか。支倉は、ブラム・ストーカーの吸血鬼ドラキユラを、完訳版で読了した記憶があった。恐怖、という感情に類似しているかのようでもあり、あるいは眩暈、という形容が適切であるかのような、文章全体に広がる、あの雰囲気——目の前に立っている布川京太郎という人物のそれと、重なる部分があるようでもあった。

「——ともかく、そこに座って、話しましよう。」

布川は手を離すと、テーブルを挟むように位置するソファの一方に腰を下ろし、足を組んだ。

「どうぞ、こちらへ。」

法村も、支倉に向かい側のソファを勧めた。支倉はその時、ふいに、この状況から離脱したい欲望に捕らわれた。そう……率直に表現すれば、布川という人間と2人で話す事に、抵抗を感じたのだ。——

支倉は言われるままに、ソファに腰掛けた。支倉は法村の目を見た。布川と法村の2人が、どれほどの間、一緒に生活していたのかは分からない。しかし法村の眼にある布川への眼差しには、主人に対する敬意の念よりも、寧ろ強い畏怖の念が感じられるようでもあった。

「ええ……警視庁の、支倉俊之さんでしたね。」

布川は支倉の方に顔を向け、言った。その光を失った窪みが、支倉の方を向いている。

——その、既に光を失った窪みが、だ。

支倉の身体を、再び戦慄が駆け抜けた。

「はい。警視庁捜査一課で、刑事をしております。」

そこで布川は、口を開いた。

「——今回は、私と一緒に、機巧館に行く、という事でしたね。今月の10日の午後、羽田から鳥取空港に飛び、鳥取で車を借りて、深夜から11日の早朝にかけて赤姫山の機巧館に向かう……その予定に基づく手配が、警視庁ではされているようですね。支

倉さんも、ご存じでしたか？」

「ええ、聞いていました。」

「しかし何故……東京の警視庁の刑事が、はるばる山陰の鳥取などに行かなくてはならないのでしょうか？」

「——そうかも、しれませぬ。」

その時の支倉の応答は、答えになっていなかった。何故そのような返答を行ったのか、支倉の感じていた自身の不可解な動揺が、それを明確に物語っていた。

布川が、またもや微笑を浮かべたのが分かった。

「それに、何から何まで手配が整っているとは、少しおかしくありませんか。——そうでしょうか？」

「……ええ。」

ようやく布川の言葉が、支倉の聴覚から思考に繋がりはじめた。「……貴方は、どうして自分が、私と一緒に機巧館に行く事になつたか、知っていますか？」

そこで、布川は沈黙を挟んだ後、そう聞いた。「……いいえ、分かりません。」

「そうですね。」

今度の布川の笑いは、最も苦笑に近い微笑、という形容が当てはまるようだった。

布川は、言った。

「……支倉さんは、芦屋鷹一郎を知っていますか？」

「ええ、知っています。」

この瞬間、なぜか支倉の返事が今までと急変した。

「機巧館は、おかしな館です。——あそこに住んでいるのは、芦屋家の人間だけと言いますね。」

「ええ。」

何故だろう。まるで支倉の認識の上にあつた恐怖という重石が、その瞬間を隔て、仄暗い底に転がり落ちていったかのようだった。

「芦屋さんの絵画は、見た事がありますか？」

「——いえ、それ程は……あの『月影』という絵なら、テレビの芦屋鷹一郎特集で、見た事があります。」

支倉はその『月影』という絵を、題名しか記憶していなかった。しかしその絵画は何故か、芦屋鷹一郎という名の狂気の天才画家の画集やテレビの特集番組に、決まって登場していた。言っても、代表作、というようなものでもなかったように記憶している。

——支倉は何故か、その図柄を想起する事は出来なかった。

「……あれだけ見れば、もう十分でしょう。」

布川はそう言うと、再び微笑した。

……『月影』。その絵画がどのようなものであつたのか。支倉はやはり、思い出す事が出来なかった。

布川はまたも、少しの間沈黙していたが、やがて口を開いた。

「機巧館。支倉さんは、素晴らしいと思いませんか？」

「えっ？」

素晴らしい。どのような意味で、布川はその言葉を使ったのだろうか。同時にその言葉は支倉にとって、奇妙に馴染み深いもので

あるかのようでもあった。

「山奥の人を寄せ付けない館の中で、天才的な力を持った芸術家が創作に没頭し、その所持している全ての能力を、そこにおいて爆發させるのです。無論の事、何の眼をも気にせず、です。」

——素晴らしいと思いませんか？」

「ええ……そうかもしれませんね。」

支倉はこの時、そう答えた。そう——布川の口にした言葉には、ある種の狂人めいたものが、明確にあったのだ。その人間の意味不明な言葉に対する返答に、支倉は違和感を感じる事にはなかつた。

布川はその対応に、満足そうな様子を見た。

「さて、それよりも、です。なぜ芦屋鷹一郎は、機巧館などという素晴らしい名前のついたあの館の東館に、四角館などというおかしい名前をつけてしまったのでしょうかねえ。」

布川はクッククック、という、奇妙な忍び笑いを漏らした。その忍び笑いには、自分は何かも知っている、とでもいうような、予感めいたものが含まれていた。

バルコニーの手摺りに、また烏が舞い戻ってきた。——先程の、劉とブラウンだった。

「そうだ。——私がない間、劉とブラウンには、餌をやれませぬね。法村さん、すみませんが、私のいない間、劉とブラウンの餌やりを、代わりに引き受けて頂けますか？」

「ええ、かしこまりました。」

法村は、直立不動の姿勢から、体を腰の所で折り曲げた。

「黒死館殺人事件、というのを知っていますか？」

「黒死館殺人事件？」

支倉は、布川の言った本を、知らなかつた。

「ええ、小栗虫太郎の著書です。そうだ——そこに登場する探偵役、法水麟太郎の、いわゆる『マーカム役』に相当する、支倉検事は、貴方と名字が同じですね。ただ、あの人の場合、読み方は『はせくら』でなく、『はせくら』でしたね……」

そんな不可解な符合が、この事件には、多数あるような気がするのですよ。」

支倉は、布川の言葉の意味を、理解する事が出来なかつた。ただ、この時になり、支倉は少しずつ分り始めていた。何故、支倉の布川に対する応答が急変したか、という事だ。支倉は、布川の中に自身の深層心理との符合、とでも言うべき何かを感じたのかもしれない。この全く違った2人は、何かしら共通の根源を共有しているのかもしれない……。

ともかく、支倉は布川京太郎という人物が、他人の名字が誰かと同じだとか、そういう事にこだわる人間であつた事に、意外、という感覚と同時に、それ自体が不可解である違和感を感じざるを得なかつた。

「乱歩の著書については、陰獣や化人幻戯などが最高傑作と言われていますが、私は押絵と旅する男など、乱歩の本質を表していると思えますね。あの盛気様についての記述など、ピアスの『月明かりの道』などと共有される本質があるようにも思われますが

……。」

支倉は人前で、自分が乱歩のいわゆる「怪奇妄想文学」を愛読している事を公開する人間を、初めて見た。

そしてその、相手に同意と共鳴を求めめるかのような、口調に逆らう事は、恐らく無意味なのだろう。

「そう、これら全てに同一する事は、いずれも人を描いているという事です。人……それは、私達が皆、人間であるからなのではないかね。」

布川は、ニヤリと笑った。

「そういったものを絵画として表現するのが、芦屋鷹一郎という狂気の画家であると、私は思うのです。」

法村は、相変わらず2人の横に、直立不動の姿勢で立ち続けている。

「そうだ——支倉さんのご家族は、どうしていらっしゃるのですか？」

これは支倉にとって、かなりの苦痛を伴う質問だった。第一、支倉のような事情があるにせよないにせよ、その人間と親しい場合はともかくとして、そのような質問を他人に對し出来る限り控える事が、一般社会における道徳と支倉は心得ていた。

しかし、この人物の目前では話さざるを得なかった。

「娘も2人いましたが……1年半前から妻と別居して、娘とも離れていきます……。」

支倉はここまで言って、口を閉じた。

「おっと……これは、失礼しました。どうも、申し訳ありません。」

しかし布川の表情に、「悪い事をした」という風は現れていなかった。例の忍び笑いが、かわりに漏れた。

布川は、言った。

「私には、家族はいません。両親は、病死しました。親戚では、腹違いですが、弟が警視庁で幹部を務めています。私は、父親がいわゆる妾に産ませた子供なのです。——私は産みの母に育てられたのですが、生活は常に苦しかった。それで、その後も色々な事がありましてね。」

布川は、またしても微笑を浮かべた。その時、支倉はある事が気になった。無論の事、何の根拠も理由もない。ただそこに、何らかの繋がりを見出せる予感がしたのだ。その、警視庁の幹部とは、もしかすると自分の知っている人間なのではないか、というものだった。

「もしかすると、その弟さんというのは——。」

「ええ、市村秀二郎です。私の親父も莫迦で、戸籍の上で長男だというのに、二郎などという名前をつけましてね。」

「じゃあ、私は——。」

「弟の命令で、機巧館に行く事になるのですね。私も、弟から頼まれたのですよ。弟とはよく食事に行ったりもしますし、この屋敷で使用人を雇って暮らせるのも、弟の力添えがあつての事ですから。——弟の命令……なら、弟は誰に命令されて、貴方にそう指令したのでしょうかねえ。」

布川は、再び忍び笑いを漏らした。——支倉は、布川の言葉の意味が分からなかった。

「それよりも、です。——さっきの色々な事をやった、という事ですが……実は私は、小さな頃に、1つ犯罪を犯しているのです。いえ、1つではありませんね。2つ、犯罪をしています。」

支倉は、思わず恐怖の意味で絶句した。この人物は自分に対し、過去の罪を告白しようとしているのだ。いや——、それよりも、この人物の過去に犯罪歴がある、という事実が、支倉の恐怖を駆り立てた。

法村が部屋を出て行くのが分かった。

「裁判にかけられたのですが、まあ、少年故に今後を考えてという事で、数百日の刑期で戻ってきたのですが……二度ほど、強姦をした事があります。」

当然、支倉はこの事を知らなかった。布川その表情。罪悪感はないのだろうか。「私がまだ、14、5の頃でしたか。近所のマンションに住んでいる、女子大生がいたので。微細な仕草等に、理由もなく苛立ったのですが——いつも桃色の口紅をつけていたのですよ。ある夜、遊んで帰ってくる時間を見計らって、住んでいるマンションの、花壇の影に隠れて、来たところを、殴りつけたのです。——最初は、それだけのつもりでした。」

布川はそう言うと、笑った。

「——そうだ。」

その時だった。布川はそう言うと、ふいに気が付いたかのよう

な素振りでも立ち上がり、近くの机の上から、小さな銀色の箱をとった。大体、人間の拳程の大きさだろうか。奇妙な突起が複数ついており、全体が光っていた。布川は再びソファに戻り、その奇妙な箱を、それを凝視する支倉の前に置いた。

「分かりますか？」

「えっ？」

奇妙な質問に対する支倉の反応に、布川はニヤリと笑うと、言った。

「これがここにある、という事がです。」

布川はさらに不可解な微笑を浮かべると、箱を指差し、言った。

「貴方のその位置から、これはこう見えます。」

すると布川は、箱をテーブルにつけたまま半回転させ、再び同じ事を言った。

さらに布川は、箱を逆さに置いた。

「今度は、こう見えますね？」

最後に布川は、箱の上に近くにあった万年筆らしきものを乗せ、さらに同じ事を確認した。

支倉が全てに対し同様の反応をする事を確認した後、布川は言った。

「これは同じ箱です。そうですね？」

「ええ。」

「けれど、見る方向や角度によって、また、そこに添えられる別の存在によって、それは全く異なったものとして見える。それもまた、事実です。」

「——ええ。」

支倉はその時、異様な感覚に捕らわれた。その感覚にはもしかすると、眩惑、という形容が、最も適当であるかもしれない。

「箱は1つ、ですが、見える箱は無数にある、という事です。それを続けていけば、その箱の存在さえもが、疑わしいものとなる——そうではありませんか？」

「——ええ、そうです。」

支倉は知らぬ間に、自分のみが普段に生活している世界から密かに連れ出され、奇妙な異世界へ訪れていたかのような感覚に陥った。そう——異様な感覚。

「そもそもここに、実際に箱などあるのですか？」

布川のその言葉を境にして、既に確定し、不動の地位を持つ現実という存在が、別の何かに薄められていく。そんな光景が、支倉の前に拡がっていた。

# 1. 記憶

2月10日土曜日

支倉の目前で、陽炎の立ち昇るアスファルトの坂が、勾配を増していく。

急な勾配と暑い日差しに、身体は既に水に浸ったように濡れ、流れる汗は、急な雨にあったようでもあった。

坂の両側には、見た事もない、青い茎の植物が、群生していた。

それらは皆、色の濃い緑の花弁を持つ、花をつけている。花は、照りつける日差しに、萎れていた。

——緑色の花は、ないはずだ。

そんな未確認な記憶が、ふと支倉の脳裏を過ぎる。

事実、世界中どこを探しても、緑色の花というのは、発見されていない。

では、ここで自分が、発見したのだろうか。

いや……もしかすると、もう、随分と前に、発見されていたのかもしれない。

しかしだ。だとすれば、新聞やテレビなどで報道されており、自分が知らないはずはない。

その時……おかしい現象が、発生した。

坂の両側を埋め尽くす青い茎の緑色の花が、支倉の背後から一斉に、透き通るような青色に変わっていくのだ。

——何だ？これは。

直後、支倉の背後から、トラックのクラクションが聞こえた。

その時初めて支倉は、自分が車道の中央を歩いてきた事に、気付いた。

すぐに、慌てて、道をあける。

支倉の退いた場所を過ぎ、トラックは、アスファルトの勾配を、上っていく。

しかし、見ると、そのトラックの運転席には、人が乗っていないかった。

瞬間的に、陽炎の立ち昇るアスファルトの道路に、目を落とす。

すると、アスファルトの勾配に、5 m程の間隔で、煙草の箱程の大きさの、三角形の突起が、据え付けられているのが、目についた。

——そうか。ここから出る電波を、トラックの車体の下に取りつけられているセンサーが感知して、無人運転ができるのか。

そう思った時、緑色の花が青に変わっていく波が、自分の横を通り過ぎ、勾配を上っていくトラックの倍程の速度で、進んで行った。

見る見る間に、その波は、勾配を上がっていくトラックを、追いかけていく。

そこでふと、先程波が通り抜けていった、自分の横の平地に、目を落とす。

すると……坂の両側に群生している植物の花弁は、今支倉が来た道から、この勾配の向こうの丘まで、もう一つ残らず、淡い透き通るような、青に変わっていた。

——おかしな事も、あるものだ。

そう思いながら、また、急な勾配を、上り始める。アスファルトの勾配からは、相変わらず陽炎が立ち昇り、照りつける日差しに、類から流れた汗の雫が、首筋をつたい、アスファルトの地面に、落ちる。先程と変化した事は、道の両側に群生する植物の花弁が、緑から青に変わったという、それだけの事だ。

それから色が変わらないところを見ると、先程の緑の色というのは、ほんの一次的なものだったのかもしれない。そんな思考を巡らせた。

——その時だった。白い煙のようなものが、陽炎を立ち昇らせるアスファルトの勾配の向こうから、支倉の方に向かって、一気に押し寄せてきた。

思わず、声を上げ、眼を閉じる。

冷たく、水分が感じられる。

微かな、異臭がある。しかし特に、息苦しいわけでもなかった。——そこにある違和感を感じたのは、その異臭がどこか、かつて経験した事がある何らかの記憶を辿るかのような、錯覚を起こさせるものだったからだ。

支倉はそこで、思い切って、眼を開いてみた。

すると、既にそこに、先程の煙はなかった。勾配の向こうから、煙が押し寄せてきてから、ほんの、10数秒というところだろうか。

異臭も、消えていた。

そこで、ふと思いつき、空を眺めてみる。

見ると、日差しの照りつける、どこか濁った蒼穹の、アスファ

## 1. 記憶

ルトの地面から100mと離れていない高さに、小さな雲が浮いていた。

その時支倉は、ふいに勾配の向こうに、赤と白に塗り分けられた、煙突が見えている事に気が付いた。そこから、白い煙が吹き上げられ、こちらとは反対の方向に、それは流れていく。それが、その勾配を駆け下りたところで、突然空中に舞い上がり、雲になった。

先程自分を包んでいた煙にしても、やはり同じように、雲になったのだろうか。

だとすると、あれは雲の工場かもしれない。

いや……もしかすると、この土地は、緑から青に変化する、このおかしな植物が大量に発生したために不作になり、あの雲は、植物を絶滅させるための化学薬品を降らせる、特殊な雨を降らせるためのものなのかもしれない。

と、道の両側を見ると、だ。いつの間にか、先程の植物の花弁は、淡い透き通るような青から、最初の濃い緑に、戻ってしまっていた。

——どうなっているんだ？

しかも、最初に青色だった植物の茎は、今は血のような、赤——鮮色に染まっている。

その時、支倉は、見た。

その続いていく勾配の向こう——二色に塗り分けられた煙突から少し離れた場所に、異形の建造物が位置していたのだ。外壁は、全てコンクリートのようにも見えたが、凝視するうち、それ

が日光を反射し、微かな光を帯びている事に気が付いた。

それは、平坦な大地に伏せるように、位置していた。そこから、複数の突起が、不規則に立ち並んでいる。その突起は筒状になっており、その先端が斜めに切り取られていた。

——それが立ち並ぶ煙突であった事に気付いたのは、その直後であった。

支倉はそこで、立ち止まった。

この勾配を越えていけば、あの場所にたどり着くのだろうか。多分、あの場所に、人間はいない。何故か、そう確信した。支倉は再び、その勾配を上り出した。

目前に無限に続くであろう、陽炎の立ち昇るアスファルトの勾配を。——

突如足をすくわれたような感覚に陥り、支倉は眼を開いた。

気が付くと、既にそこは、滑走路であった。支倉は瞬間的に、隣の席を確認する。布川は、確かにそこにいた。

布川京太郎と支倉俊之の2人を乗せ、羽田から、2月10日の午後飛び立った旅客機は、鳥取空港の滑走路に降り立った。速度は徐々に衰え、やがて機体は静止した。

支倉は客席の窓から、外を見た。窓の外の空は、既に、漆黒の闇に包まれている。

支倉は立ち上がると、隣の席にいた布川に言った。

「空港で、食事をとっていきますか？」

支倉は、布川に向かって言った。

「ええ、そうしましょう。」

支倉は、ここでもまた、布川の盲目を疑った。布川は空港から、支倉の歩く道を迷う事無く、実際に自然についてきていた。周囲の人間達は、誰も「何故杖を持たないのか」という疑問を持たない。理由は、簡単だ。布川が盲目である事実を、気付かないのだ。

支倉の中で、布川との対面の瞬間の、あの異様な感覚は、急速に薄れつつあった。支倉が布川との会話の中で何度か感じたように、両者の深層心理には、もしかすると共通の根源が共有されているのかも知れないという、そのせいなのかもしれなかった。何らかの方法でそれに気付いた瞬間に、支倉の布川への、あのあらゆる種の恐怖に近い感覚が、消えたのかもしれない。

支倉は小さな頃、家の床の間には、その時期にはいつも五月人形が飾られていたが、それにはオルゴールがついていた。そのオルゴールの奏でる曲を聞くたびに、支倉は微かな違和感と、既視感を覚えていた記憶がある。それは、そのオルゴールの音色を、その場所以外のどこかで聞いた事があるのではないか、という、微かな疑惑からのものであった。

その時点で既に、支倉の脳裏から、先程機内で見た、奇妙な夢の記憶は消えていた。

2人は空港にある、軽食喫茶で食事をとる事にした。布川と支倉は、今日出掛ける前に、東京のホテルのフランス料理レストランで、食事をしていたので。そのために、時間は遅かったものの、

の、2人は敢えて軽量の食事をとる選択をした。レストランは、布川がいつも市村秀二郎と一緒に行く場所らしかった。そこで、市村も同席するのではないかと支倉は期待していたが、予想に反し、その様子は無かった。ともかく、店の人間の布川に対する対応等から、布川が市村と共に、そこに何度も足を運んでいる事実が窺えた。

そう、今日が2月10日で、最初支倉が布川に会ったのは2月4日だった。その日以来支倉は、布川と今日まで会っていないかった。今日の1時頃、空港に行く前に、少し遅めだが食事にと法村から電話があり、布川の家に向かったのだ。ここで、支倉は約1週間ぶりに布川に会った。そう、夕飯を軽量にしたのは、食事の時間帯が多少遅めだったせいもあった。と、言っても現在の時間から考えれば、それ程食事を少量にする必要もなかったのだが、支倉に実際、それ程の食欲はなかった。

布川はそこで、パンとソーセージの各種盛り合わせのようなものだけを頼んで、その極めて少量の夕食を非常にゆつくりとしたペースで口に運んでいた。支倉が布川が食べ終わるのを待つ事になかったのは、その様子を見ながら、自分も食事をとっていたからだ。食事を口に運ぶ布川の様子は、盲目のせいもあるのか、どこか奇妙だった。そして支倉が、布川のそういった様子に何度となく目をやらなければならなかったのは、その光を失った深い窟りの奥の何かが、ふとした瞬間、自分を見ているかのような気がしていたからだだった。

## 1. 記憶

食事が終わっても、布川はゆっくりと口を拭くのみで、なかなか立ち上がろうとはしなかった。支倉からすれば、食事をとるために店の入り口に並んでいる他の客の視線からも、一刻も早く店を出たかったのだが、布川にその様子はなかった。盲目であるがために、それに気付かないのか。――

何故か、先程から支倉の脳裏から「布川は盲目」という語が絶えなかった。それは、布川は実際には盲目などではないのではないか、という深層心理における疑惑の念から来ているのかもしれない。が、その事実はある得なかった。理由は定かではなかったが、布川は相違なく、眼球を摘出していた。

その時だった。布川の口から、ある童歌めいた調が聞こえ始めた。しかし、無論の事支倉の聞いた事のないものだ。呟くような歌声の中から、何か、「赤い実が」「青い実が」などと繰り返している事が分かった。支倉は、それを聞く内に、小さな頃に聞いた、ある童謡を想起した。童謡は、今布川が口にしてしているそれと、歌詞がどこか類似していた。音楽もどことなく似ているのだが、なぜか布川の歌の方は、音が空音から切り出され、何か他の物質に変化したような――そのような形容を連想させた。布川はごく小さな声で、それを繰り返し歌っていた。聞いているうちに、支倉はそれが分かれるとすれば5番まであり、それが同じ節で単純に構成された歌という事に気付いた。そして、その内容が少しずつ理解できてきた。

内容は凡そ、このようなものだった。

白い実が一つ  
赤い実が一つ  
そしたら次の実  
はきつと桃色

赤い実が一つ  
黄色い実が一つ  
そしたら次の実  
はきつと橙

黄色い実が一つ  
青い実が一つ  
そしたら次の実  
はきつと緑

青い実が一つ  
赤い実が一つ  
そしたら次の実  
はきつと紫

赤い実が一つ  
赤い実が一つ  
そしたら次の実  
は一体何色？

支倉は暗号を連想しながら、その歌から理解できる解釈と情報とを考えていた。まず、法的な理解における単純なものから言えば、「そしたら次の実は……」の正体は、紹介された2つの実の色を混ぜた色になる、という事だ。そして、その2つ目の実が、次の1つ目の実になる、という事だった。支倉は、それがあらゆる視点や角度から分析し、観察を試みた場合、最終的に暗号にならないかという、無意味な思考を巡らせた。しかし無論の事、支倉の検討したいずれにも、何かしら特殊な意味を秘めた言葉らしきものは見出せなかった。

いつの間にか、布川は歌うのをやめ、立ち上がっていた。

「そろそろ行きましょか。」

最初に勘定をすませる形式の店であったため、2人はカウンターを素通りして外に出た。少し歩いた場所にあるロビーを過ぎた場所に、レンタカーのN社のカウンターがある。

「予約していた布川です。」

支倉は、カウンターの前に出来た短い列の最後尾について、自分の番が来ると、布川の名で予約されているために、その名で声をかけた。

「はい、表に用意してございます。」

ここで支倉は違和感を感じた。今までにも支倉は、空港で車を借りた経験が数度あったが、このような事例はかつてなかった。毎回簡単な書類に目を通すなどしたり、専用のバス等で空港近く

のレンタカー店まで移動しなければならぬ、という事が多かった。会社の関係かもしれない……とも思ったが、やはりおかしい。詳細な手続きが一切ない、という事は、通常あり得ない。

これだけの事を、警視庁が全て手配したのだろうか。恐らくあらかじめ、このような対応をするようにと、手配されていたのだ。自分がこれから立ち向かう事になる事件に対し、支倉の不安と後悔は、徐々に募っていた。

車は、無論の事支倉が運転した。が、その事にしても、実際それ程の意味はない事なのかもしれない。やはり運転席でベルトをした以後も、支倉の視線は常に、助手席の布川のサンダラスの奥の、深い翳りにあった。

今、車についている時計で見ると、時刻は21:48となっていた。が、支倉の腕時計では9時52分となっている。支倉の時計は正確な時刻と比較しても20秒弱遅れているのみで、恐らく腕時計の方が正しいだろう。いずれにしても、飛行機が空港に到着したのは午後8時半を過ぎた頃だった事を考えると、既に1時間半程が経過しようとしているわけだ。

機巧館までの道順は、事前に地図帳などでしっかりと確認しておいたために、かなり正確に把握している。機巧館と赤姫山のある国府町の地図にしても、警視庁から正確なものが感熱紙により送られてきており、支倉は現在、それを所持していた。というのも支倉は、この一週間の間、一切の仕事を与えられていなかったのだ。支倉は、今回の事のために、今から一週間前、つまり2月

## 1. 記憶

3日から、休暇を与えられていた。この事にしても、言うまでもなく奇妙な点であったのだが、そのために支倉は機巧館についての資料の殆どを、その間に読破することが出来た。

機巧館は、言うまでもなく、鳥取にあった。

機巧館は、赤姫山にある。

赤姫山があるのは、東西に長い鳥取県でも東部に位置する岩美郡、国府町だった。町は県に似て東西に長く、その西部には因幡万葉歴史館等の観光地がある、と支倉の購入した観光案内には書かれていた。資料を探してみると、確かに鳥取県は、東を因幡、西を伯耆とかつて分かれていたようであり、鳥取の東部にある国府町は、無論の事因幡に所属していたようだ。因幡というと、やはり因幡の白兔などを連想するが、やはりこの地で生まれた民話のようだった。鳥取には昔から多くの伝説や逸話があり、日本を代表する古代伝説の古里として知られている、という事だ。古代、出雲文化の圏内にあつたため、古墳なども数多く残されており、大和朝廷と結びつきの強い豪族が勢力を持っていた事が推測される、と支倉の見た資料には書かれていた。やはり山なども多い事で知られる鳥取だ。国府町にも、町の北方に位置する福部村と、どちらに所属するのかわからないが、稲葉山という山がある。しかし、これは標高249mとそれほど高い山ではない。そこから東へ行ったところに位置するのが大茅山であり、これは664mと、前者と比較しても大分高いようだった。その2つの山の間を福部村との町村界にそって辿っていく中

間地点に位置するのが、標高1152mの赤姫山だった。雨滝街道こと方見往来が、栃本付近で県道37号線と合流する地点まで来ると、山の姿を間近にとらえる事が出来る。

雨滝街道の街道名の由来については、河合谷高原の西端にある、雨滝が関係しているのかもしれない、と支倉は憶測していた。地図によると、付近に同名の地名もあった。

ともかくも、その赤姫山の山腹に機巧館はあつた。

機巧館……建てたのは、芦屋鷹一郎、という画家だった。画家としての肩書きについては、狂気の天才画家、という言葉や、テレビや新聞、雑誌等で目にした事がある。現代、天才と言われる生きた画家など聞かないが、芦屋鷹一郎という画家については、その名が知られ始めた当時に付けられたその肩書きが、未だ廃れる様子がなかった。鷹一郎の絵画は、皆原型のない、脳裏に想像された架空の映像であり、その抽象芸術としてのもので、写実的な作品などは、1つとしてなかった。本人が人間心理の明暗を描く、と言っているその絵画には、形容しがたい独特の風格があり、狂気の天才画家という肩書きにある、「狂気」という言葉は、そういった異様な作風からのものなのだろう。

一般の知名度等は比較的低いようだったが、専門家を中心とする人間からの支持は、殊の外強いようだった。鷹一郎の絵画は全て版画のため、1作品につき20枚程が刷られるのだが、その1つ1つには、1千万、という値のつくものもあるようだった。そのため鷹一郎本人の総資産についても、現在の時点で数億の単

位に達するのではないか、と言われている。ただし、私生活などに明確な点は一切なく、全くの社交性もない、いわゆる「人嫌い」という風評もあった。

鷹一郎には、妻もいた。由利子、という名前を聞いた事がある。旧姓や出身地等については、明らかにされていなかった。異常人格者であり、社交性もなく、友人のいない鷹一郎と結婚した動機は、支倉には理解出来ない。本人の遺産を目的としての結婚、という風評が一時囁かれた。が、2人が結婚した当時、鷹一郎はまだ画家として十分に有名になっておらず、無論の事以後の莫大な資産も想定出来なかったために、その風評は芦屋鷹一郎に纏わる風評の中でも、早期に消えたものの1つだった。しかし、仮に芦屋の財産が膨大になる未来を、由利子という人物が絵画の鑑定能力により予測していたとしても、それは結局無意味になる。由利子は、機巧館が建つ以前に、既に死亡していた。

鷹一郎と由利子の間には、子供も6人いたが、6人共どこで生まれたか、いつ生まれたかなど一切定かではなく、それに纏わる謎も多かった。支倉の見た芦屋鷹一郎についての資料によれば、生まれた順に行くと、長女の雪乃、長男の幸弘、次女の月乃、三女の花乃、次男の弘康、最後に四女の風乃、という事だった。その6人をどのようにして育てたのか、一般には知られていない。しかし、通常の教育とは異なる、異様なものだったであろう事は、誰にでも憶測出来た。

そして——画家としての名声を手に入れ、膨大な資産を手に入れた芦屋は、親族と家族を住まわす、巨大な館を赤姫山に建てた

のだった。そう……そしてその館こそが、機巧館だった。機巧館という館の名前を付けたのは、鷹一郎だ。機巧館は東館、西館の2つに分かれて向き合う、コの字形の巨大な西洋館だった。両者とも3階までがあったが、その3階については、1階、2階と比較して多少面積が縮小されている。3階は、2階の上に立てられた3つの巨大な四角形の塔が並んだような造りになっており、その3つの接触する直角部分どうしが、短い通路で結ばれ、さらにその中心の塔からは、一本の廊下が館の正面の六角塔につながっていた。

そう、その機巧館の「機巧」という文字には、精巧に出来た装置・細工・工夫、才知を巡らす等の意味のほかに、やはりからくり、という意味がある。東西に分かれた館のうち、鷹一郎は主に東の方を四角館、西の方を機巧館と呼んでいた。もちろん2つ合わせて機巧館、という事になっているのだが、芦屋はなぜかそう呼んでいるようだった。ことにおかしいのは、東館だ。機巧館という名のつけられたその館を、なぜ四角館などという名で呼ぶのが、疑問であった。

対する西館については、やはり機巧、という名で呼ぶだけあり、館の内部に何かしらのからくり仕掛けの類が施されているのではないかと風評が館の建設当時絶えなかった。その風評の通り、西館の方についてはそういった奇妙な建造物の設計を専門としている建築家に、鷹一郎は設計を依頼している。しかしその建築家は、膨大な金額で依頼された設計の依頼を、断った、というのだ。

## 1. 記憶

仕方なく、鷹一郎は別の建築家に館の設計を依頼したようだった。だが結局、その建築家が何故依頼を断ったかについての理由は、分かっている。それについての風評には、鷹一郎の建築家に提案した依頼金を実際にはごく少量であったから、鷹一郎が相手の建築家と静いを起こしていたからなど、さまざまなものがあった。しかし、その中で最も支倉の興味を引いたのは、館の随所に施されるからくりが全て、殺人を目的とするものであった、というものだった。

殺人を目的とする機巧の施された建築などを依頼されれば、どれだけの多額の依頼金を提案されたとして、ある程度の名声を持つ建築家ならば依頼を断る事は当然だろう。鷹一郎は極度の異常人格の持ち主である事と同時に、一部の心理分析学者から、犯罪実行率の高い人間、とも言われていた。殺人を目的とするからくりの施された館を作ろうとしても、おかしくはない。――

館の内部に施されたその機巧が、今回の事件を引き起こしたのではないか。それが、支倉の脳裏に反芻される思考であった。

ともかく館の建設に際しては、地元の間も観光地の一つに近い認識でそれを受け入れ、建築時の反対運動なども、それ程目立たなかった、という事だった。鷹一郎は機巧館を現地の自然環境を十分に配慮した上で建設する、建築に際して騒音等の公害等は一切出さないことを約束する――そういった宣言を行っていた。それに加え、機巧館を見るためにやって来る観光客にも、地元としては期待があったのだろう。鷹一郎はその時点で、機巧館を美術館を兼ねた形で建設する可能性があるとの発表も行ってお

り、地元住民の期待は、大きかった。

――しかし、その期待は大きく裏切られた。その裏切られた期待の内どれを取ってもいいのだが、一つ取るとすれば、その外見があまりにも悼ましいものであった、という事があった。機巧館は、館を取り囲む高く厚い塀により、周囲の環境から完全に隔離され、周囲には塀を囲む堀までが掘られ、巨大な門をくぐり、館の敷地内に入るための橋は跳ね橋となっていた。さらに塀の上には無数のガラス片が植え付けられ、内側には侵入者を防ぐ槍が並んでいる。それは美術館、などというものではあり得なかった。山奥にある事も手伝って、無論の事そこに近づく人間はいなかった。

言うまでもなく、鷹一郎の子供達の子供、即ち鷹一郎の孫達も、そこに住んでいるものらしい。が、義務教育なども一切受けず、そこにどれだけの間が生活しているかも定かではなかった。外部との関わりは一切を絶ち、電力は自家発電、ガスはなく、水は館の背後にある沼から取り入れた水を浄化して使用しているとの事だった。食料のみを特定の業者から密かに受け取っているらしい事実は分かっていたが、館の中で誰が生まれ、誰が死のうとも全くの報告はなく、戸籍も住民票も、全てを無視していた。

そこは完全な芦屋家の世界であり、芦屋家の人間以外を近付けない、という事なのだろうか。正に、自発的に作り出す陸の孤島、とでも言うべきものだった。そういった理由から、機巧館は愚か、鷹一郎の私有地であるために登山等の一切を許可していない事もある赤姫山は、最早誰も近付く事のない無人の場所とな

り、館の存在は全国に知られる事となった。そして、そんな機巧館の中では、その全員が芸術家という芦屋一族の人間達が、創作に没頭する毎日を送っている、というのだ。

さて、ここからのだが、そんな陸の孤島の中にも、さらに2つの島があった。そう、東西に分かれた機巧館のそれぞれの住人は、互いに何らかの敵対意識を持っているのか、全く交際を持たなかったのだ。

東西に分かれた2つの館の間には、2000m程の間隔があった。その間に、それぞれ強固な塀を作り、たがいの侵入を防ぎ合っていた。何故2つの館が対立関係にあるのか、という事についてだが、その一説に、鷹一郎の遺産相続の問題についての事があった。大勢の相続人を相手に、芦屋の遺産をどのように分けるか、という問題に直面した際、それぞれ1人に与えられる金額を多くするために、遺産の相続人を、遺産を相続出来る人間、出来ない人間とに二分した、というのだ。相続人が半分になれば、その分1人の相続量も2倍に上がる。そして何らかの方法で人間達の二分された結果が、東西の館となった、というわけだ。勿論、鷹一郎の生きている時点ではまだ、東西どちらが入手する側になるかは決定していない、という事になる。そのような状況の中で、両者間に対立関係が生まれる事も、不自然ではない。ただし発生する疑問は、いくら金があったとて、館の中ではその使い道などなく、一体それにより個人に何の利益が生じるのか、という事だった。

さて——ここでもう1つ、疑問が生じる事になる。それは即

ち、東西の館が対立関係にあるのならば、当の芦屋鷹一郎は東西のどちらの館に住んでいるのか、という事だ。しかし、それはというと、実際にはどちらでもなかった。ちょうど2つの館の中間に位置する丘の上に、アトリエと称する建造物を建て、そこで絵を描いていたのだ。東西の館の人間達が、いくら自分達の館へ勧めようとも、鷹一郎は動かないのであった。

——ともかくも、謎や不可解な点の多い場所であった。

機巧館は、雑誌の活字となる場合もあれば、館に関する研究ノートや評論文までが存在している。館の人間達の心理分析を試みる心理学者もいた。そして、機巧館について唯一明確であるのは、機巧館に住んでいる人間達が皆、一般社会における生活人——常人の域から遙かに外れた人間達である事……そう、機巧館は、社会という環境に最後まで適応できなかった人間達の、最後の砦である、という事だった。

そして、その機巧館で、今何かしらの事件が発生しているのだ。その事にしても、尋常の内容でない事は明確であった。その内容を、支倉はまだ聞かされていない。

しかし、人々が機巧館を、赤姫山を避ける理由はそれだけではなかった。赤姫山には、悼ましき恐怖に満ちた、5つの事件が、過去に存在していたのだ。それを、支倉は膨大な資料の中から発見していた。その最初の1つの発生があったのは今から400年程前の、江戸初期、豊臣家滅亡・大坂落城として知られる、大坂夏の陣直後の事であった。

## 1. 記憶

元和元年三月十二日。即ち、大坂冬の陣の翌年という事になる。大坂の浪人達には、冬の陣においての徳川家康の出した講和が、自分たちの奮闘に報いる何物をもたらさなかったという不満があり、再び争いのあるという空気が、上方・中国地方の方面にまで流れていた。そんな時、京都所司代板倉勝重は、大坂方が再び——再びというのは、昨年、つまり慶長十九年の大坂冬の陣があつた事を示す——兵糧・彈薬を集め、浪人を募集し、合戦の準備を進めている様子があると駿府に報告した。大坂不穩の情報の弁解のため、三月二十四日大野治長は駿府に使者を出したが、それに対する家康の態度は強硬であつた。「もしも幕府に敵意がないのならば、その証拠として豊臣氏が大坂城を出、大和または伊勢に移るか、そうでなければ浪人を悉く追放し、元の家臣だけにするか、どちらかを選べ」という要求を大坂に向けてきた。言うまでもなく、前者後者ともに豊臣氏として受け入れる事の不可能な要求である事は無論であつた。そのため、四月五日、豊臣氏は家康提示の条件を受け入れられないという事と、その弁解の申し立ての使者を家康に送つた。家康は第九子義直の婚儀に足を運ぶため名古屋へ出発しようとしていたにも拘わらず、その返事を聞いた瞬間、すぐに大坂出兵を決意したという。そして四月十二日、名古屋城で義直の婚儀を終えた家康はその足で上京し、二十四日に大坂に向け、大和郡山に移り、浪人達の追放を再度要求したが、これが即ち最後の通告であつた事は言うまでもない。無論の事大坂側の返答も変化する事はなかつた。結果、家康の講和により大坂城の防備力をほぼ完全に失つた豊臣氏は、押し寄せる徳

川の軍との野戦を余儀なくされた。これが大坂夏の陣となる。そして合戦の末、最終的に城の天守閣をも失つた秀頼・淀君は、五月八日大坂城にて自害したのだつた。こうして、大坂の陣は事実上終わりを告げたわけだ。しかし、その出来事というのは、正にここからだつた。

その後の家康の、豊臣家の残党への捜査追及には異常なものがあつた。それは先の関ヶ原の合戦と比較する事により、より明確となる。関ヶ原の際には石田三成の子さえ、僧侶になつていてという理由で許したにも拘わらず、大坂の陣においては、五月二十三日には秀頼の子、7歳にしかならない国松をも六条河原で処刑し、側仕えの12、3の少年さえも共に斬られたというのだ。さらに、落人達の斬られる事1日に50人、1000人にまで達し、京都から伏見にかけて18列の棚を作り、1列に10000以上の首をさらしたという。これについては、関ヶ原の際には、残つた敵の島津・毛利・佐竹などの所領がまだ征服されておらず、追及を厳重にすればかえつて抵抗が生じ、解決が遅れる——そう徳川側が考えたためとも思われている。ともかくも、家康の大坂の陣での残党の追及は、敗れた武將の妻・娘にまで達し、因幡赤姫山の屋敷に敗者の血縁の女達を閉じこめ、そこで侍達によつて、毎日のように犯させたという。

機巧館の裏手に沼がある事は前述の通りだが、名を子靈沼という。その名称の由来が、この事に關係している。ある夜、既に意識も正常でなくなつていた女達は、揃つて屋敷を抜け出し、沼の近くの丘から順々に、全員で沼に身を投げたのだ。その時点にお

いて侍達との行為により身籠もっていた女達も同じように身を投げたとすれば、胎内の子供も無論の事、外界を見る事なく母親と一緒に死んだ事になる。その胎児達の霊がこの沼に宿っているという伝説がこの地方にはあつたらしく、そこから沼の名前がついた、という事らしい。さらに近くの丘には、その後身投五という名がつき、鷹一郎はそれを知った上で、そこにアトリエを建てたようだった。

さて、その屋敷がそうなる以前の姿だが、そこは大塚平右衛門という商人の、隠居後の住居になっていたようだった。資料によると赤姫山はかつて銀山だったらしく、それを掘る目的でそこに屋敷を建てたとも言われているようだった。平右衛門には和右衛門という息子がおり、和右衛門も父親と同様に商人をしていたよなのだが、その和右衛門が密かに、徳川への報復を狙う豊臣家の残党との、銃火器を中心とした取引を進めているという風評があつたのだ。和右衛門は極秘に外国との取引を行っており、そこで豊臣の残党へ供給するための銃火器を入手しているものらしい事が分かつていた。豊臣の残党は因幡のどこかしらに潜んでおり、平右衛門の屋敷を通してそこに武器が供給されていると言われていた。輸送中の途中経過地点は数多くあつたが、その中で最も重要なのが平右衛門の屋敷と言われていた。つまり、平右衛門の屋敷が押さえられれば、残党への武器の供給は一気に困難になるのだ。それを計った上で、家康は残党の血縁者の女達を閉じ込めるための屋敷を、平右衛門の屋敷にしたとも言われている。その後平右衛門と息子の和右衛門は行方不明になった。幕府によつ

て暗殺されたのではないかとの風評が、その後一時出回ったようだった。和右衛門の経営していた店は、それからしばらくは別の人間が代わつて経営していたようだが、店はその後次第に衰えていき、最終的に潰れてしまった、という事だった。平右衛門の家が本家であつたと同時に、これと言つた分家のなかつた大塚家は、先祖から受け継いできた店と共に、滅んでしまったのであつた。

以上の事が1つ目だ。2つ目だが、これは1つ目と同じ江戸時代でも、その幕末に当たつた。その当時は幕末の物騒な時代で、寺山貴之のような資産家は皆、自分の資産を隠す事に必死だった。そのために、因幡の現在の国府町に当たる場所に在住していた寺山貴之は、その資産を隠すため、赤姫山の山奥に屋敷を建てた。内部に巧妙な隠し場所を作り、その財産を発見されないよう隠したわけだ。大坂夏の陣の事もあり、近づく人間も少なく、資産を隠す事に都合だつた事が、赤姫山に屋敷を建てた理由だろう。しかし、その屋敷が完成した翌日、そこへ移り住む前の下見に山へ登つた寺山は、一緒に屋敷へ向かった他の人間達と逸れ、行方不明になった。地元住民も、きっとあの女と子供達の呪いだと言いに言い、陰鬱な空気が立ち込めていたのだが、それはやがて明確な形として表れる事となった。数日後、寺山の水死体が子蓋沼に浮いたのだ。特に目立つた外傷もなかつたという記録があるために、恐らく山に登る際他の人間達と逸れた後、沼の付近で本人の持病である心臓発作を起こし、その際に足を滑らせて沼に転落した、と現代では判断出来る。しかし当時地元の人

## 1. 記憶

間達は皆、女達の祟りと信じ、疑惑を持つ事はなかったようだった。そして、その年の夏、嵐の多いその季節、落雷によって屋敷は崩れ去ったとの記録が残っている。

その後寺山の屋敷と同じ場所に建設されたのが機巧館、という事だった。

3つ目については、二次大戦中、その終結が近付く1945年2月頃との記録がある。その当時、国府町である伝染病が流行り始めた。原因は不明だが、体中に赤い斑点のようなものが出来、それが異常な痒みを引き起こすという症状が、全ての感染者に共通していた。全く原因不明の奇病であり、病名も分からず、手段は皆無だった。それに加え伝染の速度は驚異的であり、1ヶ月程の間に、伝染病は10数名の死者を出した。食糧不足による空腹に加え、突如猛威を振るい出した伝染病により、町は壊滅状態になる事が予想された。

そんな時、町にとある風評が流れ出したのだ。それは伝染病に感染した人間を残らず抹殺すれば、病気も一緒に死に、以後感染の心配がなくなる、というものであった。

噂は拡大する伝染病の被害と共に一瞬にして広がり、2ヶ月も経った頃には、町の人間による感染者狩りが開始された。

噂を聞いていた感染者達は、無論の事自分達の身を守る必要があった。僅かな食料を持った感染者達は、赤姫山へ身を隠したのだ。

しかし、町の人間達も、無論の事黙認する事はなかった。伝染

病の根源からの抹殺を怠る事による自身の感染を恐れた町の人間達は、その後間もなく、大規模な山狩りを開始した。そして最終的に、赤姫山の山中の洞窟に身を潜めていた感染者達は、洞窟の外から放たれた炎により、全員が焼死する事となったのだ。後に、洞窟の奥で焼死体となった感染者達が、町の人間により確認された。そしてそれと同時に、町の人間に猛威を振るっていた伝染病は、一斉に姿を消したという。

これは伝説化した話であり、正確なものであるのかどうかは極めて疑わしい。しかし、それを真実とほのめかす出来事が、その後起こっている。

それが、4つ目の出来事となる。国府町での事件があつて間もなく、第二次世界大戦は終結し、故郷に戻る、出征していた若者達の中に北野昭英はいた。北野は国府町の出身であり、1年程以前に徴兵され、終戦のために辛うじて生きて帰る事となった北野は、当時21歳だった。北野の両親は北野が兵役につく以前——終戦の2年程前に病死しており、北野はその当時から姉と2人で暮らしていた。唯一残った家族である姉との再会を脳裏に描いた映像を、北野は帰路で繰り返し想起し、反芻していた。生きて帰省する自分の姿を見て、姉はどれだけ喜ぶだろう。国府町には空襲等の被害も殆どなかったという話を聞いていた。食料にしても、何とか繋ぎ止めているはずだ。北野は故郷へ戻る唯一の希望である姉との再会に胸を躍らせ、帰路についていたのだ。

そう——北野の姉は、無論の事、空襲で死んではいなかった。

また、病気にはなっていない、それが直接の原因で死んではいない。が、姉はいなかった。殺されたのだ。それも、国府町の人間に、だ。

正確に言えば、町に広まった伝染病と共に、赤姫山の洞窟において葬り去られたのだった。そう、北野の姉も、山狩りによって洞窟で焼死した伝染病患者の1人であったのだ。

それを知った北野は、唯一の希望であった姉の死に、発狂した。姉を殺害した人間達に対する殺意に思考を略奪された北野は、山狩りに参加したと思われる人間達に対する復讐を試みたのだ。北野は斧を片手に、その家々に火を放ったのだった。

そして多数の死者を出した後、北野は赤姫山の北側の崖から、姉の後を追いつ、投身自殺を行ったのだった。惨殺事件と北野昭英の発狂については、明確な記録が残されている。その原因となる事件を起こした主要な人間の殆どは、その惨殺事件の死亡者となっており、感染者を殺害した事件の発覚から戦後罪人となる人間も、いなかったとの事だった。

以上が、赤姫山に纏わる過去の事件だ。しかし、これが全てではない。支倉の見た資料によれば、この4つの事件には、驚愕すべき——と言っても、それが真実であるのかどうかは甚だ疑問であるのだろうが——明確な共通点がある。そう、それらの出来事には、赤姫山とその数々の出来事を象徴するかのような「仮面」が関わっていたのだ。それが最初に人々の前に登場したのは、1つ目の事件の際であった。1つ目の事件に登場する子靈沼

に身を投げた女達は皆、どこからそれを持ってきたのか、薄い揚げ茶色の奇妙な仮面をつけていたというのだ。その時偶然起きており、屋敷の中からそれを見ていた1人の侍が、それをつけて歩く女達を見たのだが、その仮面を見た瞬間、身動きがとれなくなった、という事だった。その侍は、その後発狂したという。さらに2つ目の事件で、寺山貴之が子靈沼で水死体となって発見された際、顔にはその時のものと全く同じ仮面が被せられていたというのだ。また、3つ目の事件については、その後仮面を被った女達が山へ続く道を歩いていくのを見たという人間が次々に現れ、その恐怖に耐えかねた人間の中には、発狂した者までがいるという。4つ目については、崖から投身自殺を行った北野が、崖の下で死体となって見つかった時、仮面をつけていたと、当時の記録にも残されているのだ。その仮面の正体は全く分かっておらず、何を意味しているのかという事についても、不明だった。しかし地元の人間達の中にはまだ、仮面の存在を忌む人間が残っているとの事だった。仮面は数々の悼ましき伝説を、山と共に象徴する存在となっていた。

ここまでで、その仮面が関わるものとして述べたのは、赤姫山に纏わる5つの事件の内、4つ目までだ。実際、5つ目は存在している。正確に言えば、時代的には、2つ目と3つ目の中間に位置しているのが、5つ目だった。さらにその5つ目は、実際支倉にとっても最も興味深いものとなっていた。その事件には何故か、他の4つとは異なり、奇怪な事件を象徴する仮面は関わって

## 1. 記憶

いない。しかしそのためもあるのか、その出来事は、どこか現実を離れた雰囲気や漂わせる他の4つの事件と比較した上でも、最も、そして唯一現実性のあるものと思えた。それに加えてその出来事については、実証や正確な記録も残っているのだ。そして科学技術の巨大な発展を遂げた現代社会の成員としての人間にとつて、最も純粹な恐怖を呼び起こさせるものでもあった。

そこで支倉は、再び布川の方に目をやった。

窓の外の景色。月は、見えない。道の左右にある林が、風に揺れ、音を立てる。車中にまでその音が聞こえてきたわけではない。揺れる林を見て、支倉がその音を想像したのだ。同時に、風が肌に当たる感触があった。もちろん、窓は開けていない。いわゆる気のせいである事は、当然の事であった。にも拘わらず、支倉は震えと同時に、微かな寒気を覚えた。

すると、だ。まるでその瞬間を待っていたかのように、助手席の布川が再び、あの空港の軽食喫茶で歌っていた童謡を口ずさみ始めた。

白い実が一つ……

赤い実が一つ……

「何の歌ですか？」

支倉は助手席の布川に聞いた。支倉から布川に話しかける機会には、今までにそれ程なかった。赤姫山に纏わる5つの事件の内、5つ目。それについて巡らせる思考を、脳裏から追いやるう

とした言葉であったのかもしれない。

「ああ——これですか。」

布川はそこで歌を中断すると、微かに微笑を浮かべた。まるで、支倉の真意を理解しているかのような表情であった。

「これは、芦屋鷹一郎のつくった童歌です——面白いでしょう？」

芦屋の作った童歌。支倉はその存在を知らなかった。布川は一体、どこでこれ聞いたのだろう。

「貴方は、この歌を聞いて、何か思い出すものはありませんか？」

布川は前を向いたままの姿勢で、そう言った。思い出すもの——布川その言葉から、支倉は空港の軽食喫茶において想起した、小さな頃に聞いたあの童謡を思い出した。

「メンデルを思い出しませんか？」

直後布川は、そう言った。

——メンデルの法則。支倉はかつて得たその知識を想起した。

しかし、登場する語句のある程度の類似性を見る事は可能だろうが、それを布川の歌っていた童謡から直接連想させる事には無理があるようでもあった。

「ほら……あのエンドウ豆の、豆を使った実験です。豆の形状、

色、さやの色、形、花の色、付き方、茎の背丈という7つの点に着目し、対立した形質の交配によって子孫に現れる形質の違いについて行った実験ですよ。優性因子、劣性因子とかの。——鷹一郎さんは、遺伝学にも興味があるようですかね。」

メンデル……支倉は、自分の知っているヨハン・グレゴール・メンデルについての知識を想起した。

ヨハン・グレゴール・メンデル。1822年〜1884年。オーストリアの聖職者であり、植物学者、遺伝学者。シュレージエンの農家に生まれ、リプニクの高等小学校に入り、オパバの高等学校に通った後、ブルノのカトリック教会に入り司祭となった。

その後教会からウィーン大学に留学して数学・植物学を学び、その後ブルノに戻り国立実科学校の自然科学の教師をしながら、1856年から8年間教会の庭でエンドウを材料にして交配の実験を行い、かの有名なメンデルの法則を発見した。実験結果を1865年、「植物の雑種に関する実験」という論文にまとめ、発表したが、実験から得た情報を数学的に処理する手法が当時画期的であったため、その時には認められず、死後ド・フリースやコレンス、チェマルクらの研究で再発見され、ようやく認められた。メンデルはその他にもミヤマコウソリナについての研究も試みたが、顕微鏡や人工照明等の過度の使用のために目を悪くし、そのためか研究にも大した成果はなかったとの事だった。以上が支倉が人物辞典や遺伝学の教科書などで見た、グレゴール・メンデルの略歴だ。

布川は、歌の内容がメンデルの法則を思わせる、と言いたらしい。しかし、布川の歌っている童謡は、メンデルの法則と直接比較しても、共通点や符合する点は、使用されている語句を除き、ないように思われた。しかし、布川がメンデルの法則を誤認しているとも思えない。そう考えると、布川はただ単に遺伝学を

連想させるといふ事を指す事が目的で、メンデルの法則という言葉を出した事になるのだろうか。

「そこなのですが——最後の赤と赤ではいったい何色か、というものです。普通に考えて、何色になると思いますか？」

そこで、その瞬間を待ちかねていたかのように、布川が言った。支倉は迷わず答えた。

「赤です。」

当然だ。全く同じ赤の色をいくら混ぜたところで、色が濃くなる等の、変化が発生する事はない。——水でも混ぜない限り。

ここで支倉は、自分がチューブ絵の具の色でこの事を考えている事を悟り、ふいに過去の記憶を想起した。確か絵の具に例えたのは、支倉の高校時代の教師だった。

そこで、支倉は、玉で考えてみた。箱の中に赤い玉をいくらたくさん入れても、色は変わって見えはしない。しかし、真実はそうであらうか。

支倉の思考は突如、現在交わしている会話から離れた事柄に向かった。同じ何かを見続ける際、発生する狂気。そう——それは確か、支倉が現在妻と共に別居している、娘の真知子に平仮名を教えていた時だ。真知子は何故か分からなかったが、「み」という字を書く事が、その当時——2歳程だったろうか——苦手だった。支倉はそれを繰り返し教え、真知子はいつも画用紙に書かれた「み」という字を見せに来た。異変が起こったのは、その時だった。画用紙のようなものに、クレヨンで繰り返し書かれた「み」という字を見ている時、支倉は突如、実際の「み」という

## 1. 記憶

字を想起する事が不可能になったのだ。

支倉は慌て、妻に「み」という平仮名を書かせた。しかし——その字を見ている中で、支倉はその文字が真実の「み」であるのかどうかの、疑惑の念を持ったのだ。

「み」。その字が、突如不自然に思えた。妻の筆記で紙片に書かれたその文字は支倉の脳裏で巨大化していき、最終的に支倉の脳裏は拡大されたその文字に埋められていた。

自分を呼ぶ真知子の声で我に返った自分の脳裏から「み」の文字は消え、その直後テレビの画面に映った「み」の文字に、支倉は不自然を感じなかった。その感覚を後に妻に訴えたところ、かつて毛筆をしていた際、そのような感覚があった、と言っていた。同じものを見続ける事で生まれる、それに対する疑惑の念。それはある種の狂気であるのかもしれない。

確定した、現実。その本質を長く見極め続ける事により、その存在は疑惑の対象になり得、不自然に見える瞬間がそこに存在するのであるのか。

「ええ、その通りでしょうね。赤と赤をいくくら混ぜたところで、赤以外の色はありません。——では、これを遺伝字に代置してみましょう。」

布川は支倉の答えに対して、口を開いた。

「白と赤の調和が桃色、赤と黄色の調和が橙、と色々あるのでしようが、当然赤と赤という全く同様の人間は存在し得ません。ですが、これをこの歌ではそう歌っています……勿論、それでも次は赤、という事になりますね。さて、ですがこういった事が可

能になる生物もいます。……何だと思えますか？」

支倉は、布川の質問に、少し間をおき、考えてから答えた。  
「細菌などですか？」

布川はニヤリと笑うと、言った。

「そう、その通りです。原核生物を中心とする単細胞生物は、単体増殖を可能とします。——一匹の同じDNAを受け継ぐのですから、当然の事、同様のものができるわけですね。しかし、この場合赤い実が2つ、次の実は赤。登場する実は2つです。歌では3つになっている、という事になります。即ち、全く同様なDNAを持つ2人の人間からは、2人と同様のDNAを持ち合わせた人間が誕生する、そういう事になります。2つの同様な人間を作る。これはクローンですが……赤と赤、男女別でなければならぬという、条件が入りますね。」

布川は言った。支倉のハンドルを握る手が、微かに震えた。会話は徐々に、あの事件に向かっているようでもあった。

「そう——赤姫山に纏わる5つの事件の1つに、それに関係した事柄がありましたね。」

そう、布川は知っていたのだ。

あの、5つ目の事件を。

寺山貴之についての事件の直後の、明治2年の初め。国府町に直径30cm程の、隕石が落下したとの記録がある。

流星とは、微少な粒が宇宙から地球の大気中へ突入する際、大気の摩擦で燃えて光って見える物質の事だ。この粒を、流星物質

という。大きさは数cmから0.1mmのものまでがある。これより大きなものになると、燃え尽きずに地球にまで落ちてくる。それが、隕石だ。隕石の多くは、地球の岩石と類似した成分から出来ている。鉄分を含んでいるものもあり、これを隕鉄という。隕石の特徴は、表面が焼けて薄黒く光り、浅い窪みや熔けた筋がある事だ。また、中に球形の微少な粒を含んでいる事などがあり、太陽系が誕生した時に、高い熱で熔けてきた球形の宇宙塵を取り込んでできたと言われている。つまり、隕石は太陽系が誕生した際の記録を残しているものでもあるのだ。

宇宙塵というのは、隕石よりも流星物質よりも微少な粒の事であり、大気中に浮遊し、ゆっくりと落ちてくる。隕石・流星物質・宇宙塵は、地球に落ちる以前には、太陽系をめぐる軌道を回り、太陽系の最も小さな仲間、という事になる。そう、言うまでもなく隕石は宇宙からの落下物であり、そこには全くの未知である物質が含まれている可能性がある。宇宙からの落下物が全て発見されているものに属するとは言えない。実際、国府町に落下した隕石についても、過去のものであるためにそれ程多くの事柄が判明しておらず、事実隕石と呼べるものであったかどうかとも疑問なのだ。宇宙から過去発見されていない病原体等に乗せて落下してこないという保証は、完璧にはない。この事件も、その一種が引き起こしたものだという人間が、過去大勢いたようだった。

そう——その隕石が町に落下してから2年程の間、国府町のあの特定の地域で生まれた子供達に、異常が発生したのだ。と、いつてもシャムの双生児のようなものとは明確に異なるものであ

り、少なくとも子供達が生まれた当時、その異常は明確ではなかった。しかしそれは、その子供達が成長し、より多くの情報を与えられていくにつれ、少しずつ明確な異常として意識されていった。そう——子供達は皆、「天才」になったのだ。ある子供は驚異的な音楽の才能を持ち、ある子供は驚異的な絵画の才能を持つ。それは子供がまだ3歳、4歳という年齢の当時より明確となり、その能力には驚異的なものがあつた。

隕石が落下した後2年程経って生まれた子供には、既にそのような異常は見られなかったのだが、その短い期間に生まれた10数人の子供は、成長するにつれ、その驚異的な才能をより開花させていった。生誕したその時点より、素質的に140以上の知能指数を持つ天才と定義され、まだ4歳、5歳という時から微積分の問題を解くという天才児達は、いざれば一般人となる。成長すれば誰にでも、微積分程度の問題ならば解けるようになるからだ。天才児は、小さな頃のみ世間で騒がれ、以後はそれ以上の何物も得ない。しかし、国府町の天才児達は違つた。時代の関係もあり、それほど騒がれる事もなかったものの、その能力は年齢を増す程に優れたものとなつていき、常に常人を超越し続けている。恐竜は人間と異なり、死ぬまで成長し続けるという。国府町の天才児達の「天才」としての能力は、それと同様であつたのだ。しかし、その天才児達は、1人2人と国府町から姿を消し、最終的にその全員が町から姿を消してしまつた。が、それも領けた。天才児達は人々に畏怖される存在として、常に不気味な恐怖の対象として見られていたのだ。その中には、驚異的な才能を妬

## 1. 記憶

むものや、敵愾心にそれを代置する人間も現れ、天才児達に対する疎外的意識が、町の人間の中に芽生えていったのかもしれない。そう、そういった環境の中、子供達は消えていった——そう、消えた時には、皆子供ではなく、成長した人間となっていたのだ。若屋鷹一郎の過去などについては、一切明確にされていない。ともかく、若屋鷹一郎という名さえ本名かどうか分からないのだ。もしかすると、鷹一郎は国府町に戻ってきた、天才児達の子孫なのではないか。機巧館の建設と共に高まってきた鷹一郎の知名度と共に、国府町の隕石と天才児達の事についての文献が出回り、最近ではそんな風評がある。しかし、その風評を信じるとすれば、天才児の能力・才能はそのまま、まるで色盲のように、次の世代に受け継がれる、という事になるのだ。

「純粹な恐怖という概念が、そこに導き出せると、支倉は考えていた。」

「国府町の天才児についてですが——かつて多くの人間がそう言っていたように、私は明治2年に国府町に落下した隕石に、何らかの病原体が付着していたものであると考えのですよ。宇宙からの生命体、科学冒険小説のようですが、案外放棄できる可能性ではありません。つまりこれは、妊婦に反応するというのですから、米国によって製造された、人体に悪影響を及ぼす化学兵器が、自然に生まれる、というような事になります。それも、さらに誇張され、恐怖的なものとして、それは我々の目前にあるものであると思うのです。」

支倉がその事件を脳裏に反芻し終えた時、布川は口を開いた。人間の頭脳だ。10秒程……いや、0.5秒程しか、支倉がそれを想起するのに時間はかからなかったのかもしれない。しかし——真実はそうなのであるうか。支倉はふと、そんな思考を巡らせた。しかし、車の運転席の前についた、時計の表示版が、それが1分に満たない事を示していた。

「ですが、天才児達の身体に、シヤムの双生児のような身体的障害があるわけでもないでしょう。」

支倉は布川の言葉に、即座に返答した。答えずにいる事が、自分の巡らせる思考を相手に悟られるようではなかった。

「ええ、その頃は。——今はどうなっているか、分かりません。」

「えっ？」

布川の口走った奇妙な言葉に、支倉は思わず反問した。

「もう、100年以上が経っています。そこに進化がない、という証明はありません。」

「進化？」

「Mutation——突然変異ですよ。」

突然変異、突然変異……その言葉を、耳にした事があった。生物は突然変異と自然淘汰によって進化する。近年あらゆる方向から否定されているものの、現在の総合進化説——ネオ・ダーウィニズムに従うとすれば、そうなる。少なくとも、布川はその意見に賛成なのだろう。

DNAと遺伝子の違いを知ったのは、いつごろだったろう。D

NAと比較すると、遺伝子は小さい。そう、遺伝子というのは、DNAの中にある数多くの設計図の内の1枚なのだ。

1. 8 m × 6 0 兆倍という長さの遺DNAが、螺旋構造をしていてと世界で最も最初に発見したのは、米国のジェームス・ワトソン博士・英国のフランシス・クリック博士の2人だ。英国ケンブリッジのキャンペンディッシュ研究所で縁があり、手を結んだ2人は1953年、英国の科学雑誌『ネイチャー』にDNAは螺旋構造をしているとする共著論文を発表した。この発表は後世に大きく残る事になり、その証拠に現代人の大半は、DNAという言葉から2本の線が螺旋状に絡み合ったものを連想する。そう、そのDNAに、人間の一生の全ての遺伝情報が書き込まれているのだ。

日本で使用される文字の種類には、驚愕すべきものがある。平仮名、片仮名、漢字と合わせれば、それこそ恐ろしい数字が導き出せるだろう。英語のアルファベットでさえ、26文字がある。にも拘わらず、人体の設計図、DNAの暗号に使われる文字は、ただ4種類なのだ。アデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、チミン(T)とこれがDNAに使われている4種類の塩基であり、一般によく知られているものだ。これの3文字の並び方で、一個のアミノ酸を指定している。例を言えば、GAAでグルタミン酸、GATならアスパラギン酸を指定する、というわけだ。そして、細胞中の特定の遺伝子が活動を開始すると、3文字ずつが1つのアミノ酸を作り始め、そのアミノ酸がいくつも連なり、生命に不可欠な蛋白質となるわけだ。しかしその蛋白質を、

実際にDNAのみで作る事は不可能だ。

DNAに似たもので、RNAというものがある。DNAはデオキシリボ核酸の略だが、RNAについてはリボ核酸の略だ。デオキシ、という言葉が酸素が1つ欠如している事を示すものである事を考えれば、単にRNAから1個の酸素を除いたものがDNA、と考えられる。遺伝子が果たす最も大きな役割は言うまでもなく蛋白質の合成だが、前述した通り、実際にはそれだけの力で蛋白質合成は不可能だ。そのために、RNAの助けを借りざるを得なくなる。生体内で蛋白質合成の命令が出ると、DNAの遺伝情報はいったん、RNAの仲間である伝令RNA、即ちmRNA(mRNAメッセンジャー)にコピーされる事になる。専門家は、これを「転写」と呼ぶ。そのRNAは細胞の核から細胞質の中にある、蛋白質合成工場と名付けられたリボソームに着き、そこで蛋白質合成を開始する。その際にアミノ酸を運ぶtRNA(tRNAトランスファー)やrRNA(rRNAリボソーム)も協力する事になる。RNAの情報をを使用した蛋白質合成には、「翻訳」という名も付いている。RNAには3種類あるが、それがmRNA・tRNA・rRNAの3つだ。内存在量の最も多いのはrRNAで、3種類中rRNAが全RNAの8割をうめる。DNAが長い鎖であるのと反対に、RNAはいずれもごく短いのが特徴としてとらえられる。また、RNAもDNAと同じく、遺伝子暗号の文字、すなわち4種類の塩基を持つている。アデニン・グアニン・シトシンの3つはどれも共通だが、最後のチミンは、RNAではウラシル(U)になっている。これも特徴として捉えられる点であろう。

## 1. 記憶

さて。実は、ウイルス・細菌などは例外とし、それよりも高等な生物のDNAには、遺伝子として意味のあるエクソンと呼ばれる部分と、遺伝子としては働かないイントロンという部分があるという事が明確にされている。しかもエクソンの占める割合は、僅か全体の5%に過ぎない、という。が、「ナンセンスDNA」「ジャンクDNA」の名称のあるイントロンが、事実意味のない配列であるのか、実際には秘密の任務を与えられたものであるのか、それは定かでない。そのため、新たに浮かび上がった生命の謎、イントロンを詳しく研究しようという動きも出てきている。ただし、前述した「転写」の後、即ちDNAの遺伝情報でmRNAにいったんコピーされた後、イントロン部分は振るい落とされてしまい、エクソン部分だけが連なった本物のmRNAとなる事が分かっている。これは専門用語でスプライシングという。ともかくここから理解できるのは、イントロン部分はDNAにおける最重要な働きであると考えられる蛋白質合成には、全く関わっていない、という事である。

ここで、突然変異についてだ。突然変異とは、無論の事遺伝子に起こる突然的な変異の事を指す。突然変異は、遺伝子の偶然による欠損や、組み換え等に生じる何らかの誤りがそのまま複製される事により、発生する。正しく複製され、子孫に受け継がれるべきDNAの塩基配列が、偶然のコピミスによって突然変異を起し、さらに複製が重ねられることにより、やがて新たな種へと発展する。つまりは、進化の事だ。そう、ここでは、突然変異が即ち進化への1つの段階であると見なされるわけだ。偶然によ

る遺伝子の事故は、X線や紫外線を照射する事により、人工的に起こさせる事も出来る。しかし、やはり殆どの場合、これは偶然に発生する。それは、人間などの多細胞生物に限って起こる事ではない。ウイルスのような単細胞生物にも、起こりうる事なのだ。例えば、エイズウイルスだ。あのエイズウイルスでさえも、もとは人体に無影響の極めて大人しいものであったのかもしれない。それが、突然変異による進化により、無影響どころか、人類に猛威を振るい始めた。布川は、隕石に付着していたウイルスが、100年以上の年月を経て、人間に対する悪影響の強化されたものになっている可能性がある、と言っているわけだ。

しかしだ。反対に、突然変異により、今まで人類に猛威を振るっていたウイルスが、突然無影響なものになる事もあり得る。しかし布川の言動は、国府町に落下した隕石に付着していたと仮定されるウイルスにおける可能性を、完璧に否定していた。

「——私は突然変異によって、隕石に付着していた病原体が人類に対する無影響の方に傾く場合がある、とは考えません。」  
布川は、その事を、すぐに明確な形で口にした。

「病原体が、人間に対し無影響になりにたくないからです。」  
「えっ……？」

支倉は、当惑すると同時に、自身の聴覚を疑った。  
ウイルスや細菌といった単細胞生物は、基本的に思考を持つ事はない。それは人間を除いた殆どの生物においても、そう言える事だ。ただ、増殖、繁殖、自分の子孫を増やし、遺伝子を後世に

残すためにのみ生存する。何故、何を目的にそれを目的とする事が定められたか、それを思惟することはないのだ。

布川はまるで、ウィルスに自身の思考が存在するかのような可能性を口にした。また、突然変異を自身の願望のままに左右する事が出来る、という意志をそこに見る事が可能であった。

「ですが……単細胞生物に、そんな思考があり得るのですか？」

支倉は助手席の布川に対し、そう言った。目の前にある看板を見、ハンドルを切り、左折したのがそれとほぼ同時だった。

布川は、ニヤリと笑った。

「——国府町に落下した隕石に付着していた病原体が、細胞により構成されていたという証拠がどこにあるのですか？」

支倉はその言葉に、一瞬当惑した。しかし直後、その意味を理解した。

「そこにおける全ての理解が不完全である、無限のマクロコスモスです。第一、国府町に落下したある種の病原体がウィルスと称せるものであるのかどうか、不可解です。ただ——進化における、またはそれへの段階は、全宇宙における一定の共通性を持ち、我々と同じであると考えます。」

布川は、言った。

宇宙が誕生してから現在に亘り、約150億年が経過したとされている。その宇宙について、人間の理解範囲は無限小だ。それを証明する事例にしても、幾らでも出す事が出来る。そこには現在科学的に証明されている常識から外れる事になりかねない、いかに奇怪な、地球の常識を遙かに超越する生物や物質、現象が

あったとしても不可解ではない。その宇宙から地球の大気圏に落下し、突入した隕石にそういったものが付着していたという、限りなく0に近い確率が、国府町に落下した隕石に表れていたとすれば——布川の言った事を認めざるを得ない事になる。

しかし、布川の言葉には続きがあった。進化における、またはそれへの段階は、全宇宙において我々と同じである。——宇宙に対する全ての理解が不完全である、という言葉と比較すると、その言葉には明確な矛盾が見られた。布川の口にした言葉の双方を受け入れるとすれば、地球の常識を超越する生物・物質・現象に満ちた宇宙の中で、進化のステップのみは普遍的なものである、という事になる。

やはり、矛盾していた。

信号が赤になり、支倉はブレーキを踏んだ。一瞬、この会話にそれと共に終止符をうち、ここでブレーキを踏まなければならぬのかも知れない。そんな一種滑稽な思考を巡らせた。

布川は、続けた。

「これは極めて非科学的発想、と言われればそれまでかもしれないが……私は、進化はやはり、願望によって引き起こされる一面があると考えるのです。生物が海から陸上がった事も、陸から空へ上がっていく生物が誕生したのも、やはり進化を遂げた生物に、陸に上がり、さらには空へ飛躍したいという願望があった事からであると、私は考えます。——多細胞生物に見られる複雑な体内器官にしても、同様です。偶然の突然変異のみで、進化がそこまで進行するとは、考えられません。人体は驚異の小宇宙

## 1. 記憶

——これは思考に対してそう言われる場合が多いのでしようが、ミクロコスモス、と度々称される機会があります。そのミクロコスモスを創造したものが偶然による突然変異と自然淘汰のみとは、私には到底信じられないのですよ。

人間が他の生物と最も違う点は、恐らく自身を自身として認識し、我と汝が弁別される点でしょう。それは単なる偶然により、人間のみにそのような変異が発生したのではなく、自身を認識し、他者から弁別したいという願望があるからこそ、驚異的な進化が実現し得たのです。思考や願望がDNAの遺伝情報に変異を与えるなどという考えは、非科学的かつ奇妙であるかもしれませんが——進化の過程にある願望の存在の探究は、種の発展や進化という概念の探究に、恐らく不可欠なものであるでしょう。」

そこで布川はいったん言葉を切った後、最後に言った。

「その事は未知のマクロコスモスにおいても、恐らく普遍的なものでしょう。」

布川は、ニヤリと笑った。

布川の考えは、一般社会における生活人からすれば、信じがたいものだ。しかし、支倉は何故か、それをある部分において信じる行為が可能であるかもしれない、と瞬間的に意識した。それも、支倉が最も矛盾を感じた、布川の言葉の最後の部分を、だ。

——話し手が布川であったからなのかもしれない。

ふと、そんな思考を巡らせた。事実、布川が口にする言葉の殆どを、支倉は疑う事無く受容していた。疑い得ない——そう、一切の疑惑を持ち得ない正当性が、そこにあるようでもあった。

「それと、何故ウィルスが人間に対し無影響にならなくなかったか、ですが……それは一種の文化というか、風習のようなものなのかもしれないね。」

風習。支倉はその言葉を、脳裏で反芻した。反芻し、何度となく繰り返す事により、容易に忘却してしまおうそれを、留められる予感があった。

「風習——実は私は法律、という構造も、それと同様の本質を持つものであると考えているのです。勿論それは法律と同義である未開社会における風習が、後に法律へと発展していった文化人類学的証明からも推測が可能のように、根元的本質がある部分において現在に亘って共有しているであろう、という理論に基づき、その共有される部分について述べるわけですが——何故ならそれは、必ずしもその規律に従い行為する成員の全員の同意に基づくものではなく、社会契約論的立場からそれを合理化し肯定する行為は可能であっても、それは真実である保証のない、単なる仮説としての意味付けに過ぎないのです。起源も発生の理由にしても正確に判明しないまま、その形体のみが残り、それが現在に亘り実行されている、という事です。」

そう……1+1+1+2である事も、同様です。全ての人間が1+1+1+3と言え、1+1+1はその瞬間から3であり、それは十分な合理性を持つ理論であると定義されるのです。そもそも数、という概念にしてもそれは絶対的なものではなく、ギリシアを中心とする過去の数学者による欺瞞、と考える事も可能です。それは先

程にも言ったように、正確な起源の探究の困難な、寧ろ考古学的及び文化人類学的領域にある疑問であり、それは風習に類似している、と言えるでしょう。

さて——ここに熱力学から発生した哲学である、複雑系、という概念を持ち込む事が可能です。即ち、偶然の揺るぎが全体の構造を決定し、流動的であり不安定な個人の動作が、しかも自己組織的に、巨大な安定した構造を生む、という事です。そこにおいて、科学哲学者の中でも殊にプラグマティズムを徹底させた、クワインの理論を例とする事が可能でしょう。つまりは、科学は生活に有用な構成に過ぎないものであり、一対一対応による客観性を持つ真理としない、という考えに法律等を代置する事によっても、類似した見解が導ける、という事なのですが——つまりは、法律にしても風習にしても、それは人間の言語・情報等の伝達上の土台となり、社会における倫理的規範や人間の行為に対する価値観を説明するために使用される好都合な枠組みでしかなく、その実用性を維持する上で、その体系及び機構が急激な転換及び転回を見せる事は好ましくない、それ故に維持される存在でしかない、という事です。即ちそれは、依存する枠組みの崩壊を社会を構成する成員の全員が承諾しさえすれば、常に最良の状態を求める人間の欲求からその必要性が導き出されたときとされ、確定し完璧な必然性のあるかに見えるその構造の必要性をも議論する事が可能であるのです。」

布川は、ニヤリと笑った。

支倉はそこで、確か中学生当時であつたらうか、ある過去の記

憶を想起した。支倉の中学への通学路には、ほぼ毎日、近くの焼却場から飛んでくる、黒くなった、燃えた紙片のようなものが落ちていた。子供達は、それを自転車の前輪で踏むたびに、汚い、と互いに莫迦にし合っていた。少し考えれば、それがどうでもない事であるのは理解出来る。しかし、誰もそれを口にしようとはしない。それを言ってしまう、もう莫迦にする理由がなくなるからだったのだろうか。そう——それがいるいは布川の言う、好都合の枠組み、というものであったのかもしれない。

「病原体……実際の正体は定かではありませんが、ここでは敢えてそう呼びましょう。その隕石に付着した病原体にも、発生の起源等も一切不明である、風習的な目的として、人体に悪影響を与える傾向があつたのではないか、という事なのです。それは増殖と繁殖、生殖を生物学的衝動により全生物における普遍的目的とされている事に対するその目的の意味と、目的とする到達点への不可解、その悲観的厭世主義的な思想にも繋がりが得る疑問と、一種同質のものであるとも言えるでしょう。こう言ってしまうと、当然の理論をかけ離れた事例により複雑化したのみのようですが——少し、主題がずれていきますね。ともかく私がここで強調したいのは、先程にも言ったように、病原体はより人体に悪影響を及ぼすために突然変異を繰り返すに違いない、という事です。無論、それは一般的概念として突然変異という概念を使用し、そのままではめる事は寧ろ不可能でしょうが……ともかくは、願望、という事です。これは飽く迄も事例を極端に拡大したものです。私は隕石も病原体により地球の人類に悪影響を及ぼす目的

## 1. 記憶

で、意図的に地球の大気圏に突入した、と考える事も可能であると思うのです。天才児達を作ったのにも、何か理由が……。」

ここで、布川は言葉を切った。支倉はハンドルを強く握り締めた。布川が言葉切る時、次に口にする言葉は、自分を圧倒させ、共感させるものであろう、と支倉は思っていた。そう、どのような準備を行ったところで無駄な対象に対し、準備を進行させる。支倉の行為は、つまりそれだった。

布川はニヤリと笑い——まるで支倉の巡らせた思考を察知していたかのように、再び口を開いた。

「人間は自分の認識、という、他の生物には絶対に所持し得ない感覚を習得する事を可能とします。ですがただ一つ、他の動物には十分に耐えられるのに……というより感じ得ないのですが……人間のみに耐えられない感覚が存在します。それが退屈の意識である、と言えるでしょう。病原体ももしかすると、その退屈のために、人類に危害を加える事でその退屈を解消しているのかもしれない。」

布川は不可解な微笑を浮かべた。不可解——それは布川の今の言葉に対しても言える事であった。再び口を開いた後の布川の話は、それ以前のものと一変していた。しかしそれは、支倉を圧倒させ、共感させるに至る事はなかった。

支倉の期待と異なる結果が、そこにはあった。

漆黒の闇の中に不意に浮上したその光は、瞬き、揺らめいた後、突如その輝きを増した。支倉は車外の外の闇が、ふとした隙間から車内へ流入しているかのような錯覚を起こした。

その事を意識した時、夜は更けていた。既に、空港を出てから3時間以上が経過している。もうじき、日付が変わるだろう。

——それにしても、だ。何故、このような深夜に機巧館に向かわなければならぬのだろう。大体、午前6時頃に羽田を出、鳥取空港に向かえば、それから車を走らせ、夕方には機巧館に着く事が出来る。何故監視片は、深夜に機巧館に到着する予定を指定したのか。

2人が羽田に着いたのは、午後6時半程だ。そこで支倉はある連想をした。——そう、吸血鬼だ。大体その登場するの小説でも、主人公達が怪物の住処に行く時は、行く途中では明るいのに対し、そこに着いた時は夜だ。

支倉達の場合は、車に乗った時点で、既に夜だったのだが。

そこで支倉は、またしても奇妙な思考を巡らせた。機巧館の間は、皆吸血鬼のような怪物なのではないか。そこで、夜に到着した自分達に、何らかの危害を加える事を企んでいるのではないか。事件が起こった、というのは仲間が外部の人間により殺されたという事であり、館の中から出ようとしたくないのは、そこで仲間を増やし、自分達の力をより強力にするためなのではないか——莫迦らしい。

支倉はそう考え、思考を中断させた。

その瞬間、日付が変わった。

2月11日日曜日

その先、2人は沈黙を続けていた。支倉は時折、布川の方を見た。それは毎回、布川が眠っている事を想定し、その方を見ていた。布川の両眼の場所に位置する暗い窪みの奥に見える、深い翳り。――

しかし布川が眠っている事を想定し、その方を見る時……布川はゆっくりと体を動かし、忍び笑いを漏らした。支倉はその度に、慌てて前方に視線を移した。

思った通り、日付が変わった後数時間もせずに、車は国府町に到着した。(編集者註 この数時間は疑問であるが、原稿のままとして。) 明かりが漏れている家は何故か殆どなく、24時間の営業を行っている一部の店のみが、微かに光を放っているのみであった。山に近付くにつれ、その明かりは徐々に減り、遠退いて行った。

確実に、目的地には近付いていた。この分では確実に、機巧館に到着するのは深夜になる。そうならば、2人を出迎える人間はいないかもしれない。――しかし、支倉はすぐに、その可能性が否定される事に気付いた。機巧館に在住する芸術家達の中には、深夜にも徹夜で作業に没頭している人間がいるだろう。

直後、道路の上にある、街灯に照らされた青い看板が見えた。「赤姫山←2km」とあった。支倉は指示通り、そこを左折した。

夜のために赤姫山は、もしかするとあれかもしれない、という程度の、漠然とした影のようなものでしか見えなかった。しかし、道路の傾斜が徐々に傾いていく感覚が、支倉にも感じられていた。道路の脇に立つ街灯も徐々に姿を消し、山道に入ると、それは無くなった。が、道は一本だ。記憶が曖昧であっても、迷う事はなかった。ここが赤姫山である事は、間違いない。そして、この登って行った道の先に、機巧館はある。

纏綿とした暗闇の中。支倉はかつて読んだ経験のある、ある小説を思い出していた。レ・ファニユの短編だった。その途中に、こんな場面があった。ローゼという女が死者の花婿に、馬車で連れ去られる中途、目指す町まで後数kmというところで、昔風に白い髷を生やし、黒い服を着た4人の男達が、四方からパラパラと飛び出して来たと言う。よく見ると、籠のようなものをついでいる。死者の花婿は馬車を降りると、ローゼを押し込むように無理矢理その籠に乗せ、自分も乗ると、そのまま行ってしまった、という。

小説の中のこの場面は、何故か支倉の脳裏に強い印象と共に、留まり続けていた。そう――深い闇の中から飛び出してくる、4人の男。訳者がつけたものらしいパラパラという表現が、何故か支倉の記憶に残っていた。

山道は頻繁に折れており、折れながらも、道は斜面を進んでいた。機巧館に続く1本の道が軽く曲線を描く度に、支倉はパラパラと飛び出してくる男達の姿を想像していた。

## 1. 記憶

その時、雨が降り出した。最初は小雨程度だったのだが、徐々に強まり、それは最終段階として前面の車窓を激しく叩き始めた。支倉はワイパーを動かしたが、激しい雨に、それは殆ど無意味だった。

それと同時に、布川の目がゆつくりと見開き始める瞬間を、支倉は感じた。そもそも眼珠のない布川が目を見開くはずはない。しかし、何故か支倉にはそう思えた。布川のその閉じられていた両の脛が、ゆつくりと見開かれていく。……

道の両側は、いつしか鬱蒼とした樹林に閉ざされていた。幹から垂れた枝が、時折車の天井を掠った。

寒気を感じ、支倉は暖房の設定温度を上げた。しかしそれでも、車内の気温は一向に上昇しようとしなかった。どこからか、暖気が車外へ抜けて行くようではなかった。支倉は、外気を確認した。零下5度、という表示板に浮き上がる文字が確認できた。寒いはずだった。今から山を登っていけば、今よりも寒くなるだろう。傾斜が増すに連れ、気温は徐々に下がっていった。

その時支倉はふと、自分のスケジュールノートが衣服の胸ポケットから、車の時刻と外気・車内気温を示す表示板の上に移動している事に気付いた。支倉はその衣服に慣れておらず、胸ポケットの位置もどこか不自然で、気になる、とは思っていたのだ。確かに、自分でハンドルを握るのに邪魔になる、動かそうと思ったのは確実に覚えている。しかし、実際にそれを行動に移した事は記憶していなかった。ハンドルから左手を離し、自分のポケットの手帳を掴み、時計のデジタル表示板の上に乗せ、手を元

に戻す。無意識のうちにもやれるような、容易な動作だった。しかし、自分はそれを本当に実行したのだろうか。不安だった。いや、それが不安なのではない。そうでなければやったのは誰なのか、という不安だった。布川か。いや、自分に違いない。しかし、自分でも布川でもない別のものであったとすれば……が、支倉は自分でも布川でもないものより、布川の実行した場合の方が、寧ろ恐怖をかき立てるものであるように思えた。支倉の巡らせた思考を察知した布川は、支倉のポケットに素早く手を伸ばし、スケジュールノートを掴み、デジタル表示板の上に乗せ、気付かれぬよう手を元に戻した。布川なら、多分やり得るだろう。——支倉は、そう思った。しかし、自分はそこまでの事を見逃す程に運転に集中していたわけではない。

そこまで思考をめぐらせた時、支倉の脳裏にふと、ある映像が浮上した。つい先程、暖房の温度を上げた際、ハンドルに手を戻す前に、自分のポケットからスケジュールノートを取り出し、デジタル表示板の上に乗せる。自分は確かに、その動作を実行した。それを、今初めて想起したのだ。何故自分は、それを思い出す事が不可能であったのか。

——  
気付いた時、雨は既に止んでいた。隅の方に僅かに水滴の残った車窓を往復するワイパーを、支倉は慌てて止めた。もしかすると、通り雨だったのだろうか。が、季節はどうだろう。……何とも言えなかった。

その時不意に視界が開けた。先程まで左右に広がる樹林に阻ま

れ見えなかつた暗い空が、見えたのだ。もしかすると今の雨が、機巧館と外界を隔てるものであつたのかもしれない。そうやって、機巧館のある赤炬山の不思議の世界と、山の下にある現実の世界とを隔て、今自分達は不思議の世界に居るのではないか。

そして、遠く見えた。塔が1つ。そして、そこから真っ直ぐに視線を右に移したところに、もう1つ。2つの塔。考えるまでもない。機巧館の六角塔だ。方位から考えると、左の塔が西館のもの、右の塔が東館のものようだった。

微かに、湿り気を孕んだ外気が感じられる。一面の漆黒に刷かれた空に、微かな青みが差しているようでもあつた。幾重にも重なり垂れ込める雲の合間に刷かれる漆黒が、そこにおいて、一層濃さを増していた。

館は、屹立していた。

この時点で、支倉は初めて気付いた。自分達は、どちらの館に行くのだろう。奇妙なからくりの施された西館か、それとも四角館という別名の付いた東館か。果たしてどちらなのだろう。

機巧館は、確実に迫っている。これまで誰1人近付く事のなかつた狂気の館は、既に目前にあつた。

やがて、闇の中に漠然とした輪郭から始まり、徐々に延々と続く塀が見えてきた。一瞬、支倉は壁の上から複数の人間がこちらを見ているかのような錯覚を起こした。そう、塀の上で一定の間隔を置き、複数の人間が外を覗いているように見えるのだ。しか

し近づくに連れて、それが外部からの侵入者を防ぐための無数の槍である事が分かった。確かに、背の高さが同様であり、間隔に乱れも無かつた。機巧館は聞いていたそれと全く違わない形で、支倉の前に存在していた。林は途切れ途切れに続いていったが、雨は降る事はなかつた。が、寒さだけは相変わらず強まり続けた。布川は口を開かなかつた。それは言うまでもなく、迫る狂気の館の威圧感に言葉を発さないのでなく、周囲に立ち込める異様な雰囲気、静かに楽しんでいるように見えた。

一面に刷かれた漆黒の中に、微かに跳ね橋と、それを引き上げするための綱が見えてきた。闇の中にそれは、やはり漠然とした輪郭として表れ始め、やがてしっかりとその姿を現していった。木製の跳ね橋は、2人が来るためだろうか、下がっていた。

——2人は、機巧館に到着した。

「車で、渡れるでしょうか。」

支倉は、助手席の布川を見た。

「ええ……大丈夫でしょうね。」

ともかく幅としては、幾分の余裕があるかに見えた。近付いて見ると、それほど古くなっているわけではなく、車の重量には耐えられるようだった。

車はゆっくりと、跳ね橋にさしかかった。橋の両側に、柵のようなものは見えない。支倉は車窓の下の堀を、見た。闇と同様に黒く刷かれた水中に、引き込まれるようでもあつた。この堀の中に、長い2つの首を持つ大蛇がいる光景を、支倉は想像した。

## 1. 記憶

何とか、跳ね橋を渡りきった。

もしかすると出迎えのようなものがあるのではないかと支倉は思っていたが、生憎そのようなものは一切皆無であるようだった。道が正面に進んだところで3本に分かれ、正面・左右となっている事が分かった。

不意に、闇が濃さを増したようでもあった。

「どうしたのですか。」

そこで、布川が言った。支倉が車を止めたからではない。そう、支倉は無意識のうちに、車の正面のライトを消していた。

「どうかしましたか？」

布川は僅かに噴き出しつつ、支倉を半ば莫迦にするように繰り返した。

「あ、……すみません。」

支倉は、慌ててライトをつけた。再び闇の中に、2つの円が浮き上がった。

通常、夜遅くに1人で留守番などしている子供が、不意に恐怖にかられた時などは、階段等を大きな音をたてて歩く。が、支倉は違った。小さな頃から、そういった事があると、必ず静かに、息を潜めるかのように行動した。支倉はつい最近にも、眠っている途中で不意に目を覚まし、電気をつける事があった。が、すぐに切ってしまうのが通常だった。何故なら電気がついた方が、かえって何かに見られているような気がしてならないからだ。

今も、その時何かを感じ、反射的にライトを消したのかもしれない。

生物は発達における原初的段階から、自身にとつて危険な存在を理解している。どこかの地方に生息する猿などは、蛇を天敵とするために、紐状のものを見ると即座に逃げ出す、という事だった。人間も、そうだ。恐怖すべきものは、最初から理解している。赤、という色は、最初から危険を表す信号として人間脳に組み込まれている、という事を聞いた事があった。そう、火事の炎などだ。しかしさらに純粹な、恐怖——例えば闇への恐怖といった感覚も、人間はあらかじめ持っている。恐怖する、という本能があるはずだった。自分も今、それに類似した何かの存在を、感じたのかもしれない。

支倉は、そんな思考を巡らせた。

ともかくも、こうしていても仕方がなかった。

「降りてみますか？」

「ええ、そうしましょう。」

支倉と布川は、それぞれ車外に降り立った。不意に冷気が立ち込め、支倉はコートの襟を合わせた。

闇の中、布川に足元を注意するよう促す必要は、皆無だった。布川にとつては、普段と変化する事はない。

——暗い。支倉はその時、真の闇、という言葉連想した。街灯もネオンも、近くのマンションから漏れる光もない。いつの間にか、先程まで見えていた六角塔の漠然とした輪郭も、消えていた。光と言えば、車のライトの落とす、明りのみだ。

不意に聞こえた奇妙な音に、支倉は身体を強張らせた。自分と

布川の間を、何かを通つた事が分かった。この音を、支倉は以前耳にした機会があった。想起する事に、時間を要する事はなかつた。射撃訓練の際だ。

今の音は、銃声に違いない。

——再び音が聞こえた。

支倉は反射的に、布川をその場に突き飛ばしていた。支倉は、布川に覆い被さるように、続いてその場に倒れた。先程まで布川のいた場所を、弾丸が通過していったようだった。自分達は、狙われている。疑惑の余地はない。しかし、誰に？

銃声と共に、背後でガラスの粉碎する音が聞こえた。

思考を巡らせるだけの余裕は、既になかった。車のライトの片方が割れ、光が僅かに弱まった。続いて、音と共にもう一方が割れる音がし、同時に明かりが消え、舞台は暗転した。

偶然ではない。相手は、ライトを狙つた。周囲は一面の闇に刷かれた。相手は、どこから狙つているのか。

次の瞬間。突如、別の方向から光が差してきたかと思うと、不意にそちらの方から銃声があった。

少なくとも、自分達を狙っているのではない。別のものだ。間もなく接近してくる光が明確に分離し、2人の方に向かってきた。1台の車が、こちらに向かつている。やがて、先程まで自分達を狙っていた銃声が、向かつて来る車の方に向き始めた。車の方も、走りながら応戦しているらしい。時折、飛び散る火花が確認できた。

闇の中、銃撃戦が行われている。

支倉は徐々に近付いてくる光の方へ顔を向けつつ、再び自分達を狙う弾丸から身を隠すため、地面に伏せていた。

直後、弾丸が支倉の背を掠めた。続いて自分を狙う銃声を意識し、支倉は臉を閉じた。

——しかし、支倉を狙う、続く銃声はなかつた。同時にタイヤが引き裂かれるかのようなブレイキの音と共に、近くに低いエンジン音が響いた。

斜め上方からの強い光に、支倉は顔を上げた。強い光——それが向かつてきた車のライトであつた事実を認識したのは、臉を開いた瞬間であつた。見ると、向かつてきた車は既に2人の目の前にあり、そこでエンジン音を響かせ、横向きに停車していた。直後、ワゴン型の車の横の扉が開いた。中に1人の男が乗っている。肩幅が広く、頑強、という表現が適切であろう身体全体に、重く筋肉が確認できた。

「乗れ。」

「えっ？」

支倉は不意に現れた男の言葉に、一瞬対応する事が不可能であつた。

「乗れと言っているんだ！」

男は倒れている布川と支倉の腕を片方ずつ掴むと、一気に車内に引き上げ、扉を閉めた。男は前の運転席に身を乗り出した。

「このまま、館まで走れるか？」

運転席にいたのは、青年、という形容を使用するには歳を取り過ぎていく程の、布川に劣らない程の長身の男だつた。——誰も

## 1. 記憶

乗っていない助手席に、立てかけられた銃が見える。見ると、2人を車内に引き上げた男の傍らにも、同じものが見えた。

銃刀法違反。その語句が、ふと脳裏を過ぎる。しかし直後、それが無意味である事に気付いた。

ここには、法律などはない。全くの異世界だ。支倉は現実から離れた信じ難い状況を目前に、そんな思考を巡らせた。そう——それに加え、今支倉達は完璧に、支配される側にある。この場所において決定された秩序のみが、ここに存在している。……

長身の男はハンドルを切り、車を方向転換させると、アクセルを踏み込んだ。が、別の方向から聞こえる銃声はいったん止んだものの、背後で聞こえたエンジン音と共に、3つの光がこちらに向かっている事が確認できた。追跡してくるようだった。

「——追いかけて来る気か。」

2人を車に引き上げた男が、呟くように言った。

その時支倉は自分と布川、2人の男以外に、車内にもう1人の人間がいた事に気付いた。まだ、少年、という風だった。14、5というところだろうか。その少年も、傍らに銃を持っている。

「逃げ切れるか？」

先程の男が、運転席の長身の男に向かって言った。

車は3本の道の内、右の道に入った。2人を招いたのは、この人間達の間だった。方向から考えて、恐らく東館——四角館側だ。ならば、先程2人を狙ったのは、西館の人間だったのだろう。少なくとも、2人を館に連れ去ろうとしているこちらの人間に対し、あちらの人間は、たった今、2人の射殺を試みた。

追って来るのは、オートバイのようだった。2つの光のこちらの車に対し、あちらは1つの光で追っていた。その背後に、2つの光を放つ、もう1台の車が見える。それもやはり、追跡者のようだった。オートバイの方は、こちらの車を見失わない目的の誘導役らしく、銃を持っている様子はなかった。が、その背後に迫る車については、助手席の窓が開き、そこから覗く銃口が確認できた。2人を待っている間は、恐らくランプを点けずに、車内から狙っていたのだろう。しかし今はその姿を、ライトの明かりの中で明確にとらえる事が可能だった。

——

銃声が出た。

銃口との距離が近付き、その銃声が間近に響いた。同時に、こちらの車のバックミラーが粉碎した。

「くそう……」

そこで男は、傍らの銃を取った。開いた車窓から男が身を乗り出し、銃を構えた。

——銃声。付近で聞こえた轟音に、支倉は耳を覆った。

男の構えた銃口から、紫がかった煙が闇に流れている。しかし、追跡者の様子に変化は見られなかった。次の瞬間、またもや銃声が出た。

今度は、相手の方からだった。

「うっ——」

男が、車窓に乗り出した身体を車内に戻した。頬を掠めた弾丸が、男の頬に、深い傷をつくっていた。鮮血がゆっくりと、男の

頬を伝った。そして、続く銃声があがった。

低く、轟音が響いた。

次の弾丸は車の車体に、背後から命中したものであつた。車全体が、激しく振動する。支倉は、内側から扉に叩きつけられた。支倉の横で、傍らに銃を構えた少年が、前の座席の背凭れにしがみつき、振動に耐えていた。

「貸してください。」

そこで、布川が言った。言葉に、主語がなかった。しかし、男が持っている銃を指すものである事は明確であつた。

「何？」

布川は、ニヤリと笑つた。

布川は男の手から銃を取ると、自分の側の窓を開け、銃を構へた。

「おい、何をする！」

布川は、答えなかつた。

布川は、盲目だつた。照準が合わせられるはずがない。案の定、相手側から銃声があつた。明確に、車窓から身を乗り出した布川を狙つたものだ。

「危ない！」

が、不命中だつた。運転していた男が、意識して車の進路を変えたために助かつたのかもしれない。が、気のせいだろうか。支倉には、布川が微妙に身体を横に動かし、銃弾を避けたかのように見えた。

そして、布川の指が引き金に掛かつた。ほぼ同時に、銃口が火

を噴く。

瞬間、車を誘導していたオートバイが転倒し、道の脇に倒れ込んだ。弾丸は、バイクの前輪に命中していた。支倉は、言葉をしつた。

誘導のバイクがいなくなった後も、車は追つてきていた。布川は銃口をいったん上に向けると、そのままゆっくりと下に降りろした。布川は再び引き金に指をかけ、引いた。再び銃口が火を噴く。

相手の車の車窓から、道に転げ落ちる人間が見えた。支倉は思わず、息を呑んだ。

「やつたか？」

男は、布川を見て言った。

「——いいえ。」

布川はそう言うと、不可解な微笑を浮かべた。

「何故殺さない！」

男の眼は、異様な眼光に満ちている。そう——男は、殺人を目的としていた。

追跡してきた車が、直後停車するのが分かつた。運転席にいた長身の男が、アクセルを強く踏み込む。

背後に迫る車の明りが、遠く背後に退いて行く。支倉達の乗つた車から、やがてその光を確認し続ける事は不可能になつた。

座席から背後を振り返ると、車の背後の明りが、遠ざかる凹凸の地面に、水脈の如く光を引いている。——しばらくの間支倉に

は、それがかつてどこかで見た光景に思われてならなかった。車は、狂気の館へ向かっていた。

「これから、どこへ向かうのですか？」

布川は男に聞いた。

僅かに、嘔吐感があった。凹凸の地面に、車が激しく振動するためなのかもしれない。または先程、背後の道に落ちた光に見入っていたせいかもしれない、と思考を巡らせた。

支倉は再び振り返り、再度——一瞬、それを見た。

「機巧館東館だ。若屋鷹一郎は、四角館と言っている——そこだ。もう、着くだろう。」

男は言った。闇の中、前方の車窓に館は見えなかった。

「私達を狙ったのは？」

「……西館の奴らだ。」

布川は、またもや例の忍び笑いを漏らした。

男が、布川を見るのが分かった。傍らの統に、支倉の視線は向かった。

「まず——貴方達のお名前をお聞きしたいのですが。」

布川は、ニヤリと笑った。横の席に座った少年が、微かに男の方へ目をやるのが分かった。

男は短く、息を吐いた。気のせいかな、男の先程からの布川への態度に、どこか畏怖の念が感じられるようでもあった。

一瞬の沈黙を置いた後、男が答えた。

「——若屋幸弘。若屋鷹一郎の、長男だ。」

若屋幸弘。名前を聞いた事があった。若屋鷹一郎の、長男。目の前の人物と、これまでの支倉の持っていた印象との間に、差異があった。

「若屋家の方は、皆芸術家の方、という事でしたが……貴方は、何をされているのですか？」

「……彫刻家だ。」

布川は、運転している長身の男に目をやり、また、男——若屋幸弘の方へ目を戻した。幸弘に、長身の男の説明を促している事がわかった。

「若屋潤一郎だ。俺の甥……鷹一郎の、孫に当たる。」

幸弘は一度言葉を切ったが、その後すぐに、

「画家だ。」

と言った。布川の顔が数秒、運転席の男に向いていた。布川は顔を戻した後、不可解な微笑を浮かべた。

残りは少年のみ、という事になる。

幸弘が言った。

「俺の息子、和秀だ。潤一郎と同じ、鷹一郎の孫に当たる。……彫刻をやっている。」

幸弘は先程と同じく、一瞬の間を置いた後、芸術家としての分野を口にした。

支倉はその時、不意に想起した。

何時だったろう。恐らく、まだ小さな頃だった。地域の行事か何かで、家の近くの公民館に泊まる事になった。10月の中頃

## 1. 記憶

だつたらうか。

東の空は既に深く藍に刷かれていたが、真西の方角には、まだ僅かに落陽の朱色が滯っていた。建物の庭には、夜間に行われる行事のための大規模な照明設備があり、緑色の塗料の剥がれた巨大な照明が、庭を囲むようにして四方に聳えている。その時、既にそれは明りを放っており、支倉の周囲には4つの影ができていた。支倉はその時、庭の東側にいた。そのために西の照明から離れ、その方向からの光から出来る影が漠然としていた。全ての影が同様の濃さになる場所を探し、支倉は西に歩いた。しかし庭の中央を過ぎ、振り返っても、影が濃くなる様子はなかった。他の影が徐々に薄まっていくなか、支倉は西へと歩いた。

「多分、もう調べて分かっているとは思いますが——布川京太郎です。」

布川の声に、支倉は我に返った。相手の紹介に対して、それを返すつもりだったのだろう。支倉もすぐに、それに倣おうとした。

「……もう1人が、支倉俊之……だな。」

が、幸弘のその言葉の方が先だった。何らかの方法で、2人の事については、既に調べられていたのだから。相手は、即座に支倉の名を口にした。

「ええ。警視庁で、刑事をしています。」

「……警視庁？」

続けて職業としての役職を口にした支倉に、幸弘は、何故か奇妙な表情を見せた。そしてその後、ゆっくりと、

「ああ、そうか……。」

と言った。支倉はこの言葉が何故か、その言葉の意味以上に、深刻な意味を持つ言葉に思えた。支倉は布川を見た。微笑を浮かべている。その言葉に、何かがあったのだ。支倉は、そう確信した。

「今回は、館で事件が発生した、と聞きましたが。」

そこで布川は、幸弘に向かって言った。無論の事、先程から支倉の脳裏にも、同様の疑問があった。そもそも、2人がここに呼ばれたのは、館で発生した何らかの事件のため、という事だったのだ。

幸弘はこの時、即座に返答する事はしなかった。一瞬の沈黙を置いた後、ゆっくりと、口を開いた。

「——そうだな。」

車は大きく曲線を描く道に差しかかっていた。道の両側から突出した枝が、支倉の横の窓に当たった。その枝は一瞬にして、背後の闇へ遠ざかっていった。

幸弘は、一瞬の間を置き、言った。

「機巧館の東館で、ある人物が消失した。」

消失。——行方不明。支倉は脳裏で、2つの言葉を反芻した。

布川は、不可解な微笑を浮かべた。

「3階の部屋から、消えた。悲鳴が聞こえて全員で扉の前に駆けつけた時は、部屋になかった。」

「では、その人物のみが3階の部屋にいる状態で、他の人間は

## 1. 記憶

皆、下にいたのですね。」

そこで、布川が口を挟んだ。

「いや、そうではない——数人は、自分の部屋にいた。」

「部屋に、鍵は？」

「確かに、かかっていた。そのために、扉を破って、部屋に入った。」

鍵がかかっている。——密室。支倉はその言葉を連想した。

「消えた人間が確実にその部屋にいた、と断言できますか？」

「……ああ。扉の外で、話をした。」

そこで布川が突如、例の忍び笑いを漏らした。支倉は、それが何を意味するものであるのか、理解できなかつた。

「——何がおかしい？」

幸弘の低い声が、狭い車内に響いた。

布川が、言った。

「館のからくりで、消えたわけではありませんか？」

「からくり？」

幸弘は、鸚鵡返しに反問した。

「機巧館、という名前が付いてるのでから、からくりがあるのでしょうか？ からくりで部屋から消えた、という事はないのですか？」

運転席の男——潤一郎、と先程紹介された男が、微かに振り

返ったのが分かった。

幸弘は、苦笑した。

「からくりがありそうなのは、西の方だ。東には、少なくとも、

ない。」

そう、支倉もその事については知っていた。前述の通り、実際に何らかの仕掛けが予想されるのは、西館だ。東は、四角館という奇妙な名前で呼ばれる事が、特徴だろうか。

「——西館は、名前自体がからくりですからね。」

布川は、そう言った。名前自体がからくり。布川の口から発せられた言葉の意味を、支倉は理解しかねた。

「……よくわからないな。」

幸弘は布川を見、そう言った。

名前自体がからくり、と言えば、確かにそうだろう。機巧。からくり、という意味を指す。

「死体は？」

「見つかっていない。」

幸弘は続く布川の質問に対し、即座に返答した。

「死体を隠す事が可能であった人間は？」

「いないだろう。——まあ、出来るとすれば沼に放り込むくらいだろうが……それなら、死体がすぐに浮き上がるはずだ。」

「自分から消えた、という事はないのですか？」

そこで布川が言った。

「部屋の窓の下は、沼だったのでしょうか？ 身体に鎌をつけて沼に落ちれば、死体は浮きません。」

「——俺は、部屋の窓の下が沼だったとは、言っていない。」

直後、幸弘の声があった。

「何故、部屋の下が沼だと知っている？」

幸弘の声が、再び低く車内に響いた。

「——貴方はその部屋が3階だと言いましたが……3階の正面側には、六角塔があります。部屋が六角塔でないとするれば、その人物の消えた部屋は館の裏手、という事になるでしょう。館の裏は沼、でしたかね？」

布川は、言った。

「そう——それは実際、確証こそ持てないとしても、当然の判断であった。少し考えてみれば、誰にでも理解出来る事だ。それを質す幸弘が、その時にはかえって笑止であり、滑稽にも見えた。」

「——残念だが、それはない。」

沈黙の後、幸弘は言った。

「沼に落ちたとすれば、沼の水面に波紋があつたはずだ。水面に、波紋はなかった。」

「——そうですね。」

布川は、ニヤリと笑った。

そこで支倉は、事件が解決された後、東京へ戻る事を考えていた。無論、そのはずだった。事件が解決された後、自分達が機巧館に居続ける理由は、ない。

車は、先程とは反対の方向へ、大きく曲線を描く道にさしかかった。再び、車窓に当たった枝が跳ねたが、やはり次の瞬間には、背後の闇に消え去った。

「犯人が、その人物の部屋に駆けつけた人間の中にいる事は、確実でしょう。」

布川が言ったのは、その時だった。

一瞬、その場の全員が、言葉を失った。

「たつた今の幸弘の言葉により、布川の最初の段階での推測は否定されていたものと考えていた。」

幸弘が、最初に口を開いた。

「——本当か？」

「ええ、そうです。……ならば、西館の人間が犯人、とも言うのですか？」

布川は微笑を浮かべた。

「……犯人が東館の人間だと、言っているのか？」

「ええ、そうです。」

幸弘は再び、布川を見た。

「……何か、証拠があるのか？」

「いいえ——ありません。」

「その部屋にいた人間がどうやって消えたか、言ってもらおう。」

しかし布川はその言葉に対しても、不可解な微笑を浮かべるのみであった。

「まあ、ともかく、現時点で明確なのは、部屋から消えた人物が芦屋鷹一郎である、という事でしょう。」

「——何か？」

沈黙した車内に、布川の忍び笑いのみが聞こえていた。

消えたのは、鷹一郎。布川は今、その言葉を口にした。館の主は、既に消失していた、というのだろうか。

「……何故、知っている？」

幸弘の視線は、正面から、布川に向けられている。同時にそれ

は、布川の言葉の正当性——鷹一郎が既に顔に屈ない事実——を証明していた。

布川はニヤリと笑うと、言った。

「貴方は一度も、鷹一郎さんについての事を口にしていません。館の跡ね橋を渡った後、道が3つに分かれていました——右は東館、左は西館、という事ですね。中央は恐らく鷹一郎さんのアトリエに続く道だったのでしょう。」

鷹一郎さんに關する事情を口にしなかったのは、無論の事それが、貴方にとって愉快なものではなかったからでしょうね。鷹一郎さんは貴方達の東館に来て、消失してしまったのですから。」

幸弘は、沈黙した。

——狂気の、天才画家、だが、現在、その人物は存在しない。

狂気、という概念。

人間の中に狂気が存在するとすれば、それは何処にあるのだろうか。

痛み、という概念はどうだろう。

今支倉が自分の腕を傷つけ、痛みを認識したとする。しかしそこにあるのは傷口であり、物質粒子の動きであり、そこに痛みはない。脳の神経細胞にしても、そこにあるのは蛋白質であり、脂肪であり、あるいは無機物質であり、痛みはどこにも存在しないのだ。そしてどの蛋白質にも、無論の事痛みは皆無である。即ち、この物質世界に痛みは存在し得ないのだ。

このような論理は、あるいは言語上でのみ成立する論弁のよう

に思われるかもしれない。しかし、それを否定する論理は、皆無だ。

狂気、という事にしても同様だろうか。

少なくとも狂気は、人間の脳にもその神経にも存在するものではなく、蛋白質にもそれは存在せず、それは世界にはない。

「……鷹一郎はその日、初めて東館に来た。」

幸弘は、言った。

布川の口元に、不可解な微笑が浮かんだ。

「一緒に夕食を取った後、下にいる康達を残して、鷹一郎は自分の部屋に行った。その後、少し経ってから……鷹一郎の悲鳴が聞こえた。」

「館には、鷹一郎さんの部屋があったのですか？」

布川が聞いた。

「ああ……いつ鷹一郎が来てもいいように、用意してあった。」

館の主の、消失、機巧館で発生した、事件——支倉は、脳裏で反響した。

道の真側の樺木の枝が、風だろるか、光程から揺れている。自分が見えていない時にも、それは揺れているのだろうか。支倉はふと、疑問を抱いた。

空間に刷かれた漆黒の闇にしても、自分の見ている範囲にだけに留まり、見える範囲から離れば、その瞬間残りの全ては、無となり、何も残らないのではないか。

——流動の闇、そんな言葉が、ふと支倉の脳裏を過ぎった。

車はそこで、広い橋を渡った。長さは、およそ30mというところだろうか。下は、沼のようだった。

「もう、着きます。」

そこで、運転していた長身の男……芥屋彌一郎が言った。

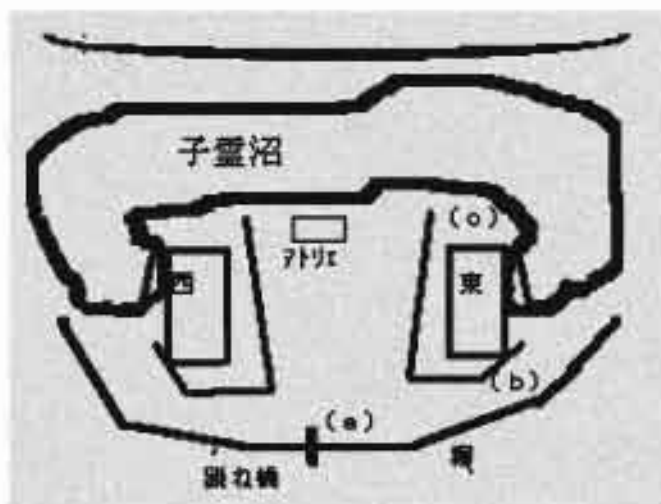
支倉は前方の車窓から、外の闇に目をやった。先程一度見えなくなっていた東館の六角塔は、再び目前に迫っていた。廻道を沼と広大な樹林とに囲まれたその館は、何者をも近付けなかった。

そう、そこには芥屋家の人間以外の生物の存在は、感じられなかったのだ。

そこで道が、館の敷地に入った後、最も大きく曲がった。すると次の瞬間、館の敷地全体を囲む塀ではない、東西の館が互いに建てたもう一つの塀が目前に現れた。車はその塀の裏側から回りこむように、館の正面に向かっていった。その塀と館の間を車は走り、やがて漆黒の闇の中に行き着く正面で、止まった。

幸弘達に続き、支倉は、市川と共に車を降りた。——外気は、車内とそれ程変わっていない。乗っていた車に暖房がかかっていた事には、支倉はその時初めて気付いた。

館の正面に突出した六角塔から、明りは漏れていなかった。支倉は、塀の上に目をやった。闇の中、車の前方のライトに照らされ、微かに光を放つものが見えた。——金属ではない。それは、ガラスだった。侵入者を防ぐため、塀の上に植え付けられた無数のガラス片が、そこにあった。機巧館を取り囲む樹林、よく見ると、枝に雪が残っている。確かに、闇の中の地面は、所々白く光って見えた。そこに、雪が積もっている事が分かった。



〔編者註〕右図は初稿にのみあったものであるが、読者の理解のため、特に掲載する。従って本文中に「(a)」と「(b)」への言及はない。

## 1. 記憶

支倉は、館の外壁に目をやった。その建設当時から数100年と経っていないはずの外壁には、既に無数の罅が走り、蔓状の植物がその部分を縫うようにして、茎を伸ばしていた。その蔓は、館の屋根と六角塔とに分かれて伸び、六角塔へ伸びていったものは、六角塔の上にある、六角錐の屋根にまで登っている。そして、その蔓と外壁との隙間にも、雪が僅かに残っているのが見えた。「こつちだ。」

気が付くと、幸弘が館の正面の扉を開けていた。支倉は布川と共に、石造りの段を上がり、扉の前に立った。

「入ってくれ。」

幸弘が言った。2人は開かれた扉から、その館に足を踏み入れた。

そこは、巨大なホールだった。

見ると扉のすぐ横に、銀髪を見事に撫で付けた1人の老人が立っていた。年齢は相当のものと窺えたが、姿勢は垂直に伸びている。布川邸の執事——法村の印象から、それが機巧館における執事というべき役柄の人物である事を、支倉は憶測した。

老人が2人に向かい、一礼した。

「ようこそ、四角館へ。」

四角館、という東館の別名は、鷹一郎独自のものだと考えていた。しかし老人の言葉から、芦屋家の人間の中でその言葉が、日常に使用されているものである事が、支倉には予想された。

機巧館。畸型の饗礼の行われる狂癡の城は、栄光の後光を浴び、闇の中に屹立していた。

## 2. 突風

流動の、闇。つい先程不意に脳裏に浮上したその言葉を、支倉は突如想起した。闇——自分が先程まで生活していた外界も、現在においては、既に存在していない可能性がある。

そう、支倉のマンションが現在、東京のあの場所に存在しているという保証は、実際には皆無だ。そのような問いなどは、度々思考を巡らせるまでもなく、実際にその前に立ち、それを見てみれば、その瞬間に証明が可能ではないか……そういう人間が、いるかもしれない。しかし、それは証明すべきものの証明にはなっていない。それは実際に見ている瞬間にそれが存在している事の証明であり、見ていない時にそれが存在している事の証明には、決してなり得ないのだ。一瞬、極めて不内容な詭弁のようにも感じられるそれは、実際には合理性を持っている。

全員が中に入ると、幸弘が背後の扉を閉めた。気が付くと、幸弘だけでなく、車を運転していた潤一郎、そして、先程車内にいた少年——幸弘の言っていた和秀の2人も、既にホールにいた。

「幸弘様、そのお傷は……。」

先程の老人が、幸弘の頬を見、言った。西館の人間達との戦闘の際、幸弘の頬にできた傷からの血は、まだ、止まらない様子だった。

「いや、大丈夫だ。」

「……後で、矢木様に見ていただきますよう。」

矢木、というのは誰だろう。支倉は思考を巡らせた。恐らく、医療の知識を心得た人間であろう、と支倉は想像した。

ホールの気温は、外気と比較して然程の変化はないようであつ

## 2. 突風

た。支倉は再び、コート襟を合わせた。

そこで老人が、幸弘から再び、2人に視線を戻した。

「私は、四角館の執事をしております、野上健一と申します。本館の使用人は私のみで、館のお食事のご用意や、館内の清掃なども、私がやっております。」

「今晚は。」

布川は、老人——執事の野上健一に、そう挨拶した。

やはり、支倉の想像した通り、老人は館の執事のような口調にしても、それは法村のものと瓜二つであった。執事とは

皆、このような口調なのであるうか。

しかし——それよりも、だ。支倉は目の前に立っている野上という執事の眼光に、異様なものを感じた。一瞬、幸弘達のものなどとは比較にならない程の強い光が、そこに存在しているかのようでもあった。

支倉はそこで、視線を正面に移した。恐らく玄関としての役割も兼ねているであろうホールの、巨大なシャンデリアの吊り下がった天井には、石造りの不気味な彫刻が隙間無く施されていた。そのシャンデリアの向かって奥に、やはり石造りらしい、1本の太い円柱が天井に向かいのびている。建築上必要なのかもしれなかったが、敢えて外観の方をより重視するのなら、少なくともそれは必要ではないように思われた。

「到着されたのね。」

声が出したのは、その時だった。

見ると、ホールの奥から左右に続いていくらしい廊下の左側から、中年の婦人が顔を出したところだった。

婦人はホールを横切り、支倉達の前まで歩み寄った。

「布川京太郎さんと、支倉俊之さんね。」

野上はその婦人に向かい、一礼した。支倉は一瞬、婦人が先程野上の言っていた矢木という人物である可能性を考えながら、野上の反応を見ると、どうやら若屋家の人間のようなうだった。

「私は、若屋雪乃。鷹一郎の長女ですよ。——父と同じ、画家をやっておりますの。」

やはり、そうであった。婦人——消失した鷹一郎の娘である雪乃は、まるで車中での会話を聞いていたかのように、布川が幸弘に促したそれに倣った挨拶をした。

「警視庁の、支倉です。」

支倉も、やはり先程と同様に言った。

「警視庁？」

雪乃は一瞬、奇妙な表情を見せた後、

「……ああ、警察ね。」

と言った。

雪乃の反応は、幸弘の車内で見せたものと、ほぼ一致するものであった。それはまるで館の人間が、警察という公的機関の存在を常識的なものとして認知していないかのようでもあった。しかし、確かに、そうなのかもしれない。そう……ここには公的機関も法律も全く存在せず、当然のその概念を一般社会と同様に認知する事はないのかもしれない。しかし支倉には、環境により

容易にその全てを変化させる存在としての可塑的な人間像を、理解こそしていても、容易に受容する行為は困難であった。

「あの……雪乃様は、まだご存じでいらつしやらなかつたので、ごさいますか？」

野上が、雪乃に言った。無論の事その問いは、警視庁が警察機関の1つである事を、という意味ではなく、支倉が警視庁の刑事である事を、という意味を指すものなのであろう。支倉はその事を、何故か強く意識した。

「……聞いていなかつたわね。」

雪乃は野上の言葉に対し、僅かに横を向き、言った。

野上はやはり、支倉の職業を知つていたようだった。確かに、警察関係者であるという理由から支倉をここに呼んだのであろう。館の人間達が、支倉の職業を知らない事は、不可解だ。恐らく、館に住む芦屋家の人間のいずれかに命令されたのだからだが、執事という役柄から考えても、警視庁幹部の市村秀二郎に電話なりをしたのは、野上というこの老人だったのだから。支倉は、思った。雪乃は返答に狼狽している様子の野上に続けて言葉を発する事はなく、再び2人に向け、言った。

「ともかく、ようこそ、機巧館へ。貴方達の到着を、待っていたわ。」

雪乃の言葉が終わつた時。

突如支倉の視界は、闇に閉ざされた。その中で、赤や青、緑といった無数の微細な点が、躍っている。その奥に蠢く、残像のごとく霧に似た影が、絶え間なくその形を変貌させていた。

布川邸でのかの感覚に、それは類似していた。以前にもそう感じたように、その感覚は、いつかの立ち眩みにも似ていた。——一瞬の、眩暈。

支倉は転倒しかけた姿勢を、慌てて元に戻した。しかしそれでも、眩暈にも似たその感覚は消えなかつた。

「そうかわ……お父様の事は、話したの？」

そこで雪乃は、2人から目をそらし、幸弘に向けて言った。

「ええ。」

幸弘は、言った。先程と口調が変わつていた。確か雪乃は、幸弘の姉に当たる人物だった。

「そう……じゃあ、昭人の事は？」

「いいえ、それはまだ。」

「話してあげた方が、いいのじゃなくって？」

「ええ、そうしましょう。」

雪乃の布川と支倉に対する口調と態度とが、まるで知人に対するもののような事を、支倉はその時意識した。その態度の中に、どこか幼稚な、それ故に滑稽な一部分があるようでもあった。

雪乃から2人に視線を戻し、幸弘の口調が変わつた。

「まだ、言っていないが……館で死んだのは、鷹一郎だけではない。俺の息子の、芦屋昭人が、この館で死んだ。」

「殺されたのですか？」

布川が、真つ先に聞いた。

「いいや——恐らく、事故だったのだから。」

幸弘は、即座に言った。

「準備部屋に、お連れしたら？一緒に、私も案内してあげればいいじゃない。私も、一緒に行くから。それと、野上さん、貴方も一緒に、来てくださるかしら？」

そこで、雪乃が言った。

「分かりました。」

野上は同様の姿勢のまま、返答した。

幸弘は、雪乃の言葉を聞くと、2人に向かっていた。

「こつちだ。——来てくれ。」

幸弘は先頭に立ち歩き出した後、不意に足を止め、振り返った。そこでその場所に立っている少年——和秀に声をかけた。

「和秀。」

和秀は、顔を上げた。

「何ですか？」

和秀が、幸弘の息子である事は、先程車内で聞いていた。幸弘は、言った。

「部屋で休んでいてくれ。」

溝一郎はその時、既に姿を消していた。ホールの左手の廊下に歩み去ったのを、支倉は見ていたようでもあった。

雪乃が姿を現した際、ホールの左手の廊下から出て来ていた事を、支倉は記憶していた。が、市川・幸弘・雪乃・野上に支倉を合わせた5人は、今度はホールの奥の右手の廊下に入った。その廊下に彫刻はなく、左右には倉庫として使用されている部屋が並んでいるようだった。

するとその時、廊下の奥に、野上と同年齢程に見える1人の老人が歩いて行くのが見えた。野上は、支倉達に気付かず立ち去ろうとする老人に向かい、声をかけた。

「矢木様、お2人がお見えになりました。」

老人は野上の声に振り返り、5人の姿を確認すると、こちらに向かつて歩いてきた。どうやらこの人物が、先程野上の言っていた矢木と言う人物のようだった。

「今晚は。」

市川は言った。

「ええ、今晚は。——市川さんと、支倉さんでしたね。」

支倉は老人に向かい、会釈するようにして頷いた。

「私は、船の医師をしている、矢木龍之介です。青屋屋一郎とは、昔からの付き合いでした。」

支倉の想像した通り、矢木という人物はやはり医者であったようだった。老人——医師である矢木龍之介は、幸弘と雪乃に向かい、それぞれ会釈した。

その時、支倉は矢木の首に巻かれた布……というより、スカーフのようなものだろうか。緑色に染色された布に気付いた。車直な表現を使用する程ではないにしても、似合っている、とは言い難かった。支倉は思わず、そこに視線を集中させてしまったのだろう。相手は、それに気付いたようだった。

「戦時中、ここに傷を負いました……それを、隠しているのです。」

理由は、頷ける内容だった。

矢木には別段、憤慨した様子はなかった。しかし無論の事、支倉は気掛かりだった。

「では、私はこれで。」

言うど、矢木はすぐに、廊下の奥に歩み去った。自分の態度が好ましくなかった事からなのかもしれない。過剰意識なのかもしれないなかったが、支倉はその時、そう意識した。

廊下を曲がった場所に、別の部屋とは多少異なる扉のついた部屋があった。

「——ここが、準備部屋だ。」

幸弘が、その扉を開けた。見ると中は、機械室のようになっていた。折り畳みのテーブルや、ライトなどが床に置かれていた。

野上が、説明した。

「この部屋に、鷹一郎様の描かれた絵画の発表の際のパーティー等に使用する、道具が置いてございます。昭人様は、ここでパーティーに使うライトの組立をされていました。最初は私がやっていたのですが、大変な仕事だから、自分がやる、と言われまして……私も、お任せしたので、ございます。パーティーに使用するライトの組立には力が要りますので、私も最近、なかなか出来なくなっております。昭人様はその時作業の休業期間に入っております。れましたし、氣遣って下さったのでしよう。」

「昭人とは？」

そこで、布川が聞いた。

その質問に対しては、野上に代わり、幸弘が返答した。

「俺の息子で、版画をやっていた。力が余るからと言って、あんな事をしなければ良かった。」

布川が幸弘を見、言った。

「もう、いないのですね。」

「ああ、そうだ。」

幸弘は、言った。

「あのライトは、購入してから大分経っていた事もあるのだろうが——元々、粗末に作られていた。コードが機材の曲がる部分から、はみ出ている部分があった。以前使った後、その部分が壁に掠った時、コードの表面を覆っているビニールが破れたのだろう。昭人は、その部分に触った。」

「感電死したのですね。」

布川の言葉は、あまりにも単刀直入だった。しかしその言葉は、次の瞬間幸弘は肯定した。

「……ああ、そうだ。」

幸弘は言った後、息を吐いた。

野上が、言った。

「昭人様は小さな頃から、心臓があまり良くございませんでしたので。——そのせいも、あった事と存じます。」

その時だった。

布川がまたもや、例の忍び笑いを漏らしたのだ。

幸弘の眼が、布川に向いた。

「——何がおかしい。」

幸弘の声に、布川が再び笑った。

## 2. 突風

「いえ、息子さんの名前は、昭人でしたね。」

「そうなら、何だ、というのだ。」

布川はいかにも笑止である、という様子だった。布川は言った。「字も同じなら、何とも滑稽でしょう？野上さんの口調にして、あの滑稽な対応に、そっくりではありませんか。」

布川の言葉に、一瞬、全員が沈黙した。

支倉にも、布川の言葉の真意は理解出来た。つい先程に聞いた、風習、という概念についての布川の見解を、支倉はその時想起した。確かにそれは、布川の口になかったそれにも、共通するものだろう。加えて野上の若屋家の人間に対する口調も、確かに布川の口になかったそれを窺わせた。法律で定められた差別に、あらゆる場面における対応は、明確に加担している。その実用性を維持する上で、その体系及び機構が急激な転換を見せる事は好ましくない、それ故に維持される存在でしかない。布川の口にしたその言葉を、支倉は同時に想起した。

幸弘にも、恐らく布川の言葉の真意が理解出来たのだろう。幸弘は、開こうとした口を閉じた。

その時だった。何故なのか、漠然としたその理由は定かではない。その時不意に支倉は、この部屋の準備部屋、という名称に違和感を感じた。準備、部屋、という言葉を含ませる事にも無論の事それは感じられたが、同時にこの部屋に対し、準備、という言葉に当てはめる事も、不自然に思えた。

準備。——支倉は突如、予定された悲劇、という言葉を連想した。昭人の死は、この後に発生していく事になる悲劇の、準備段

階としてのものであったのではないか。最初より悲劇は予想され、それ故にこの部屋の名称は敢えて、準備部屋でなければならなかったのではないか。——

準備、という、寧ろ不自然なようでもあるその言葉が、奇妙にそれに当てはまるようでならなかった。

「——館をご案内しますわ。」

雪乃の言葉と共に、全員が扉に向かった。

ホールから続く右の廊下の部屋には、倉庫に加え、野上・矢木の部屋があるとの事だった。5人は1度ホールに戻った後、ホールの四方に位置する部屋を案内された。ホールには、入り口と左右の廊下の他に、斜め四方に4つの扉があった。

正面から見て右上は、館の裏手に突出したテラスになっていた。そこから段を降りると、館の背後の樹林だった。館の背後は確かに子霊沼だったが、それは中央を境とした館の北半分であり、南側にまで続いている様子はなかった。

右下は食堂になり、左下はリビングルームだった。

「あの日、館の人間の殆どは、夕食の後、ここで休んでいた。」

幸弘は、言った。あの日、というのは、鷹一郎の消失した事件の夜を示すものであろう。

「……ここで、悲鳴を聞きつけて、俺が3階へ向かった。他の人間も、後に続いた。」

幸弘はそう言うと、部屋を出た。自分の通った道を、案内するようだった。

5人はその後、先程雪乃の姿を現したホールの左手の廊下に向かった。廊下はそこで、すぐに左に曲がった。廊下の曲がる回数が多い理由は、すぐに理解出来た。機巧館は、コの字型をしている。そのため、館の形にそって曲がる廊下も、コの字になっている、というわけだ。

「この廊下には作業部屋と、真秀様と真幸様のお部屋がございまして。今も恐らく、作業をされていると存じますが……作業中は声をかけるなど、言われておりますので。」

「真秀、真幸とは？」

布川がすかさず聞く。

「廣一郎様のご兄弟の芦屋廣二郎様の、ご三男と、五男の方でございませう。」

「残りは、西、というわけですか？」

「いいえ、次男の真康様は、2階におられます。」

ならば、残った長男、四男が西にいるのだろう。支倉は、憶測した。しかし、支倉は次の瞬間、自身の推測に明確な矛盾点を発見した。六男が存在する可能性があるのだ。

しかしここで同時に、芦屋廣二郎という人物が果たしてどこに在住しているのか、という疑問が発生する。それに加え、支倉は現時点において初めて、芦屋廣一郎の兄弟——名前から推測すれば、恐らく弟であろう——の存在を知った。しかし恐らく、やはり西館に在るのだろう。

5人が廊下を進むと、左右に分かれた階段があった。最初に

2、3段上がり、その後左右二手に分かれている形式のものだ。

無論の事、それは左右とも同様の位置に到着するはずだった。

「ここが、階段ホールでございます。」

野上が言った。

確かに、ホールという名称を与えられる程度の空間が、そこにはあった。階段ホールには赤い絨毯が敷き詰められ、段の一段一段にも、それは同様であった。

「ここから、2階に上がります。」

野上が言うのと、階段を示した。

見ると、階段が二手に分かれる部分の壁に、一枚の絵画が飾られている。下に、「11. 夢燕」という小さな札が出ていた。札は、蠟のような釘で打ち付けられている。

絵は、蠟のような怪物がはっているところを描いた物だった。

(図1参照) 口先は尖り、尾らしきものは大きく反り返り、全体的に角張った形状だった。やはり、版画なのだろうか。背景は漆黒に刷かれ、その上に赤や桃色、橙を中心とした色彩で魔獣は描かれていた。しかしやはり、最も多く使用されていると思われる色彩は、赤だった。——それも、鮮血に似た緋色であった。それが、何の道具を使用したのか、霧のように絵全体に散りばめられている。

「何ですか、これは？」

布川が、野上に聞いた。

「廣一郎様が描かれた、絵でございます。これは、版画ではなく、油絵なのですが——この絵は、こちらにある通り、



夢蒸と言うのでございます。これを含めて、この・夢・が描かれた絵画が、全部で18枚ございます。うち16枚は、まだアトリエにございまして、1枚は、見ている通りここにございまして。」

「では、残った1枚は西館にあるのですかね？」

布川のその言葉に対して野上は、果たして首を動かしたかどうかさえ輪ど判別が不可能な程、小さく頷き、「はい」と答えた。

「これを、蒸というのですか？」

「然様でございます。——ですが見ての通り、蒸というのは名前だけでございまして、実際には眞一郎様のおつくりになられたものでございます。」

「絵には、皆番号が付いているのですか？——これには、11とありますが。」

見ると、番号の明記されている札の文字は、腐んでいた。布川は、先程札に触れていたが、恐らく点字の要領で、文字を読みとっていたのだろう。

「はい、描かれた順に番号が付けられているようでございます。」

18枚目の湖蒸は、眞一郎様の絶筆となりました。」

「……K……R……」

そこで布川は、意味不明な言葉を突如つぶやいた。

「えっ？」

「いや、別に……」

布川は意味ありげな微笑を浮かべたものの、何も答えなかった。実際、それをK・Rと言っていたかどうかさえ、定かではない。支倉は一瞬、イニシャルを想像したが、該当する人物は、思

い当たらなかつた。

「では、行きましょう。」

野上が先頭となり、左の階段を上り始めた。ふと支倉は、右の階段と左の階段とを上つてみた場合、実際には2つともそれぞれ別の場所に到着するのでは、と考へた。しかし上にながらみると、やはり右の階段は同様の場所に続いており、その下には左の階段の上り口が見えた。

階段を上がつた2階の階段ホールも、1階とほぼ同様の造りになつていたが、絵画は掛かつていなくなつた。代わりに、大きな楕円形の鏡が置かれていた。金縁の、縦に細長い楕円形をして、いつも誰かしらが拭いているのか、黒ずんだ縁と比較して、鏡自体は相当新しく見えた。

正面に見える廊下が、突き当たりで右に曲がつている。そこに着くまでにも、4つの扉が確認出来た。

「手前の二部屋が、作業部屋でございます。奥の二部屋は、左が幸弘様の、右が雪乃様のお部屋となっております。」

野上が説明し、歩き出した。廊下を曲がると1階ならばホールがあつたが、2階は奥の曲がり角まで廊下が続いてた。しかし、あの太い円柱が位置している事は、同様であつた。やはり建築上、何らかの必然性があるのかもしれない。

廊下の左右にはやはり、部屋の扉が並んでいた。

「この廊下には、館の方々の普段生活されてお部屋もございませう。左手に幸利様のお部屋、奥が先程に申し上げた真康様のお部屋でございます。右手には、和秀様のお部屋、それと昭人様の

お部屋でございます。ここを曲がつた廊下には、右手には書庫、左手には作業部屋と、それと他の方々の自室がございます。」

真康という人物の事については、先程既に聞いていた。和秀の事についても聞いた事に加え、昭人については殊にそうであつた。しかし、幸利とは誰だろう。支倉は、それを野上に問うた。

「幸利様は、潤一郎様のご長男でございます。潤一郎様や雪乃様と同じく、絵画をしておられます。今年で確か、12歳になられました。――多分今も、作業をしておられると存じます。」

野上は言つた。

「――少々、いいでしょうか。」

そこで布川が、口を挟んだ。

「幸弘さんに、奥さんは？」

「信子だ。……銅版画家をしている。」

「それで、雪乃さんには？」主人は、いらつしやいますか？」

「ええ、和弘といいましたのよ。けれど、10年も前に、亡くなりました。」

「では、潤一郎さんの奥さんは？」

布川のその言葉は、唐突であつた。

その言葉に、幸弘も雪乃も、返答しようとはしなかつた。野上も、同様であつた。

「――潤一郎さん1人で幸利君が、という事はないでしょう。」

布川は、笑みを浮かべた。

潤一郎の、妻。幸弘も雪乃も、野上にしても、それを口にしようとはしない。支倉はその時点において無論の事、館の内部にあ

## 2. 突風

る複雑な人間関係、という言葉像を想像した。

同時に、その時支倉は、あの童謡を想起していた。「赤い実が一つ 赤い実が一つ……」無論の事、支倉の想起したのは、その部分だ。

男1人で、子供は産まれない。が、単細胞生物は単体増殖を可能とする場合がある。

高等な生物になる程に、男女の個体は重要視される。両者が存在しない場合、増殖はあり得ない。しかし、全ての生物は唯一増殖を目的としている。

そう……何故人間は、ここまで複雑な機構において増殖を実行しなければならなかったのか。

支倉はそこで、あの童謡が芦屋鷹一郎——消失した狂気の天才画家のつくったものである事実を、想起した。

布川の口から、また例の忍び笑いが漏れた。

「……まあ、いいでしょう。」

布川は、微笑を浮かべつつ、言った。

「それよりも、真康さんの部屋の手前に、扉がありませんね。あれは、どこの部屋に通じているのですか？」

布川は、返答のない一同を余所に、質問を別のものに変えた。

そう、確かに、真康という人間の部屋の扉の手前には扉があり、そのさらに手前にある扉との間の壁は、広がった。

「あそこは、鷹一郎の収集物の展示室だ。」

幸弘は、答えた。

「鷹一郎は、武器や甲冑などの品の収集を趣味としていた。多分鷹一郎は、それを一種の芸術品として収集していたのだろう。収集物はアトリエにもあるが……大半を、鷹一郎は館に預けていた。それが、ここにある。」

「是非、見てみたいですね。」

布川は、言った。

しかし支倉は無論の事、布川のその言葉に不可解を認識した。布川には、見えない。あるいは、その収集物の中で、形容し難い鬱陶気を感じる事を目的としたものなのかもしれない。

支倉は先程の、布川の射撃を想起した。恐らく偶然であろうあの2弾が、支倉の脳裏で巨大な疑問となり、そこにある位置を占めていた。

「……久しぶりに、見てみるか。」

支倉は、幸弘の声で顔を上げた。

幸弘は、先程の布川の質問から解放された安堵もあるのか、即座に言った。

「鍵は、かかっていたいなかったな。」

「はい、開けてございます。」

野上の言葉で、幸弘はその部屋の扉の取っ手に手をかけた。

幸弘に続き、全員が扉の前に向かった。

「……すこいですね。」

支倉は、思わずそう口にした。部屋の扉のある側の壁にその左右を加えた三方に、収集物があった。正面には窓があり、その壁に収集物は見えなかった。三方の壁には無数の武器や甲冑がかけ

られ、西洋の中世を思わせるその中には、何故か日本刀らしきものも見えた。

「金額にすると、どれくらいでしょうか？」

「さあ……分からないな。」

しかし見たところ、それは少なくとも億の単位に達するものであるように思われた。それだけ収集物の数は膨大であり、歴史的資料として、また芸術品としての高い価値が窺えた。

幸弘は、壁にかかっていた細長い剣を手に取り、眺め始めた。

紐状の鐔が曲線を描いてくねり、柄は短かった。

「1630年頃のヨーロッパの、レピアーですね。」

布川は、幸弘の手に取った剣を見て言った。

「よく知っているな。」

幸弘は、言った。

「レピアー？」

支倉は、レピアー、という言葉を聞いた事はなかった。

布川は、言った。

「中世の騎士や歩兵が戦闘に用いた武器は、皆比較的簡単な形状のものでした。ですが16世紀に剣の基本的図案が変更され、刃はより細長く、切っ先をより鋭利なものとする傾向が現れました。幸弘さんの持っているレピアーなどは、富裕な紳士や貴族達が不意の攻撃からの護身用としての目的からのみでなく、決闘という公式の争いに臨む目的で図案されたものです。レピアーを使用し戦う武術を、フェンシングと呼んでいました。技術がより洗練されていくに従い、鎧を着用しない民間人の手を守るため、剣

の鐔もより複雑化されました。刃の根本を覆う2つの輪状の鐔は、バ・ダーヌ、竜と呼ばれます。反対方向に湾曲したキヨン、即ち十字鐔と呼ばれるものが、あれです。見ての通り、鐔の基部は小枝状をしていますね。

こういった剣を作る剣職人では、当時はスペインのトレド、イタリアのミラノ、ドイツのゾーリンゲンの職人が最も腕が良く、彼らの剣の多くは芸術的にも高く評価されていますね。1650年代には、礼装用剣や決闘用剣として、レピアーに代わり、突き剣あるいは儀仗剣と呼ばれる短く単純な形状の鐔の剣が次第に使用されるようになりました。紳士達は実に1700年代まで突き剣を帯刀していましたが、この当時になると決闘には拳銃が使用されました。」

布川は幸弘の持っているレピアーの各部分を示しつつ、それを説明した。

「レピアーを使う剣術であるフェンシングは、主に17世紀初頭にフランスやイタリアで発展しました。最初のうちは、左手に敵の剣を払いのける用途の短剣を持ちましたが、17世紀の末にはフェンシングの教師も増え、短剣でなく、こちらの剣の刃で敵の剣を払うといった新しい技術が教えられましたね。練習風景を描いた絵画なども、残っています。」

幸弘は、剣を壁に戻した。その瞬間支倉の脳裏に、当然の疑問が浮上した。

何故布川は、幸弘の持った剣がそのレピアーである事を察知し、さらにはそれを指し示しつつ話す事が可能であったのか。

## 2. 突風

「空気の、振動です。」

そこで布川が、支倉に向かい、言った。

「えっ？」

しかし布川は、笑みを浮かべるのみであった。

空気の、振動。布川はそれを感じしている、というのだろう。確かに、盲人がそういつた情報を駆使して生活している、という事を耳にした事があつたようでもあつた。しかし、布川のようにそれが可能な人間が、存在するであろうか。そう——幸弘達は現在の時点において、未だに布川の盲目を気付いていない。

その後布川は、壁にかけられた収集物の前を往復し始めた。何度かそれを繰り返すうち、布川は壁にかけられた鉄の輪に興味を示したらしく、それを手に取った。

「これは戦輪……インドのチャクラムですね。」

布川は、その鉄の輪を見て言った。

「チャクラム？」

「ええ、インド北西部のシーク教徒が主に用いた武器、戦輪です。この輪は鋼鉄製で、外側の縁は研ぎすまされています。——シーク教徒は、円錐形のターバンの上にこれをつけました。チャクラムは、投げる際には人差し指で回転させる、または、親指と人差し指とで挟み、下方から投げました。」

布川は自ら言ったように、それを人差し指にかけ、ゆっくりと回転させ始めた。無論の事、それは最初には遅い回転だったが、

次第にそれは速度を増していき、最後には恐ろしい回転となった。そして少しずつその輪が、布川の人差し指の先端の方へと、上がっていくのが分かった。

指を離れる寸前にまで至った時に、幸弘が言った。

「悪い冗談はやめろ——すぐにだ。」

幸弘が言った時、既に戦輪は空中に飛躍する手前となっていた。

「……いえ、すみませんね。」

布川は、また例の忍び笑いを漏らすと、右手の人差し指で回している輪を、左手の指で止めた。

戦輪は静止し、布川の手に落ちた。

しかし次の瞬間、布川は信じ難い行動に出た。先程自ら説明した戦輪の投げ方の後者に倣い、親指と人差し指の間にチャクラムを挟み、下方から構え直したのだ。

「おい、何を——」

幸弘が言いかけた瞬間、布川の手からチャクラムが消えた。いや、正確には消えたのではない。恐ろしい速さで、上方に向けて投げられたのだ。その証拠に、先程下方にあつた布川の右手は、今はその顔の左にきている。その場の空気が一瞬にして静止した。

——戦輪は、反対側の壁に食い込んでいた。しかし、布川と壁との間に人間はいなかった。

その場にいる人間の全員が、無傷だった。

「——おい、お前何をする！」

一瞬の沈黙を隔てた後、幸弘が布川に向かい、叫んだ。壁から戦輪を引き抜き、それを元の位置にかけた。布川の投げた戦輪

は、そこに飾られていた突き剣の、柄の部分を探めるようにして、壁に食い込んでいた。何故かそれは、小さな突き剣だった。そう——それはちょうど、先程幸弘が手に取った剣、レピアーをそのまま縮小したような形状だった。ただし何故か、それに手を保護する鍔はなく、柄の上にそのまま刃が乗っているような形状だった。

切断したのだろうか、その切断面らしきものが、柄の横に確認出来た。

「すみませんね。」

布川は首を竦めるような姿勢で、微笑を浮かべた。

幸弘は、短く息を吐いた。

その時支倉は一瞬、この部屋がある博物館の一室であるかのような錯覚を起こした。瞬間、不意に支倉は、突如背後から影が差したように思った。

それがどのような姿をしたものであるのかは、支倉には定かではなかった。しかしそれはたつた今、地上に降臨の影を落としたに違いないのだ。

背後に忍び寄る、何か。支倉の目前に、4人の人間がいる。全員が、密かに自分を欺いているのではないか。背後に迫った魔獣の存在を口にしらないのは、そのためではないか。——

「3階を、ご案内致しますよう。」

野上が、言った。

「そうね。それがいいわね。」

雪乃は言い、扉の外に歩き始めた。

支倉は次の瞬間、背後を振り返った。

しかし無論の事、そこには何も無い。やはり、気のせいであったのかも知れない。

影。その存在を、支倉は強く意識した。部屋の天井にある電灯に照らし出された多くの収集物が、それらの飾られた壁に黒い影を落としている。

——その時だった。何かが、床に落下する音があった。

全員が、背後を振り返った。

先程幸弘が壁に戻したレピアーが、床に落ちていた。……そのレピアーは、柄と刃との境目の部分で、明確に切断されていた。

支倉は、息を呑んだ。

布川の投げた戦輪が、大きく右に逸れた後、再び真っ直ぐに飛躍したその事実を、支倉は認識こそしていたものの、それを事実として受容しようとしていなかった。右にそれた場所——そこには、確かにレピアーがあった。

布川の投げた戦輪により、それは切断されていた。

「……行こう。」

幸弘は落ちたレピアーを処理しようとせず、部屋を出た。

支倉は、急いで後についた。

その後幸弘が先頭となり、再度先程の階段ホールに向かい、5人は3階へ向かった。

3階の階段ホールには、1階と同様に、1枚の絵画が飾られている。それは金色の額縁に入った、油絵だった。そこには、1人

の老人が描かれている。

「これは、雪乃様の描いた、鷹一郎様の肖像画でございます。」

野上が絵を指し、それを説明した。確かにそれは、どこかで見た事のある芦屋鷹一郎の写真と、どこか似ているようでもあった。雪乃が描いた、というその絵画の描写は、抽象芸術を専門とする芦屋鷹一郎の娘とは思えない程に、ごく写実的なものであった。無数に刻まれた細い皺、鋭利な眼光を放つ剃刀のごとき眸、溢れるように伸びる、細い銀髪——それは正しく、芦屋鷹一郎であった。しかし何故か支倉にはそこに、どこか「不完全」である一部分を見たかのようにもあった。

——不完全。

形容し難い違和感の根底にある要因を、支倉はその時見極める事が不可能であった。

階段ホールを出、廊下に向かう中途、野上が説明した。

「3階には、客室が2部屋、ご用意されております。布川様と支倉様はそれぞれ、1つずつをお使いくださいます。バスルームとトイレはお部屋の外にもございますが、それぞれの部屋にも、洋式のものをご用意しております。」

少なくとも野上のその言葉は、2人の数日間の宿泊を想定したものである。支倉は瞬間的にそう考えた後、その事を強く意識した。

野上はそこで立ち止まり、言った。

「館の3階は、3つの塔と六角塔の、4つの塔からなっております。」

す。」

野上に続き、そこで全員が立ち止まった。そこで支倉は、天井に目をやった。やはりそこには、不気味な彫刻が施されている。

天井を見上げる支倉に気付いたのか、野上が言った。

「館の天井の彫刻は、幸弘様と真幸様のお彫りになられたもので、どうやら北欧神話を原型にされていたようでございます。」

真幸とは、先程に聞いた。芦屋鷹二郎の、五男だ。恐らく、幸弘と同様に、彫刻をやっているのだろう。支倉は、そんな思考を巡らせた。

支倉は、あらためて、天井を見た。するとちようど、1頭の馬が目に入った。凝視するうち、支倉はその馬が、8本の足を持っている事実に気付いた。馬上にはつばの広い帽子を被り、長い槍を持った男がいる。

「これは、オーディンと、スレイプニルでございます。」

野上が、言った。

「オーディン？」

支倉は、その名前を聞いた事があった。恐らく、北欧神話に登場する神の1人なのだろう。しかしそれよりも、8本足の、馬。どこでその知識を得たのか正確に記憶していなかったが、支倉はシベリア神話で、羚羊がかつて6本足であるとされていた事実を想起した。

その時、支倉は気付いた。布川が先程から、その8本足の馬——スレイプニルを、まるでそれと睨み合うかのように、見上げているのだ。天井は、然程高くない。布川は直後、馬の頭の辺り

に、手を翳した。

——一瞬、反応はないかに思われた。しかしその直後、布川の口元に微笑が浮かんだ。そしてゆっくりと、例の忍び笑いが漏れ始めた。その時またも支倉は、布川の深い鬚りの底にある何か、微かに蠢いた瞬間を垣間見たようでもあった。

塔と塔の繋ぎ目、と言っても、それは廊下が僅かに曲がった程度にしか感じられなかった。その部分を通過すると、そこは館の3階を構成する六角塔を除いた3つの塔のうち、2つ目の塔であった。廊下の奥には3つ目の塔への入り口が確認出来、その右手前には、六角塔へ続くものらしい狭い廊下が見えた。左の部屋に、扉は見えない。

それが幸弘の言っていた、鷹一郎の部屋であろう。支倉は、憶測した。

「右手の廊下は、館の正面の六角塔へ続いております。そこに鷹一郎様のお嬢様の風乃様と、そのご長男の俊秀様がおられます。」

「一体いつも、そこで何をしていますのですか?」

野上は一瞬、続く言葉を留まった様子であった。野上は、幸弘を見た。

幸弘が頷く事が確認出来ると、やがて口を開いた。

「実は風乃様は、ある特殊な宗教を信仰しておられます——1日の殆どは、塔の礼拝室で礼拝をされております。俊秀様は、普段は館のお外などで、遊んでおられます。」

「つまり特殊な宗教、というのは、風乃さんの自作宗教ですね。」

「……そうだ。」

その質問には、幸弘が返答した。

「それで風乃さんは一体、どのくらいの年齢になるのですか? 芸術家としてのお仕事は、なさらないようですが。」

「今年で、ちょうど32歳になります。」

「俊秀君は? まだ子供ですね。」

「5歳になられて、まだ2ヶ月でございます。それと俊秀様は、犬を飼われておいでです。」

「犬?」

そこで、支倉は聞いた。

「はい。ゴールデン・レトリバーでございます。」

「犬は、いつもどこにいますのですか?」

「夜などは風乃様達と一緒に、六角塔にいますが、俊秀様がお外へ出られる時などは、一緒に連れて行かれます。」

「遊び相手、というわけですね。」

布川はニヤリと笑った。

「遊び相手はこんな場所では、犬以外にいませんからね。」

布川は、言った。背後に立つ雪乃の表情が微かに動いた瞬間を、支倉は見た。

布川は笑みを浮かべると、言った。

「ところで、雪乃さんに旦那さんは?」

「浩一、という方がおられましたけど……つい昨年に、ご病気でお亡くなりになりました。」

「それで、鷹一郎さんの事件の時、やはり風乃さんは、六角塔に

## 2. 突風

いたのですね?」

「ええ、そうですが。」

幸弘が車内で言っていた、その夜食事の後、部屋に集まっていた人間が全員ではない、という言葉は、この事を指していたものらしい。風乃。確か鷹一郎の、四女だったろうか。

「六角塔の目目が、鷹一郎さんの部屋ですね。」

布川が、言った。

布川が示している事柄は、明確であった。

ニヤリと笑うと、言った。

「鷹一郎さんの部屋を、見せて頂きましょう。事件の説明を、お願い致します。」

先程廊下の左に確認出来ていた扉のない部屋は、支倉の先程憶測した通り、やはり鷹一郎の部屋であったようだった。確かに幸弘が打ち破ったと言っていた部屋の扉は、内側に倒れていた。幸弘が部屋に突入する際、それを壊したのだ。

まだ、修理をする事はしていないようだった。

「その時幸弘さんは、1階の部屋から1人で走ってきた。そうですわね?」

「後ろから、私達も来たわ。」

雪乃が、言った。

「幸弘さんをのぞくと、誰が先頭でした?」

「そうね……。」

雪乃は少し間を置いた後、

「潤一郎かしら。」

と答えた。

「貴女はその時、どの位置に?」

「潤一郎から、あまり離れていなかったと思うけれど。」

「では、聞きましょう。貴女達が上がった時、幸弘さんは何をしていましたか?」

「必死に、扉を壊そうとしていたわね。」

「では、幸弘さん。やった事を順に、話してみてください。」

布川は、言った。

幸弘は少し間をおいて、話し始めた。

「……階段を上がってきてここに来ると、部屋の中から鷹一郎の声が聞こえた。それから会話があったが——鷹一郎の声は、途中で聞こえなくなつた。鍵は、内側からかけられていた。扉を壊そうと思ひ、体当たりしたが、簡単には壊れなかつた。……3、4回程当たつて、やっと扉の3つある蝶番のうち、一番下のものはずれた。だから、扉を今度は足で蹴つた。けれど、そうしても、動かない……この辺で、後ろから他の人間がやって来たと思ふ……それで、もう一度体当たりした。すると、今度は上の蝶番が飛んだ。思い切つてその扉を両手で力一杯に、叩いた。そうしたら、最後に扉の中程にある蝶番が捻れるように潰れてから、蝶番ごととはじけとんだ。——扉を部屋の中に押し倒して、中に踏み込んだ。」

「そこまで、だいたいどのくらいの時間がありましたか?」  
「……30秒くらいだったろう。」

「そうですね。」

布川はまるで、その際の幸弘の動きを演じるかのように、部屋に踏み込んで見せた。

「しかし、鷹一郎さんの姿は見えなかった。……そうですね？」

「ああ。」

「それで、後の人達が部屋に入ってきたのは？」

「直後だ。」

支倉は、部屋の中に入ってきた。この部屋にくると、廊下の天井にまで施されていた彫刻は、何故かなかった。部屋は疑いなく、絵画や版画に使用する道具の一式が、配置された棚の中に揃っている。棚の近くにも背の高い棚があり、ガラスのはめられた扉から、中にその類のものを確認する事が出来た。

——ここで、警備員一郎は、消えた。

支倉は部屋の入り口から身を乗り出すように、部屋の奥にある窓へ目をやった。

支倉は、窓の外に目をやった。窓の真下には、ちょうど先程に行った、鷹一郎のコレクション展示室の窓が位置しているようだった。しかしそこに向かい飛び降りるなどという事は、恐らく以ての外だろう。

そこで支倉は自分が、鷹一郎が自身の判断により能動的に消失したとする前提の上で推測を進行させていた事実に、突如気付いた。

「その日にはもしかすると、雪が降っていませんでしたか？」

布川が言ったのは、その時だった。

「——何故知っている？」

幸弘の言葉が続いて、響いた。

一瞬の沈黙が、空間を包摂した。それは少なくとも、布川の言葉を肯定するものであった。

布川は、ニヤリと笑った。

「雪はテロに似合う——多くの人間が、そう言っています。赤穂義士事件、坂田門外の変、2・28事件——皆、雪の降る日の事です。今回の事件も、雪の降る夜のことでしたね？」

「——これがある種のテロである、と言いたいのか？」

幸弘の言葉に、布川は、頷いた。

「ええ、そういう事です。これは犯人の起こした、テロです。この後発生するであろう惨劇は、ある目的を基点に実行されるはずです。」

「惨劇？」

この時、周囲の人間の注意は、布川の口にした。目的、という言葉にはなく、惨劇、という言葉の方へ向いたものらしかった。しかし、支倉の脳裏にその時点においてとまったのは、目的、というその方であった。——

「惨劇って、どういう事かしら？」

雪乃が言った。

「この館で引き起こされる殺人が、2つに留まらないであろう、という事です。いわゆる連続殺人——という事です。」

布川は微笑を浮かべた。

「第一、鷹一郎さんは突然、消えてなどいません。鷹一郎さんは

## 2. 突風

事実現在にも、この館で彷徨を続けています。」

館を彷徨する、鷹一郎。不気味な彫刻の施された天井の下の暗い廊下を歩いていく、影。――

支倉は、その映像を想像した。

「……何だと？」

「お話しした通りです。」

布川は、笑みを浮かべた。

その時だった。支倉は、窓の外にある闇が、徐々にその色を薄めている事に気付いた。闇に包まれた方向の空から視線を移動させて行くと、それは藍から群青へ、さらに深い青へと、それは染め付けられている。

闇は確実に、その色を薄めていた。

そこで野上が一步背後に下がると、言った。

「後僅かで、館の方々が食堂にお集まりになられまして、朝食を頂かれます。私は皆様のご朝食の準備をしなければなりませんので、申し訳ありませんが、失礼致します。」

野上はそう言うと、廊下を立ち去った。

立ち尽くした4人を、一瞬の静寂が包んだ。その静寂が支倉には一瞬、永遠に続くものであるかのように思われた。

「――私達も、そろそろ下へ行ったらどうかしら。もう、これで案内も済んだでしょう。」

突如静寂を貫いた雪乃の声が、その空間に、一層大きく聞こえた。その言葉で、幸弘は2人に目をやった。

幸弘は、言った。

「階段ホールからすぐの廊下に、2つ扉があっただろう。そこが、客室だ。今日はそこを、使ってくれ。――そうしたら、食堂に顔を出してくればいい。場所は、分かるだろう。」

幸弘の言ったように、階段ホールを出たところにある2つの扉は、それぞれ客室へ続いていた。

部屋には野上の言ったように、それぞれにバスルームとトイレがついており、それを含めて部屋は15畳程にはなるだろうと支倉は推測した。部屋にはベッドと机、それに加えて椅子以外に、布川邸にあったそれを想起させるような、赤いソファアが置かれていた。

数分休憩をとった後、支倉は布川と共に1階に降り、正面ホールの右下隅に位置する食堂へ足を運ぶ事となった。が、食堂にはその時点において、まだ誰も来ている様子はなかった。食堂はその奥に厨房がつくられており、そこに野上の姿があった。

館にガスはない、という話は、実際に事実であったようだった。ストーヴなどは見当たらず、代わりに壁に暖炉が埋め込まれ、くべられた薪の奥に、炎が見えた。確かに外から見た際、屹立する館の外壁の随所に、煙突らしきものが確認出来ていた。

野上は2人に気付くと、暖炉の近くに椅子をすすめ、2人をそこに座らせた。

厨房の奥には窓があった。窓は館の正面を向いており、大分離

れた場所に、西館に向けて建てられた壁が見えた。

支倉はそこで、先程の鷹一郎の部屋における、布川の言葉を想起した。この後発生していくであろう惨劇の基点となる目的。

——惨劇。

加えて幸弘の長男であった、芦屋昭人の事件。布川は連続殺人、という言葉の口にしていた。あれはもしかすると、昭人のライトによる感電死も、実際には他殺である事を示したものでなかったのか。もしかするとそれは、この後相次いで発生するであろう阿鼻叫喚の惨劇を意味する言葉であったのかも知れない。

殺人を目的とする、機巧。その言葉が、支倉の脳裏を再び過ぎった。鷹一郎は自ら、その機巧により姿を消したのではないか。

気が付くと椅子に座った布川は、野上と会話を交わしていた。

「いつもここで、お料理をなさるのですか？」

「はい、いつもここで、させて頂いております。」

厨房は食堂の3分の1程の面積となっており、そこに暖炉と窓とがあった。

支倉は布川と野上との会話に、耳を傾けた。

「いつからこの館で、執事をおやりになつて居るのですか？」

「この館が建設されてから、ずっとでございます。」

野上は言った。

「外に出た事は、あるのですか？」

「いえ、館の敷地から外に出た事は、1度もございません。」

野上は言った。

館が出来てから、既に10数年が経っている。その間、この老人はずっと、この敷地から出ていない、という。

もしかすると自分も2度と、ここから出る事が出来ないのではないか。この狂気の館の外に、2度と足を踏み出すことが不可能なのではないか——そんな際限のない不安が、ふと支倉の脳裏を掠めた。

「鷹一郎さんはいわゆる人嫌いだった、と聞きましたが。」

そこで再び、布川が聞いた。

野上は少し間を置いた後、口を開いた。

「はい。……この館が建てられる以前からそういう方でした。人と並ばれているところは、私も殆ど見た事はありません。私となどは殊に、以ての外でございます。」

以ての外——どういう意味だろう。自分のようなものと鷹一郎と一緒に並んだりしないという、単純にそういった事を指す意味なのか。しかだすとすれば、それは不可解であった。不可解——そこにおける不可解の要因がどこにあるのかは、定かでない。しかしそこに存在する不可解の認識は、明確にあった。

あの鷹一郎の肖像面を見た時と類似した違和感に、支倉は突如陥った。

「野上さんは、鷹一郎さんとはどのようにお知り合つたのですか？」

そこで布川が言った。

「戦友でした。」

野上は言った。——戦友。

## 2. 突風

支倉は鷹一郎の年齢を、徳測した。確かに、かつて敵兵の対象となつていても、奇妙ではないだろう。

「鷹一郎様は通信兵として、軍隊に所属しておられました。私と同じ部隊で、南方に行つていたのでございませう。」

矢木様も後に聞きましたところ、同じ島にいた別の部隊に所属していたのだそうでございまして……鷹一郎様とはその頃から、お知り合つていたようでございます。」

支倉は思い出した。矢木の首の、傷。恐らく、南方での戦闘の際のものであつたのだろう。

「鷹一郎さんは、おいくつだったのですか？」

そこで布川が、再び口を挟んだ。

それは明確な過去形を使用した言葉だつた。そう——鷹一郎の消失がイコールで繋がれた死に通ずる事は、明確であつた。

野上はそれを答える間にも、厨房内で仕事をしていた。食器棚を開き、数枚の皿を取り出した後、再び2人の前の位置に戻つた。

「いいえ、戦前、というのとは分かつているのですが、正確には、私も……ですが大体、77、8というところだと存じます。」

「まあ、年代から考えてそのくらいいでしょね。——実際の年齢は、貴方も知らないのですか？」

「はい。」

「……まあ、それはともかく、野上さん、貴方は一体、おいくつなのですか？」

「……76です。」

野上は一瞬の間を置いた後、布川の質問に答えた。そこに一瞬

配置された間に、野上は答を想起していたのかもしれない。それも、無理はないだろう。芦屋家の人間の誕生日などならば、それは祝うだろうが、恐らく野上の誕生日など、誰一人憶えていない。自分でも、数えてみなければ、想起する事が不可能であるのかもしれない。

布川は野上を見、ニヤリと笑うと、言つた。

「まあ、それはいいのです。——私が最も貴方に聞きたかつたのは、鷹一郎さんがどのような風貌であつたのか、という事なので……聞かせて頂けませんでしょうか？」

鷹一郎の風貌。何故布川がそのような質問をしたのか、支倉は疑問を持つた。先程あの肖像画を、布川は見ていたのだ。そのような事は、聞くまでもないように思われた。

しかし直後支倉は、自分の巡らせた思考の滑稽さに気付いた。布川は、盲目であつた。

野上はその後、布川の質問に答えた。

が、答えたものの、その内容はどこか曖昧だつた。正確に挙げた特徴についても、普通では気にとめないような奇妙な部分のみを、誇張して表現しているようだつた。明確な表現を用いれば、それは如何にも不自然であつた。どうしてなのだろう。加えて、その説明は必要以上に長く続くように思われた。布川が返答しないのを見ると、野上は中途口を嚙んだ。布川は笑みを浮かべ黙つており、一瞬野上と睨み合う格好になつたが、布川が手洗いに立ち、それは中断された。

その間沈黙を続けていた支倉が、野上と会話を交わした。支倉

は館の事について2つ3つ聞くと、後は自分達に向かい銃を向け、西館の人間の事についての事を聞いた。会話、と言つても、それは支倉の質問に野上が答えるのみであった。

西館の事について館の他の人間には、極力その事に触れる話題を避ける傾向が窺えたが、野上には特にそういった意識はないようだった。

「西館には、鷹一郎様の次女の月乃様、三女の花乃様、次男の弘康様の3人と、鷹二郎様の長男の真弘様と、四男の真俊様が住んでおられます。それと、鷹二郎様の奥様の、時枝様がおられます。」

「何故、館に私達が来る事になったのですか？」

支倉は最も気掛かりである、その事を質問した。しかし野上は、その事については知らない様子であった。

「その事については、私には……幸弘様達が、お決めになられた事ですので。私は、それを連絡したのみです。」

「貴方が、連絡したのですか？」

「執事ですから。」

この点は、最初支倉が巡らせた思考の通りだった。

「西館の人間達は、何故私達を？」

「——ご存じであると思いますが、東館と西館とは、鷹一郎様の事を巡って、10数年も前から対立しているのでございます。」

しかしその言葉は無論の事、支倉の知ろうとしていた事実の手掛かりになるものではなかった。加えて野上の言葉には、やはり何かを隠している様子があつた。

この狂気の居城に、知られざる秘密が隠されている予感が、支倉にはあつた。

やがて、食堂に、館の人間達が集まった。円形のテーブルの周囲に並べられた椅子の内、最も奥に置かれた椅子の隣の椅子に、幸弘が座っていた。最も奥に位置する椅子は、恐らく、鷹一郎の椅子であつたのだろう。消失した晩の1回しか、そこには座っていないかつたようだった。

テーブルに並べられた朝食は、パンとトマトのスープと、サラダだった。それはあるいは平凡な献立であつたのかもしれないが、野上が運んできたそれを見て、持ってきたものを見て、支倉はそれが「機巧館らしい」ものであるかのように感じた。運ばれてきたその内容と比較して、野上の調理にかけた時間は思いの外長かつた、と一瞬支倉は思考を巡らせた。しかし、直後その理由は憶測出来た。

食卓に揃つた若屋家の人間の数は、15人前後というところだ。野上がたつた1人でその全員分の料理を用意する事に時間を要する事は、容易に推測出来た。

布川と支倉は、野上と矢木の近くの席に座らされた。

「食事の前に、来客を紹介しよう。」

全員が席に着いたところで、幸弘が言った。

「布川氏と、支倉氏だ。」

食卓を囲む全員の視線が、2人に集中した。その中に車内で一

## 2. 突風

緒だった、潤一郎と和秀が見えた。

「お空から、来たんだね。」

食堂の入り口に近い方の席から声がした。声の主は、子供だった。子供は、少し高めに作られた椅子に座っている。——支倉はそれを見、恵子や真知子がまだ小さな頃、レストランに行く度に座っていたそれを、想起した。

子供の姿は、まるで椅子の上に、大きな人形でも座っているかのようにだった。見ると近くに、食事中であるにも拘わらず、一頭の犬が伏せている。ゴールデン・レトリバーだろうか。あれが風乃の息子である、俊秀、という子供の飼っているといった犬なのかもしれない。支倉は、そんな思考を巡らせた。

「そうよ、俊秀。お空から、来てくれたの。」

直後の雪乃の言葉で、支倉はその子供が芦屋俊秀であった事に気付いた。

そこで支倉は、その子供——俊秀の口にした言葉に、思考を移した。お空から来た、というのは、どういう意味なのだろう。野上は先程、5歳になる、と言っていた。少なくとも、アニメイズムや実念論、といった年齢ではない。しかし、そこで支倉は気付いた。俊秀は、外部の何の環境とも接していないのだ。この異様な環境の中に於いて、通常の発達とは異なる発展段階が存在するのかもしれない。そんな思考を巡らせた。若しくは子供であるために、そういった事を教えられているのかもしれない。

風乃の作った自作宗教を信じているのか。支倉は突如、そんな思考を巡らせた。宗教——その時支倉は、自分がその言葉から直

接、創造神話的なものを想像していた事に気付いた。

ともかくも支倉は雪乃と同様に、俊秀の言葉に従う事を判断した。

「そう。空から、降りてきたんだ。」

支倉は俊秀を見、言った。

「じゃあ、きつとすぐに見つかるねえ。」

俊秀は支倉の言葉に、微笑んだ。「見つかる」ものの主語とは、鷹一郎だろう。支倉は思考を巡らせた。恐らく、鷹一郎は消えたのではなく、どこかに隠れているとか、そのような調子で俊秀は聞かされていたのだろう。

「2人はこの後数日、館に滞在する事になる……2人に向けて、1人ずつ挨拶を願いたい。」

そこで幸弘が、言った。

「それじゃあ……信子から頼もう。」

幸弘は最初に、自分と向かい合った席に座った中年の女に目を向けた。信子。確か2階のコレクション展示室の前の廊下で、幸弘の妻、と聞いた。

女は口を開いた。

「幸弘の妻の信子です。——銅版画をやっています。」

高いが、それは抑揚のある声だった。

幸弘の言った挨拶、というのは、いわゆる自己紹介を指していたものようだった。やはり、女——芦屋信子も、車内でのものに做った自己紹介をしていた。背中の中分程まで伸びた髪を、植物業の細い紐でくくっている。

しかし、1人1人に眼を向けている程の余裕はなかった。続いて、横に座っている小さな少女が、顔を軽く2人の方へ向け、口を開いた。

「美子です。幸弘の娘で、オルガニストを、目指しています。」

……貴方は本当に、空から来たんですか？」

少女——芦屋美子は、支倉と布川を順に見、俊秀と同じ事を言った。

「え、ええ。そう、空から。」

支倉は、そう答えるしかなかった。少女は、何とも形容し難い——それはどこかに何かしらの疑問を持っているかのような——笑みを浮かべた後、俯いた。

この少女も、俊秀と同じだった。実際に、自分達が空から来た事を信じているのだろうか。

しかし、それが特に気に止めるような事でないと思考を巡らせるまでに、時間を要する事はなかった。俊秀にしても美子にしても、それは機巧館の住人であると同時に、鷹一郎の孫達である、芦屋家の人間なのだ。

そこに如何に異様な習慣があったとして、異様な何があったとして、それはここにおいて異様な事柄ではない。1+1+1+2である事にしても、それは同様だ。全ての人間が1+1+1+3と言えば、1+1+1はその瞬間から3であり、それは十分な合理性を持つ存在であると定義される。布川が館へ向かう車内において、話していた事柄だ。それはこの場所において、異様な事象とは定義されない。

その時突如支倉の中に、奇妙な滑稽さが込み上げてきた。そうなのだ。その異様さを如何に説明しようとしても、それはさらなる外界から見た場合、それでも滑稽な事象に他ならない。

美子の横には、先程幸弘達と一緒に車に乗っていた少年、和秀がいた。

「幸弘の息子の、和秀です。先程父にも聞いたとは思いますが……父と同じ、彫刻をやっています。」

和秀はそれだけ言うと、窓の外に眼をやり、何かを探しているかのように、頻りにそちらを眼で追い始めた。何を見ているのだろうか。が、窓の外に、殊に目立つ物は何も見えない。和秀は窓から視線を元に戻すと、指先に触れた。他人の些細な行動が、まるで活字に表されるかの如く、支倉の脳裏に流入した。

——次の椅子は、空いていた。恐らく以前には、例の昭人が座っていた席だろう。それはやはり、鷹一郎の部屋の扉と同様に、片付けられずに放置されていた。その席を挟んだ次の席に、髪の下々に白髪の混じった、50代の前半というところだろうか、1人の男が座っている。その身体全体から何とも形容し難い、通常のものとは異なる風格が感じられた。

「芦屋鷹二郎の次男、真康です。音楽家をしています。」

男——芦屋真康が、言った。東館にいる鷹二郎の息子達の中で、唯一2階に部屋を持っている。先程館内を案内された際無意識に脳裏につくられていた記憶を、支倉は想起した。恐らくここに集まっている館の人間の中で、雪乃と並ぶ程の年齢だろうか。

## 2. 突風

長身で、鋭利な眼光と長く張った背筋は、どこか豹を思わせた。その横に、真康より2つ3つ程年下だろうか、またはや中年の婦人がいる。

「真康の妻の、秀美です。パイオリンを、弾いています。」

その口調は、雪乃に似ていなくてもなかつたが、どこか異なっていた。この婦人——芦屋秀美の風貌は、雄の豹を連想させる主人の真康に対し、銀色の毛を持つ雌の狼を思わせた。髪に混じる白は真康よりも多いように見えたが、それが支倉には奇妙に思えた。

秀美の横には、季節はずれのマリンスプルのワンピースを着た、若い女が座っている。大体、25、6というところだろうか。その姿が一瞬、若い頃の支倉の妻の姿と重なった。

——その隆起した胸の辺りに視線が走り、支倉は狼狽し、眼を逸らした。

「真康の娘の、真子です。ピアノストをやっています。」  
声は、母親に似ていた。

若屋真子。次の瞬間に、その漢字が脳裏に浮上した。恐らく、自分の想像したもので間違いはない。支倉はそう、確信した。

真康と、秀美。そして、真子。支倉は順に、視線を移動させていった。2人の親の膨大な全ては、残らず真子に受け継がれている。一瞬、そんな思考が脳裏を過ぎった。雄の豹の如き真康と、雌の銀狼の如き秀美。そして、その娘、真子。動物に例えらるれば、それは何だろう。驚か。または、鷹か。——猛禽類を中心にして、支倉の脳裏にそれは浮上した。しかし、それが途切れた

瞬間、支倉の脳裏にある映像が流入した。

短刀を構え、椅子に座った鷹一郎の背後に忍び寄る、真子。振り上げられた短刀の閃光が遠き、その刃が次の瞬間、瘦せ細った老人の背に突き立てられる。——1度、そして2度目の刃が、老人の背から引き抜かれた。しかし、老人が倒れる事はない。反対に老人は振り返り、椅子から立ち上がると、真子の手に持った短刀を挽ぎ取った。そして老人は、直後真子とその場に組み敷いた。欲望に濡れた真子の眼に、歓喜の色が浮かぶ……。

支倉はそこまで思考を巡らせた時点で、慌てて視線を元に戻した。布川の口元に、不可解な微笑が浮かんでいた。自身の思考を、探られていたのではないか。支倉の脳裏に、突如そんな疑惑が過ぎった。布川のあるはずのないその視線から、支倉は一心に、逃避を試みた。

「鷹二郎の三男の、真秀だ。銅版画を、やっている。」

男の声で、支倉は我に返った。

支倉は自分が知らぬ間に挨拶が進行していたのではないかと、という不安に駆られた。慌てて確認してみたが、男の席は真子の左だった。どうやら、聞き逃してはいなかったようだ。

男——芦屋真秀は、兄弟とは言っても、兄の真康とは印象的にも異なっていた。既に白髪の占める割合が黒髪を越した程度の髪の毛のうち、後頭部の周辺のもの、細くまとめた10数本の三つ編みにしており、その三つ編みをさらにまとめ、括っていた。口の上と頬に髭を生やしており、額には皮のバンドのようなものをつけている。銅版画をしている、と言ったが、この男の方が真康と

比較しても、音楽家に似合う風貌である、と支倉は考えた。

隣に、40代後半という感じだろうか、それ程の年齢に見える男がいた。支倉は話に聞いていた、真康・真秀2人の弟である、真幸ではないか、と想像した。

「鷹二郎の五男、真幸。彫刻家をしている。」

男が言った。案の定であった。

この人物も真幸と同様に髭を生やしていたが、真幸の髭は顔全体を覆っており、マルクスを連想させた。

その隣が、俊秀だった。

「若屋俊秀です。お母さんは、塔にいます。」

俊秀は他の人間を真似、もっともらしく言ってみせた様子だった。しかし案の定、それは食卓を囲む人間の笑いを引き起こす要因となった。

その笑いが次の瞬間におさまったのは、「お母さんは、塔にいます」という部分が、その言葉の中に存在していたからだろう。支倉はそう考えた。館の人間は皆それとなく、風乃の話題を避けている様子だった。

「俊秀。ベチューンの紹介を、してやったら？」

たった今支倉が思考を巡らせたような事柄にもその原因はあるのか、雪乃は如何にも話を粉らわせるような調子で、俊秀に向かい、言った。ベチューンの紹介。ベチューンとは、何だろう。

しかしその疑問は、直後説明された。

「ベチューンだよ。」

雪乃の言葉を聞くと、俊秀は待つていたように先程から背後に

伏せていたゴールデン・レトリバーを指さした。どうやらベチューンとは、犬の名前のようだった。

「どうして、ベチューンで言うの？」

支倉は、俊秀に尋ねた。

「ベチューンって、お医者さんだよ。」

「お医者さん？」

支倉は、一瞬当惑した。

医者。何故犬が、医者なのだろう。

「ノーマン・ベチューンですね。」

そこで、布川が言った。

「ノーマン・ベチューン？」

「ええ。カナダに生まれ、日中戦争中に八路軍医師として従軍し、戦場で活動した天才外科医です。戦場で患者の手術をしている最中、あやまって自分の指にメスで傷をつくり、それによる敗血症が原因で、戦場で死亡したのですよ。——中国では既に伝説化した逸話で、国民としては知っている事が、最早常識となっております。」

支倉は、布川の言葉を聞き、ようやく俊秀の言葉の意味を理解した。「医者」というのは即ち、犬の名前の由来となった人物の事であったのだ。

「それで、誰が犬にベチューンという名を付けたのですか？」

そこで、布川は幸弘に向かって言った。

「——鷹一郎だ。」

幸弘は、即座に返答した。布川はそれに対し、満足そうにうな

## 2. 突風

ずいた。確かに犬にそのような名前を付けるのは、鷹一郎かもしれない。

——続いて矢木、野上と椅子が並び、次が支倉、その次が布川だった。そして布川の隣が、和秀よりも2、3年下に見える、少年だった。

「若屋幸利、潤一郎の、長男です。画家をしています。」

話に聞いた、潤一郎の長男の、幸利だった。背辺りまで伸びた髪を背後で束ね、括っている。爪は長く、眼光是鋭かった。

そしてその隣が、潤一郎だった。

「あらためて、雪乃の息子の、潤一郎です。——画家をしています。」

そう言い、座ったままの姿勢で、2人に向かい会釈をした。長身は車内で見た際と、変わっていなかった。

車内ではよく見ていなかったのだが、あらためて見てみると、やはり親子だけあり、潤一郎の仕草は、幸利と同じだった。貌形などの正確さは、真藤・秀美や真子に劣るものの、通常の姿勢での手の位置など、それは全く同様であった。

そう——支倉にも、覚えはあった。恵子、そして真知子。2人共、顔は母親似だとよく言われたが、仕草などは、父親である支倉に似ていた。刑事という職業柄、あまり子供との交流はないだろう、と考えるのが自然かもしれない。確かに、支倉もそうだった。だからこそ支倉は、家にいる間、少しでも多く娘との時間をつくろうと常時心がけていた。結果、支倉の娘と過ごす時間は、通常の家庭よりも長くなった。そう、恵子と真知子の2人の仕草

が似ているのは、姉妹だからなのではなく、2人に父親の仕草が伝わった、という風に説明するのが最も適切だろう。

そこまで進行させた時点で、支倉は思考を停止させた。布川が笑っていたからではない。込み上げてくるそれを、止めていた。何と言つてもいい。それでも全ては、そこに遷らざるを得ない。

青天の霹靂の如く、それは度々支倉を襲った。悉くのそれは、既にそこになく、渺茫たるそこからも、全ては過去の事実である、現在に至ってはその事が理解出来るのみであった。

支倉は、顔を上げた。

食卓を囲んだ人間達の挨拶は、進んでしまっていた。支倉には、「——繰り返しになるが、彫刻家をしている。」

という、幸弘の最後の言葉しか聞き取る事は出来なかった。雪乃の話していた部分は、完全に聞き逃していた事に支倉は気付いた。支倉は先程のものよりも、たった今巡らせたこの思考の方が、それに要した時間は短かったように思えた。計り知れない、時間、現代の心理学では、人間の心理を数値化する作業が進められているという。瞬間支倉は、それがあまりにも莫逆げた試みである事を感じた。

「——ご苦労だった。」

幸弘が、言った。支倉もそれに続き、慌てて頭を下げようとしたが、首を微かに動かしした時点で、それは止まってしまった。「朝食にしよう。」

幸弘の言葉で、朝食を囲んだ人間達が、それぞれフォークを取った。

朝食を終えると、2人は部屋に戻り、しばらくの間休憩をとる事にした。2人はこの日の深夜、館に到着した。つまりは結局、1晩睡眠をとっていなかった。それに加え、館に到着してからの事態の急展開に、少なくとも支倉の疲労は確実に蓄積していた。布川は朝食の後、館内をあらためて見て回ると言っていたが、支倉と同様に休憩をとってからにしようと言っていた。

部屋には小さな暖炉がついており、野上が火を入れてくれたため、部屋の中は暖かった。支倉は横になるわけでもなく、布川を呼びに行くでもなく、部屋に置かれた赤いソファアームに座り、ただ沈黙を続けていた。

支倉は朝食の前に部屋に脱いできたコートのポケットに、手を差し入れた。手に、僅かな感触が伝わる。支倉はコートのポケットから出したそれを、机の上に置いた。恵子が幼稚園の参観日に父親にプレゼントした、粘土細工のキーホルダーだった。車の鍵とマンシヨンの部屋の鍵が、それについている。

全ては既に、手応えさえも掴む事の出来ない場所にある。全てが恐らく、もう遅いのだろう。凝然と立ちつくしたあの瞬間から、想起する過去は明確な後悔の念に満ちていた。

あれから妻には勿論、恵子にも真知子にも会っていない。1度、2人の通っている小学校の前まで来た事があったが、2人の姿を見る事なく、支倉は戻ってきた。再会を果たした父親の姿を

2人の娘はどう受け入れるのか。押し寄せる不安と恐怖とに、常に支倉は背後に戻らざるを得なかった。

恵子が生まれた時、アパートから家族で移り住んだマンシヨンには、支倉が再び訪れた際、既に別の人間が生活していた。支倉はそこから大分離れた都心の一部屋に越し、妻と2人の娘もかつてのマンシヨンには住まず、どこかしら別の場所に越していったものらしかった。それは実際に、かつて自分の住んでいたマンシヨンを訪ねた際、自身の眼で確かめていた。最初支倉の眼に入ったのは、廊下を走る5歳ほどの幼児と、走って行く先にいた、その父親らしい男だった。表札には、『村田 亮介・和子・美穂』と明記されていた。

別居する以前の2人は、いわゆる理想の夫婦だった。マンシヨンの隣近所からも、2人の仲は常時称賛の対象にあった。そして2人は、近所付き合い合いとしての一端であると明確なその称賛を聞く度に、安堵した。しかしそれは2人が、最も重要な核心を、最も指摘すべきそれを、口にしようとしなかったからだ。それが、幸福であった。それが夫婦という他者同時の関係を合理的に存続させる、条件であった。そして恐らく、存続するものである前提を持つて認識の対象にあった。少なくとも支倉はその幸福が、あるべき真実であると信じていた。

それがあまりにも容易に崩れ去ったのは、些細な出来事からだ。ある時、前々から計画していた日帰り旅行の日の朝、正に家を出るといふその時、事件の発生の連絡が入った。支倉は、現場に急行せざるを得なくなった。支倉がいなくなるため、家族が以

## 2. 突風

前から決定していた計画は、先に延ばされる事となった。

しかしそういった事にしても、それは飽く迄日常の一端として、生活の前提的な範囲に位置するものだった。そう——支倉は妻との間にある「夫婦」という繋がりの上での「夫」である以前に、その生活を存続させる職業を所持していた。それは2人が結婚する以前に交際していた時にも、同様であった。2人で出掛けている中途、突如連絡が入る、または何らかの事柄を不意に想起するなどで、現場に急行する事が少なからずあったのだ。結婚し、恵子と真知子が生まれてからも、それは変わっていないかった。そう、日帰りの旅行の直前だけではなく、2泊3日の家族旅行中に、支倉のみ東京に戻った時さえあったのだ。その時でも、妻はその事を自然に受容していたのだ。『仕事なのだから仕方がない』、と。それに加え、支倉の妻の父親は、警察学校の教官であり、元刑事だ。父親の姿を見、妻も十分にその事を納得していた。

そう、それは単なる要因でしかなかったのだ。随所に分散した、中には2人のうち片方しか気付かなかった程度の微小な黒点は、やがて徐々に拡大し、存続すると信じられていた全てを、纏綿とした深黒に刷いたのであった。3日後に事件が終わわり、支倉は家に戻った。妻には、その日の夜には絶対に家に戻る、そう約束していた。その約束を、支倉は守っていたのだ。それに加え妻には、約束を守る事を、その日の午後、事前に連絡していた。そのため、妻は支倉の好物の夕食を支度し、待っていた。父が帰ると聞いた恵子と真知子も、喜んでいて、という。

が、支倉は仕事仲間との事件の解決祝い、食事を済ませて帰宅した。仲間と食事をしてから帰る。支倉はそう受話器を通して妻に告げた、明瞭な記憶があった。しかし、妻がそれをあるいは聞き逃していたのか、または支倉が実際にその事を言いつびれていたのか、妻はその事実を聞いてないと支倉に対し主張した。支倉は帰宅し、用意された食事を見た時に憶えた不快感を、表情で露わにした。当然だった。食事は済ませてくると連絡してあったにも拘わらず、その食事は用意されている。その意味を、理解し兼ねたからだ。支倉は、「食事は済ませてくると言ったはず」と、妻に訴えた。妻がその事実を認識していなかったという事実を、支倉は無論の事、知り得なかった。

そう、妻は、支倉がそれ——自分が支倉の言った事を、まだ知らないという事実——を知っている、と思いついていた。そのため、支倉の発言に激しい憤りを覚えたのだ。それに加え妻は、支倉が食事のために遅くなるという事を知らなかったために、帰宅が遅かったその事にも、同様の憤りを感じていたのだ。3日ぶりに帰ってくるという事から、それを黙っていようとも考えていたのだが、支倉の帰宅するなりの言葉を聞き、妻の憤りは抑制可能な範囲を越えかけた。しかしその時点では、疲労した支倉と口論になるのも面倒と感じ、妻は適当な弁解でその場を鎮魔化そうとしていたのだ。そのために、お互いが明瞭な事実を知らぬままに、翌日を迎える事となってしまったのだ。

一方支倉の方は、夕食の用意されていた事の意味を、翌朝も理解しかねていた。3日間連続した帰宅せずの仕事のため、その朝

は多少勤務時間を遅れての出勤が許可されており、恵子と真知子がそれぞれ学校に行つた後、支倉はその事について、妻に質問したのだ。が、その時点で妻の心理状況から言えば、その質問は相手を逆上させるものに他ならなかつた。その際妻の口にした言葉は、「刑事を辞職して」というものだった。後々考えてみても、その時の状況に必ずしも当てはまるものではない言葉である事は、明確であつた。しかし、その状況において突発的に出た言葉が、それであつたのだ。しかし無論の事その言葉にしても、前後の妻の心理的な状況を知り得ない支倉の憤りを逆に誘う言葉となつた。支倉にしてみれば、「なぜ今さらこんな言葉が出なければならぬ？」と、当然疑問を持つものなのだ。そして――

結局、先に別居を口にしたのは、妻だった。「離婚」とは異なる「別居」という言葉に、支倉はその時点で微かな希望を持つていた。しかしその希望にしても現在に至つては、消えた、と言つても過言ではないだろう。現在では、どちらにしても同じ事だ。ある日突然送られてきた離婚届。ちょうどその時、久しぶりに聞く妻の声でかかつてきた電話の内容は、書類への印の要求だった。そしてそれに印を押し、送り返した瞬間、形式的にのみ保たれ続けていた2人の間の「夫婦」である関係は、脆くも崩れ去る。――そのような事態が、今日にも起こりうる可能性があるが

た。恵子と真知子には何の事情も説明せずに、支倉は「家族」の家を離れた。その後妻から1度のみ、「恵子と真知子には事情は話

した」という電話がかかつてきた。しかしその事にしても、それは留守録に記録された音声に過ぎなかつた。支倉も何度か勇気を奮い起こし、かつての自宅に電話をかけた事があつた。しかしそんな時には、予め図つたかのように電話には誰も出ず、数回の電子音が鳴り止むと、無感情な声が受話器から聞こえた。それは支倉の聴覚器官から脳へと、徐々に伝わつていった。

妻は娘達に、どのように事態を説明したのでらう。自身の行為のみを正当化し、そして支倉の側に罪があると訴える、そんな説明だろうか。そうなれば娘達は未だに、支倉を嫌悪している事になる。その事について思考を巡らせる度に、妻に対する支倉の嫌悪心は増していった。家を出る時、妻ではなく、自分が事情を説明しておけば良かった、と思考を巡らせた。しかし考えてみれば、仮にそうしていたとして、果たして内容は支倉の想像した妻の滑稽な説明が、支倉の方だけを正当化したもの、という風に変化するのみである事は、容易に推測出来た。それに加え支倉とは違い、妻と娘の生活はこれから先にも存続する事になり、その間に2人は、母親をより正当化する事になるだろう。

前述した通り、支倉はそれから後娘の姿を見ていない。けれども頻繁に、別の人間を見間違える事があつた。支倉のマンションの隣の部屋には、恵子と同年代の少女がいた。そこに頻繁に遊びに来る友人らしい少女の着ているコートは、支倉が恵子に買ってやったものとよく似ていた。初めて見た時には瞬間的に、自分のところへ尋ねて来た恵子と思い、声をかけようとした程だった。それだけではない。同年代の少女を見る度に、支倉は必死に眼を

凝らした。

支倉は2人が小さな頃によく、ある決まった絵を描いてやった記憶があった。まず最初の絵は、5歳程の幼児と父親とが、ベンチに座っていると。次は、小学3年生程の子供と、既に白髪が髪に混じり始めた程の父親。次は学生服を着た中学生と、父親。そして鞆を片手に背広を着たあの子供と、父親。それから、既に社会人となった子供と、年老いた父親。そして——最後の絵では、最初にいた父親はいなくなっている。その代わり、最初の父親と同じ程の歳になったあの子供が、かつて父親が座っていた場所に、座っている。そして今まで子供が座っていた場所には、3歳程の、昔の子供によく似た、もう1人の子供が座っているのだ。そんな絵だった。

今の恵子には、いや、真知子にも、その時支倉が2人に何を伝えたかったのかは、恐らく理解出来ているだろう。しかし果たして臍な記憶の奥に存在している過去の映像を、2人は現在、記憶しているのだろうか。

支倉は部屋の外に出た。——布川を呼ぶためだった。

10数分、というところだったろうか。十分に休憩出来たとは無論の事言えなかつたが、仄暗い部屋の中で1人記憶を辿る行為よりも、それは幾分かでも生産的な行動であるかのように思われた。支倉はその時になり、部屋から見た窓の外の風景を想起した。嵌め殺しの硝子窓の入った木製の窓枠の外にある空は、厚く重なる濁った鈍色の雲に覆われ、その合間から射す白い光が平ら

に潰されたようにして落ち、館の背後にある沼を越えた樹林に、それは幾筋にも投げられていた。

支倉は布川のある客室の前に立ち、扉をゆっくりと、ノックした。

「——はい。」

中から、布川の声が出た。

支倉は布川の言葉を聞き、扉を開けた。布川は部屋の中央の暖炉の前で、ソファアールに凭れていた。

「支倉です。」

支倉はそう言い、背後で扉を閉めた。

布川がいる部屋の造りは、支倉のいた部屋とほぼ同じものだったが、指摘するとすれば、それは左右が逆転していた。

——部屋にある嵌め殺しの窓にしても、それは同様であった。

支倉が名乗ると、布川はすぐに笑みを浮かべた。

「支倉さんでしたか。」

布川はニヤリと笑った。

「それなら、どうぞここにかけて下さい。」

布川はそう言うと自らは机の傍らにあった椅子に移動し、支倉にソファアールを勧めた。

「申し訳ありません。」

支倉はそう言うと、布川の言うままにソファアールにかけた。この部屋にもやはり、それは支倉の部屋のそれと左右の逆転した位置にあったものの、壁に埋め込まれた暖炉があった。くねり揺らめく炬火の先端に、支倉は一瞬、触れてみたい欲望に駆られた。何

## 2. 突風

時だったか、錆びた画鋏の針の先端を上に向け、そこに人差し指を軽く当てた事があった。覗き込むように下から見上げた刹那、空翠の如き針の先端は、支倉の指に渦巻いた遼海の巨瀾へ引き込まれていくかのように、そこへ吸い入れられるかのようにも見えた。

「それよりも——支倉さん、貴方は、館の天井に施されていた彫刻が何であったか覚えていますか？」

そこで布川が言った。支倉はその質問に対し返すべき返答を、明確に記憶していた。

「北欧神話でしょう？」

支倉はそれを、即座に答えた。

「ええ、そうです。——実は私は、機巧館と北欧神話には、深い関連のあるものと、考えているのですよ。」

布川は、ニヤリと笑った。

支倉は突如発せられたその言葉の意味を、瞬時に理解する事が不可能であった。

北欧神話と機巧館との、深い関連。

その時支倉は、その全てが、若しくはその全てさえも、勿論その総てを含め途轍もない渺茫たる渦中に引き戻されてしまうかのように思えた。それは一瞬の幻想であり、同時にそれを異なる視点から洞察を試みた結果でもある、眩惑でもあるのだろう。その瞬間、つい先程に巡らせた思考が、再び支倉の脳裏を過ぎった。

そこで再び、布川が口を開いた。

「支倉さんは、北欧神話を知っていますか？」

「いえ……実は、よく知りません。」

支倉は布川の言葉に対し、そう答えた。その返答には、無論の事何の誇張も含まれてはいなかった。その宗教の存在こそ知っていたものの、その内容について支倉の一般的な知識は、皆無であった。

布川はその口元に微笑を浮かべると、言った。

「北欧神話、と呼ばれる神話のそもその起源については、これまでの学者の研究においては、紀元前1600年から紀元前450年程まで続いていたであろう、スカンジナビアの青銅器時代にあるとされています。無論の事、後に現れたキリスト教徒からすればいわゆる「異教」であった過去の神話を、かつてのヴァイキングの詩人や物語の話し手は、数多く知っていたわけですが——ここで着目せねばならないのは、現存しているその物語の大半はキリスト教徒の作者を通して現在に伝えられたものであり、本来の異教の伝説の殆どは神話として知られる以前に大幅に編集され、その大半は誤解され、あるいは忘却されている、という事実です。その異教徒により書かれた資料として唯一現存するものと言えば、それは木や石、または骨や金属の上に残された極めて短いルーン文字の碑文のみであり、我々に理解可能な神話的な詩として後世まで残っているもの殆どは、1冊の極めて貴重な稿本である『王室写本』に収められています、これは17世紀アイスランドの農家で発見され、一般に『古エツダ』または『詩のエツダ』として知られるものであり、この超自然的存在について語られる詩は、ラグナロクと呼ばれる凶事の内に全ての世界が破滅す

## 2. 突風

る事により、頂点に達する事となるわけですが——ともかく北欧神話の原典は主にこのエッダであり、その他の一般にサガと呼ばれている散文としての原典と合わせて、キリスト教以前の潮流であつた異教徒の信仰は、現在に亘り研究の対象にあるわけです。」

布川は、言った。

スカンジナヴィア——支倉は脳裏に、その半島の地図を描いた。

不意に支倉は、寒気を感じた。支倉は座っているソファアを正面の暖炉に向かい、僅かに近付けた。

布川は、ニヤリと笑つた。

「野上さんの言っていたオーディン、というのですが——それは北欧神話における、所謂主神の座に位置する神であり、古代ノルト語においては激怒及び理解力を示す言語がその語源となつています。オーディンは戦の神であり、文芸の神であり、同時にルーン文字を生んだ神でもあり、さらには死者の神でもありました。」

北欧神話においては巨人という存在が、怪物・妖怪等の語源を持つ言語であるトロレヤトウルスといったその種族にも関連し、頻繁に邪悪な嫌悪すべき存在として描かれています——北欧における創造神話において、その巨人は最初の生命であり、同時に天と地の元となる存在でもありました。」

創造神話——支倉はその時、館の六角塔に在り、と言つていた。鷹一郎の四女であるという芦屋風乃の礼拝の対象にあるものらしい自作宗教についての事柄を思い出した。同時に例の俊秀の

言葉を、支倉は想起していた。

支倉は何時か読んだ旧約聖書の、最初の文章を想起した。

——始めに神が天地を創造された。地は混沌としていた。暗黒が原始の海の表面にあり、神の盪風が大水の表面に吹きまくつていたが、神が、「光あれよ」と言われると、光が出来た。神は光を見てよしとされた。神は光と暗黒との混合を分け、神は光を昼と呼び、暗黒を夜と呼ばれた。こうして夕あり、また朝があつた。以上が最初の一日である。——

「最初に北は暗鬱であり、南は暑く明るく、その間にギンヌンガ・ガツプという、深い峡谷がありました。これは巨大な空虚であり、度々所謂“無”としてとらえられる場合があるようですが——多くの場合、この名の背後に存在する概念は、真実を隠す外観の裏に存在する内奥の真実であると思われています。それは“底知れぬ裂け目”であり、そのうちに北にはニフルヘイムという、一面に霧が立ち込め、石のように固い氷に覆われた厳寒の凍てつく土地が出来、南には燃え盛り火焰を吹き上げるムスベルヘイムという土地が出来ました。ニフルヘイムの氷とムスベルヘイムの炎が纏れ合い、ムスベルヘイムの温暖な気候によりもたらされる熱気を含んだ風はニフルヘイムの氷を溶かし、滴り落ちた水滴は火焰の送る力により、生命を得ました。やがてそれは原始の巨人となり、それはイミルという名の原始生物となりました。人間の姿をしたその巨人が寝ているとそれはやがて汗をかき始め、彼の左腕の腋窩より1人ずつの男女が誕生し、一方の足が片方の足と交わることにより、またそこに1人の男子が生まれました。」

これらの後裔は全ての巨人となり、また全ての男女の源ともなるものでした。その後にもニフルヘイムの氷はさらに溶け続け、その事により、それは牝牛の形となりました。名はアウドウムラといい、その4つの乳房から流れ出るミルクにより、イミルを養っていました。アウドウムラ自身は1本の草もない中で、氷の塊を舐める事で空腹を満たしていました。ある時アウドウムラが塩のついた氷を舐めていると、その氷の中から、1日目の終わりに人間髪の毛が現れ、2日目の終わりにさらに頭全体が現れ、3日目には男の全身が現れました。それがブリという男で、強く立派でした。ブリにはボルという息子が出来、ボルは霜の巨人ボルソンの1人娘であるベスツラを娶りました。そして、その2人の間には3人の子供が生まれたと、過去の詩に記されています。そしてその3人は、イミルを殺害したのです。——アイスランドの活発な歴史家であり、同時に優れた詩人であると同時に政治家でもあったスノリ・ストルソンは、1220年頃に、詩人達が神話の比喻を理解し、それを正確に使用出来るための教本を出版しました。そのスノリはイミルを殺害した3人の神々は、オーディン、ヴィリ、ヴェーの3人であったと解釈しています。3人の神が原始の巨人を殺害した理由については、不毛の地を耕作しようと考え、土地を自分達に与える事を要求した3兄弟に対し、反対に敵意を露にしたための止むを得ない攻撃であった、そうされている場合もありますが——ともかくも日本における北欧神話研究において著名な某氏は、その著書において、ギリシア神話においては最初に愛があり、キリスト教においては光があり、北欧

では殺戮があった、そう比較していませんね。

原始の巨人イミルの体軀より滝の如く流れ出した大量の血液は、全ての巨人達を皆溺れさせ、その中で生き残ったのは、木の虚を使った船で逃げ伸びたベルゲルミルとその妻だけでした。一方若き神であるオーディン達は、イミルの肉から大地を作り、砕けた骨と歯から岩と石を作りました。残ったイミルの血からは、川と湖を作り、大地の周りを同じく血の海で囲みました。頭蓋骨は空に上げ、4人の小人にそれぞれ隅を押さえさせ、それはヴェストリ、スドリ、アウストリ、ノルドリという名で呼ばれていました。ムスベルヘイムの炎から火花を天空へ高く飛ばすと、それは太陽と月となりました。イミルの脳からは雲を作りました。オーディン達はベルゲルミルの子孫である巨人達の住む場所としてウトガルドをあたえ、自分達にはアスガルドという王国をつくり、イミルの盾から作った皆で、巨人からそれを守護しました。人間達には真ん中の国、ミッドガルドを与えました。

アスガルドで神々たちは、徐々に力を付けていきました。オーディンの住居の上には、フリドスキャルフと呼ばれる監視塔が建っており、神々の父はそこから世界の隅々を見渡す事が出来ました。やがてオーディンはフリツガという妻を持ち、バルデルやホヅルなどの子供を持ちました。

そこでなのですが……支倉さん、その絵を見てみてください。」

そこで布川は、部屋の壁の一点を指した。

支倉はソファーにかけたまま、布川の指差すそれを見た。

## 2. 突風

2頭の山羊に引かせているものらしい、車輪のついた櫓のようなものの上に人間が乗っている。櫓の上で赤い髪は波の如く靡き、その髻も同様に赤かった。左手には山羊の首につけた手綱を持ち、右手には何やら鎗のようなものを持っている。腰にはベルトをしめ、手には銀色の手袋をはめていた。

「あれは恐らく、トールでしょうね。恐らく、生前の昭人さん辺りが、彫ったのでしょうか。」

布川は、言った。

何故布川は掛かっていたその絵画が、何について描かれたものであるか知る事が可能であったのか。それを凝視するうち、その疑惑は解消された。その絵画は額にこそ入っていたものの、絵を保護するためのガラス等はないなかった。そしてその一瞬絵画に見えたものとは、版画の原版に塗装を施したものだのだ。ならば布川はそれに手で触れ、図柄を確認したと考えられるだろう。

布川は、ニヤリと笑った。

「トールは山羊に引かせた戦車を操り、その手には敵を打ちのめす恐ろしい鎗、ミオルニルを持っています。また、それを使うための鉄の手袋をはめ、腰のベルトは、それをつける事により本来持つ力の3倍の力を出す事が可能となる効果を持ちます。トールはオーディンが大地の女神イェオルドとの間につくった、そして最初の子であり、北欧神話においてそれは最強の神とされ、トールを始めとするオーディンのその他の後裔が、天のアスガルドに住居を構えるアース神族に数えられます。」

このトールが巨人達と争い腕試しをするためにアスガルドを出、巨人国へ行った際の、極めて興味深い逸話が残されているのですよ。」

布川は如何にも愉快であるように言った。

「その時一緒にについていったのが、ロキという、北欧神話におけるメフィスト・フェレスの役を務める事となる元は巨人であったアース神でした。ロキは、巨人のフアルバウテとラウファイの子供で、後にオーディンの養子息子としてアース神族に迎えられる事となったのです。ともかくこのロキにより、最終的にはオーディンの息子であり、誰にもまして愛された太陽と光の神であり正義の神でもあるバルデルが殺害される事となるのですが——まあ、ともかくもトールは、ロキがアース神族に加わる際、最も先にその旨を協議の場で口にした神でもあり、ロキがアース神族に加わる以前から、頻繁にその巨人を進んで遊び旅の供としていました。その時も2人は、揃って巨人の国へと旅したのです。」

布川は、ニヤリと笑った。

「トールとロキは、いつもシアルヴィイという従者を連れていました。一行は始めに船で湖を渡り、その後海峡を泳いで渡りました。彼らが岸辺を離れしばらく歩くと、そこは森があり、一行はその後夜まで走り通しました。その夜、一行は大きな広間にいくつかの隣室のある奇妙な形の洞穴で一夜を過ごしたのですが……それは巨人の手袋だったのですよ。手袋の持ち主はスクリミルという巨人で、スクリミルはトールの事を知っていました。一行は、スクリミルと一緒に走り、巨人の城を目指しました。」

その夜、スクリミルはある大きな樫の木の前で足を止めました。スクリミルは全ての食料を入れた自分のリュックをトールに渡すと、リュックから食べ物を出せと言われ、寝てしまいました。ですがトール達がどれだけ骨を折ろうとも、リュックの結び目は解く事が出来ませんでした。食料は、取り出せませんでした。空腹と疲労とで苛立ったトールは、ミオルニルでスクリミルの額を殴りつけました。けれども、スクリミルは頭に一枚の葉が落ちたかどうかと穏やかに尋ね、再び眠りに就きました。

彼らは夕食をなしに我慢しなければならなかった上に、スクリミルの森をも震わせる野により、眠る事さえ許されませんでした。そこで真夜中、トールはスクリミルの額に、ミオルニルを再び打ち下ろしました。今度は、スクリミルの額にミオルニルが食い込む、確かな手応えがありました。ですがスクリミルは、頭の上に団栗が落ちてきたに違いないと呟き、再び眼を閉じました。夜明けが近付くと、トールは巨人に対し3度目の攻撃を加えました。鎧は巨人の額に、先程にも増して深く食い込みました。スクリミルはようやく半身を起こし、一羽の鳥が頭の上に何かを落とすに違いないと言った後、巨人は立ち上がり、ウトガルドの城につけば自分よりもさらに巨大な巨人がいるとトール達に対して警告し、彼は立ち去りました。それから一行は間もなく、巨人の城に到着しました。」

布川はそこで言葉を切ると、微笑を浮かべた。

暖炉に燃え盛る炎は先程にも増して火勢を強めているかのよう  
に思われた。ふと自分の頬に触れると、火照った頬は想像した以

上の熱を持っていた。支倉は座っていたソファアを、再び暖炉から僅かに後退させた。

「ウトガルドの城の巨大な門の樫の間をすり抜け、その巨大な広場に行くと、そこには大勢の巨人がおり、トール達を見ました。そしてそこにいた巨人の王であるウトガルド・ロキは、どんな特技を見せる事が出来るかとトール達に尋ねました。そこから一連の力比べが続くのですが、そこでトール達は絶望的な敗北を見る事となりました。最初の勝負は、ロキと巨人のロキとの、食べ比べでした。床に肉が山盛りになった巨大な樽が置かれ、2人は両側から同時に肉を食べ始めました。そして戦いの末、2人はちょうど、樽の真ん中で食べ終わりました。互いに一歩も引かない戦いでしたが、ロキが肉だけを食べていたのに対し、ロキは骨どころか樽まで食べていました。無論、勝負は敗北に終わりました。次は、人間の中では最も早いシアルヴィと、フギという名の巨人が競走をする事になりました。最初はシアルヴィが速く、速さのあまり姿が見えない程でした。けれどもそれに対するフギは、さらに速く、折り返し戻ってくるところで、走って来るシアルヴィに出会う程でした。」

最後に残ったのは、トールでした。アスガルドの最高の飲み手であるトールは、巨人に対し飲み比べを提案しました。巨人は、大きな角杯を運んできました。ウトガルド・ロキは、「飲める奴なら一口だ。2口が普通で、3口もかかる奴はいない」と言いました。トールにはそれが大きな杯には見えなかったために、一気に飲み始めました。ですが、杯の中身は減る様子がありません。

## 2. 突風

息が切れてやめてみると、杯の中身は殆ど減つていませんでした。トールはもう1度、もう1度と挑戦したのですが、3回繰り返しても杯の中身は僅かしか減る事はありませんでした。トールも敗北に終わりました。次いでトールは若者がやる簡単なゲームと称された、灰色の巨大な猫を床から持ち上げる事を教えられました。それは最も力の強いアース神であるトールには、笑うべき仕事に思われました。トールは猫の所に歩み寄ると、その腹のまわりに腕を回し、力を込めて引き上げました。ですが、猫は上がりませんでした。必死になって力を込めたものの、猫が背を丸めて腹を高くするために、猫は足が1本地面から離れたのみでした。——それ以上は、最強のアース神でも不可能でした。トールは最後に、巨人王の乳母である、エリーという老婆と組み合う事を求められました。敵だらけの老婆が広場に入ってきて、身構えました。トールは全力を尽くして老婆と戦いましたが、老婆は動かさず、しかも老婆は驚愕すべき力で、反対に最強の神に片膝をつかせたのです。やはり、トールは敗北しました。ウトガルド・ロキはそれ以上の勝負を許さず、また最強のアース神もそれに同意しました。

その晩巨人達からの手厚い持て成しを受けた後、翌日の早朝、アース神と供の者は城を出ました。

ですが——この話には、続きがあるのです。いよいよ戻るといふ時、巨人の王が現れました。そして巨人は、トール達が自分達の魔法により如何に騙されていたかを語ったのです。

まず最初に、彼らの森で出会ったスクリミルという巨人とは、

巨人王その人に他ならず、リュックの結び目は魔法をかけた鉄の網で縛られていました。トールが巨人の額を打つたと信じていたミオルニルの攻撃は、実際には巨人が魔力により引き寄せた付近の山に向かつて行われたものであり、見るとその山には3つの深い窪みがありました。ロキの食べ比べの相手は《火》であり、生命ある創造物にはなし得ない事ですが、骨であろうと樽であろうと容易に焼き尽くす事が出来ました。さらにはシアルヴィの競走における競走相手フギは《思考》そのものであり、その飛翔がどのような人間にも増して速い事は、当然の事と云えるでしょう。トールの角杯の縁は密かに海へ通じており、飲み干せるはずもなく、彼が角杯より減らした僅かな量は、干潮を起すに足りませんでした。猫は地球を取り巻く世界蛇であるミッドガルド蛇であり、彼がその蛇を海から引き上げた時、全ての巨人は恐怖に戦慄しました。トールと組み合った老婆は実際には《老年》そのものであり、それは最強のものさえも屈させるに足りませんでした。

全ての真実を悟った時、トールは激怒のあまりミオルニルを振り上げましたが、その時既にウトガルド・ロキの姿はなく、背後にあったはずの城は消え、目に入るのは緑の平野と鈍色の空ばかりでした。」

布川は如何にも愉快そうに笑った。

確かにそれは、支倉が現在までに聞いた超自然的な逸話のうち、最も興味深いものであると同時に、最も印象的なものでもあった。

その時同時に支倉は、徐々に近づく、訪れる狂気の竜を聞いた

かのもうでもあった。狂癲の詭偽に満ちた畸形の祝祭が、遽然として訪れるその瞬間を、支倉は斑霧の彼方に見える鬱林の樹透に、一瞬間間見たかのようにもあつた。――

「さて、少し考えれば容易に理解できる事ですが、トール達が巨人達の魔法により騙されて争つたものには、皆一定の共通点がありました。それは皆、生命を持つ創造物がどのような力を駆使しようとも、打ち勝つ事が不可能なものであつた、という事なのです。人間を遙かに超越する力を持つ神さえも、それに打ち勝つ事は不可能でした。北欧神話において最もそのような性質が強調されるのは、全ての物に与えられた《運命》です。それを最も象徴するのが、世界を創造した神々さえも最終的に辿る事となる、全てにおける滅亡の道です。それがラグナロク、後に《神々の黄昏》と過つて解釈された、《神々の運命》です。」

布川は一瞬言葉を切つた後、口を開いた。

「アスガルドへの攻撃を指揮した中に、ロキがいました。ロキが生んだ物には、スワイディルファリという牝馬との間につくつた、オーディンの素晴らしい馬、8本足のスレイブニルなどもありましたが、他の物は皆、邪悪な物ばかりでした。それはロキが巨人女アングルボダとの間につくつた、3人の子供達です。そのため、その3人が世に出たのを知つた時、オーディン達はその3人を連れてこさせ、3人をそれぞれ、いろいろな場所へと追放したのです。1番上のフェンリスヴォルフ、即ち狼フェンリスは、グレイブニルという魔法の足綱で縛られ、小島から外へ出られないようにさせられました。先程言つたミッドガルドの蛇ですが、

これもロキの2番目の子供でした。これはオーディンにより、大海へと投げ入れられました。3番目は戦没者の霊の行くヴァルハラ（の宮殿とは違い、老いや病で死んだ人間の行く事となる冥界であり、同時に死の女主人であるヘルでした。ヘルは飢餓を祝福し、病を食べていました。しかし、オーディン達はこの3人を、追放はしても、神々の間に開かれた協議やアース神の仲間となつたロキの手前、殺害する事は敢えてしませんでした。オーディンは恐らく、いずれこの3人が、神々の運命を引き起こすであろう事を、気付いていたでしょう。ですが運命に逆らう事が不可能である事を、ルーン文字の神である神々の父は、知つていました。

そしてラグナロクは、訪れたのです。世界樹イグドラジルの最初の枝が折れました。婦人達は装飾品探しが元で厄災を引き起こし、より大きな権威を求めた兄弟達が互いに争い、父親達は息子の頭をぶち割りました。それまでずっと太陽と月を追つていたスケエルとハチの2頭の狼は、遂にそれぞれを捕らえ、時を数える者は日を読み取る事が出来なくなりました。

狼フェンリスはどうとう、魔法の足綱を引き千切り、アスガルドへ向かいました。ミッドガルドの蛇も、同様に海から陸へと上がり、その毒を撒き散らし始めました。ロキはオーディンの息子、バルデルを殺したため、神々により、ずっと洞穴へ閉じこめられていたのですが、やはり同じように抜け出してきたのです。冥界の死者達を死者の爪でつくつた船に乗せ、世界の破壊へと船を進めました。ムスベルヘイムの兵士達は、時の始まりよりそこに待ち構えていた火の巨人スルトを先頭に、9つの世界を炎で焼

## 2. 突風

き尽くし、神々に戦いを挑みました。アスガルドの見張りのヘイムダルが角笛を吹き鳴らし、輝く鎧に身を固めた神々達が、馬を走らせました。片腕の神ティルは冥界の番犬であるガルムと戦い、共に打ち合い、遂に同時に倒れます。またスルトはフレイにその炎の剣フオイエルを持って勝負を挑みますが、彼は巨人女への求婚の際彼の剣を失っていたために、互角に戦う事は出来ませんでした。トールはミッドガルトの蛇に向かい3回に亘り彼の鎧ミオニルを投げ、遂に敵を倒しますが、9歩下がったところで、その毒に倒れました。オーディンは彼の槍グングニールにより狼に傷を負わせますが、その最後の敵を倒すには至りませんでした。反対にフェンリスは天と地との間に大きく開いたその喉で、オーディンを飲み込みます。オーディンの息子ヴィダルが狼の頸を引き裂き、仇をとりますが、神々の滅亡を食い止める事は出来ませんでした。ヘイムダルとロキは、相打ちになりました。大地は海に沈み、太陽は黒くなりました。輝く星は地に落ち、天空は炎を上げ、燃え盛りました。アース神族とヴァース神族の神々、妖精、小人、黒妖精、巨人、そして全ての人間達に、死が訪れたのです。炎と煙が湧き上がり、それは天にまで届きました。

——これが、ラグナロクです。」

そこで、布川はいったん言葉を切った後、続けて言った。

「今回の事件は、犯人がこの館に起こそうとしているラグナロク、という事が可能でしょう。言わば犯人は、火の巨人スルトです。この館がここに建つ以前から、この機会を待ち続けていたのです。その炎の剣フオイエルで、今この館を焼き払おうとしてい

るのですよ。」

布川は、ニヤリと笑った。

鬱然とした大気が、その部屋に立ち込めるとどこか鬱塞とした暖気に誘発されてか、突如差す暗翳のごとく、轟然と沸き起こる一瞬を支倉は意識した。

支倉は椅子に座ったまま、またもや例の立ち眩みの如き感覚に襲われた。

「多少、話の焦点はずれますが——人間には、例えば燃えている炎の先端に触れたい衝動や、針の先端に触れたい、そういった一種狂氣的な衝動が、時に存在します。」

瞬間、支倉は驚愕した。

それは支倉がつい先程にも経験した、そして想起した感覚であつた。

布川の鼻梁の左右にある鬚り、2つの暗晦を、支倉はその刹那、最も強く意識した。

「そういった突如とした感覚は今お話したようなものの以外にも、例えば机の右端に軽く触れた場合、同様に左端にも触れなければならぬと強く感じたり、また、右の腋窩に手をやった場合、左にも同様にせねばならないと感じるそのような感覚にも、強く類似した傾向を見出す事が可能でしょう。それは炎に触れるなどといった、場合によっては取り返しのつかない結果を招きかねない衝動ではなくとも、そのような神経症的強迫傾向は、ある一定の線を越えた人間には、明確に存在するものです。ですが——そのような強迫観念を人間に植え付けるのは、私は人間を超越した、

超自然的存在であると考えられるのです。それを私はある種の《神》と名付ける事が可能であると思うのですよ。無論の事それは純粋な神とは必ずしも言えず、厲の神、そう——《厲神》、と呼ぶことが出来るでしょう。」

布川は、ニヤリと笑った。

人間に神経症的強迫観念を植え付ける、超自然的存在、《厲神》。布川は無論の事、そのようなものの存在を信じていないだろう。布川が何かしらの比喩としてその事柄を持ち出している事は、明確であった。《厲神》——その異様な言葉は一体、何を示すものであるのか。

「《厲神》でなければ、あるいは黒き神……まあ、そんなところでしょうね。それはこの館に、降臨したのです。そして全ての開幕を告げたのが、2つの事件であった、という事です。黒き神、そう、厲神は、この機巧館に降臨したのですよ。——彷徨は、既に始まっています。」

布川は不可解な笑みを浮かべ、支倉を見た。見たのではない。何度となく繰り返されたその言葉を、支倉はまたも、反芻した。

《厲神の降臨》。館に降臨した、《厲神》。それは既に、彷徨を開始している。——発生した、2つの事件。

支倉は沈黙したまま、自身の停止させざるを得なかった思考に対し、聊爾な合理化を反芻する行為を繰り返していた。その永遠に継続されるかに思われた暗鬱とした思考に終止符をうったのは、次の瞬間の、布川の言葉であった。

「では——改めて、館内を見回ってみましょうか。」

部屋を出た後最初に布川が興味を示したのは、雪乃が描いたという鷹一郎の肖像画であった。2人は赤い絨毯の敷き詰められた階段ホールに、立ち止まった。

「支倉さん、あの肖像画を見て、何か不自然なものは感じられませんか？」

布川は、不可解な微笑を浮かべた。

不自然——支倉の絵画に対する評価は、寧ろその言葉によって説明されるべきであった。

「ええ——何か、違和感があるようです。」

支倉は、言った。無論の事、その言葉には何の誇張もない。事実その絵画がどこかしらが不自然であり、ある捉えようのない違和感の存在するものである事を、支倉は感じていた。

「ええ、そうですね。……私も、そう考えます。」

布川は再び不可解な微笑を浮かべると、支倉の方へ身体を向けた。

「少し質問したいのですが——肖像画は、鷹一郎さんの身体全体を描いているものですか？」

「いいえ、胸から上です。」

支倉は即答した。

盲目でない支倉に、それを答える事は容易であった。

「もしかすると肖像画の鷹一郎さんの衣服には、ボタンが付いていませんか？」

ここで布川は、奇妙な質問をした。ボタンが、付いているか。

## 2. 突風

少なくともその時、支倉にはその質問は無意味なものに思えた。しかし敢えて支倉がそれを気に止めたのは、実際に布川の言う通り、その衣服にボタンがついていたからであった。

「ええ、ボタンは付いていますが——何故ですか？」

支倉は返答した後、逆に布川に言った。

布川は、ニヤリと笑った。

「いえ、別に意味ある事ではないですよ。ただ——もしその衣服にボタンがついていたとすれば、この絵面の示す暗示こそが、機巧館に秘められた巨大な秘密と根源的存在を共有しているものである、そう考えたのです。」

布川は、支倉を見た。

「えっ？」

支倉は、絵面のボタンを見た。別段、変わった事は見られな  
い。ただし、ボタンがどこか不自然であるのは、確かにそうであ  
った。それを明確に捉える事は不可能であったが、そのボタン  
に秘められた何かを、そこに隠されている何かが存在する事実  
を、支倉はその時理解した。

「ボタンの付いている位置を、見てみてください。」

布川は、言った。支倉は、見た。そこに違和感がある。それは  
勿論、理解出来ていた。

「では——ボタンは、衣服の右に付いていますか？ それとも、  
左に付いていますか？」

布川は、言った。支倉はその言葉に従った。

「——あっ！」

次の瞬間、支倉は声を発していた。

その違和感の根源を、支倉はその時、発見した。

鷹一郎の衣服のボタンは、その絵画において、左側に付いて  
いた。通常衣服のボタンは、男性の場合は右側に付いており、女  
性は左側に付いている。鷹一郎は、無論の事男だ。それなのに何故  
か、ボタンは左側に付いていた。

「——まあ、いいのです。」

ただ凝然とその場に立ち尽くす支倉に、布川は微笑を浮かべ  
ると、言った。

「それよりも先程気付いたのですが、2階の正面の両側に、細長  
いバルコニーがついているようなのです。恐らく、六角塔を見上  
げる形になると思うのですが……ちよつと、行ってみましょう。」

布川の言った通り、2階の階段ホールの隅に扉があり、コの字  
型の外壁の内側に位置する形になる、細長いバルコニーに通じて  
いた。それは六角塔を見上げる形になる位置でコの字型の内側の  
左右に付いており、それぞれ手摺りから見上げると、館の正面に  
突出した六角塔が間近に見えていた。バルコニーには雪が微かに  
残っており、それが曇の降った後のように地面に落ち、滑りやす  
くなっていた。角の方では溶けた雪が氷となり、固まっている。

先程も今も、空は雲に覆われている。確か、早朝には空は晴れ  
ていた。雲は、それから出たのだろうか。雨は今にも、降り出す  
様子であった。その時支倉は、ここを訪れる中途の車内で、雨が

付録

本著作選第二巻の、文字通り資料的な意味合いを込めての付録である。

○ 自作解説

著者自身の生育歴と重ね合わせての率直な述懐である。途中で未完となっているが、唐突にカントやフォイエルバッハの名前が出てくるこの文章を読んでいると、まさに、本作は第一巻で示したような哲学者たらんとする人間に著者が移行しようとしていた状況を示すドキュメントであると了解されるのである。

○ 第四エペイソディオ特殊用語解説表

未完であるにも拘わらずこの「解説表」を掲げたのは、前項で述べたように、本作自体が巨大な過渡期にある作品であることを如実に示す素材だからである。

第四エペイソディオ自体が、そもそも推理小説という枠組みに入るものであるか、著者自身が疑念を持っていたことは、この解説表が作成されたことそのものから明らかである。果たしてこの「表」は、特殊な個人（芦屋鷹一郎）の人格形成の背後にあるものの追究を通して、著者独自の「人間学」を構成しようとしたものだったのである。そうして、社会心理学者のエーリッヒ・フロムとの出会いから、それを契機として哲学志向へと一気にのめり込んでいく様子がここには表れていると言える。

なお、笹城蒼穹という筆名から、(笹) という略号を用いているが、この作品を最後として、以後、著者はペンネームを使用しなくなる。即ち、「関野昂(せきの・たかし)」になるのである。

○ 参考文献

ここには著者の読書遍歴が自ずと表れている。館林市立図書館に、編集者と二人で、小学校五年生ころから、日曜日の午後に実によく通ったことが想起される。そして、編集者の書架にあった多くの書籍がここに掲げられていることや、三島由紀夫作品が掲げられているが、著者の母の所持していた新潮文庫であったことなどに思い当たるのである。

○ 「館に関する記憶」

著者が自ら命を絶つ四日前の二〇〇三年八月二〇日に書かれたものである。既に胸中に決するものがあった著者が、最後に自著に関して記した文章であるため、特に掲載することとした。著者の本作への強い愛着を示す何よりの証左である。

○ 機巧館殺人事件年表

著者自身が作成した本作を書くに至った経緯を示した年表であり、本作の内容を時間系列で示したのではない。単なる年表に留まらず、著者にとって、最も懐かしい日々の記念となった年表といえる。

本著作選第一巻の読者への伝言

○ 付録4 「無と宇宙に関する帰結」ノート に関して

ここで、本著作選第一巻の読者の皆様に、訂正とお詫びをしなければならない。第一巻の付録四の「無と宇宙に関する帰結」ノートであるが、冒頭の五月二十五日付けの記載に、編集者は著者による原文のノートからの転記ミスをしていたのである。

第一巻では 有と宇宙はルビンのつぼ とあるところは、

著者自筆ノートでは 有と無はルビンのつぼ が正しかったのである。

経緯を説明しておく。まず、本来、「無」であったところがなぜ「宇宙」になってしまったかは、編集者の全くの単純ミスである。即ち、著者の自筆ノートを見ながらワープロ入力する際、編集者がつけた仮題中の「無と宇宙」という言葉に囚われて誤ってキーをたたき、しかも、出版社への原稿送付の際の最終チェックでも誤りを見落とすという、編集者として避けるべき基本的な錯誤を犯していたのである。お詫びしたい。

次に、ルビンは、ルビンであった。自筆の筆跡は、走り書きのような文字であるため、「一」のように見えたが、「ン」であり、「一瞬は「レ」のようにも見える表記であるが、間違いなく、「ン」である。正しくは、「ルビンのつぼ」ではなく、「ルビンの盃」と呼ばれる概念である。心理学者エドガー・ルビンの考案による、文献にしばしば登場する図であり、初めは黒地に白く盃が描かれているように見え、逆転させて黒い地の絵を図として見直すと、二人の向かい合った人の顔が描かれているように見える、というものである。これにより、有と無は単なる対立概念ではない、という考えを導き出そうとしているのである。

なお、なぜ正しくは「盃」の「つぼ」になってしまったのかであるが、メモとはいえ、背景があるはずである。これは、編集者の推定では、著者の脳裏で、「クラインの壺」と、イメージが混ざったためと思われる。位相数学の高次元の立体において表と裏がメビウスの輪のように区別不能になることを示すモデルであるが、著者はこういった分野に強い関心を持っていた。有と無は、決して単純な反対概念ではないことを示したかった気持ちが起こした「有と無はルビンのつぼ」という言葉だったのではないだろうか。

ここで弁解したミスに関しては、著者がここにいれば、相当厳しく指摘されそうな感がある。今度の第二巻の編集においても、力を振り絞ったつもりではあるが、あるいは思わぬ過誤なしとはし難いものがある。読者の海容を請うとともに、力不足を痛感する次第である。



## 後記

◆ 昂にとって小学校五年生は、大きな変化の時期だったと今になってつくづく思う。私たち家族は、昂が生まれて以来、彼が亡くなる前の年まで、年賀状には家族三人で撮った写真を使っていた。改めて並べてみると、小五から、彼の表情は一変している。「子供」ではなくなり、すでに彼が言うところの「青年」としての気迫が表れた意欲に満ちた表情をしている。幼稚園までの本人自身が語るところの「弱虫・泣き虫」であった段階を通過し、小学校では「やんちゃ」になった昂は、ここで、一気に「おとな」に向かって歩み始めたといえる。その後の彼の内面的発達は、しかし、両親の思うところを遙かに超えて早く、しかも、一気に時空の彼方まで飛び出していった。

◆ 本著作選第1巻の年譜に示したが、私たちは、1年に1〜2回、泊を伴う家族旅行をした。初めのころは祖父母もいっしょの五人の旅行であったが、途中からは親子三人の旅行が増えていった。特に小学校中学年のころの旅行では、出先にもノートを持って行き、しばしばそこでメモをとっていたことが思い出される。「孜々として」という言葉がびつたりする、倦まずたゆまずの旅行スタイルであった。

小六の夏の小樽への三人の旅行は、特に昂にとっては思い出深いものだったのでないだろうか。彼はこのとき、前年の晩秋から書き始めていた本著作選第二巻の『機巧館殺人事件』の執筆が終盤にさしかかり、執筆を中断しての「骨休め」の意味があったと思われる。彼は、北海道の風物を満喫しつつ、しかし、心は常に作品の構成の再検討に余念がなかったのである。

同じ年の秋十一月に祖父母も加わって五人で日光に一泊旅行をしたときは、彼は宿の部屋に落ち着くと、哲学書を読んでいる少年に変わっていた。作家としての未来像から、大きく舵を切って、彼の内面で変化が進行していたのだ。

◆ 旅行と言えば、中一の夏に親子三人で、函館に行ったときは、小学校までの旅行とはまたひと味違ったものとなっていた。陸上部の活動日程がつまっているにも拘わらず、彼は親のたてた「家族団らん」プランに「協力」して、とにかく日程を空けたのである（一年生であるのに、部長であった）。市内観光に行く前の朝や宿に帰った後の時間で、昂は学校の宿題をやっていた。夏休みの課題は、正直に言って、基礎が不十分な生徒に学習習慣を身につけさせるために設定したような単純な「物量作戦」的なものもある。彼は、提出期日以前に早く終了させて、部活動や執筆時間を捻出すべく、旅先で単純作業的な宿題を決めた分量ずつ消化していたのである。親から見れば、彼には全く不要な課題と見えたのであるが、彼は全員に課されたものは、機械的といいたいほどに、かっちり引き受け、仕上げたいと常に考えていた。その点は、中学の制服を規定通り、一分の隙もなく着込んでいたことにも表れている。ルール遵守、そこには、外部から課されたルールも、己自身が己に課したルールもあった。彼は、二〇〇三年の八月二十四日に自ら命を絶つわけであるが、それまでに全ての夏休みの宿題を終えていた。自死の予定とは別に、課題は着々と仕上げて日々を送っていたのである。最後の日々、胸中にどのようなものを秘めて私たちに接していたのか。私たちは親として并解の余地はない。

◆ 本著作選第二巻の編集であるが、第一巻とはまた異なる意味で、予想外の手間がかかった。即ち、冒頭部に近い二節分のファイルが、MOのフォルダ中に見あたらないのである。小五の三学期に自家製本して作った装丁のついた本が祖父父母の家にあったので、それをもとに母が、彼の自死後の二〇〇三年晩秋から翌年の初めにかけ、改めて入力して、まずこれでよし、と思ったが、他のファイルの記述と文脈上微妙に齟齬があることがわかった。これが、編集ノートや本巻解題で述べたヴァリアント（異稿）問題であり、祖父母宅に、改稿したものをプリントアウトしたものが別に残されていたことがわかってからは、父が母の入力したのものをもとに改めて訂正入力する形で決定稿を作成していった。この際、父は、小五の終わり、小六の前半の半年あまりの間で、息子の思考がどのように変化したかを追体験することになったのである。

◆ 第一巻を出版した後、多くの方とのふれ合いがあったことをここで想起せずにはおれない。昂の書いたものを介在させる形で、私たちが人生において交錯することは全くなかったであろう方々と知り合えたことの持つ重み

は、筆舌に尽くしがたいものがある。

中でも、一面識もなかった哲学を専攻する大学の研究者の方々から頂いた手紙でのお言葉は、言葉に尽くしがたい心への深い響きを私たちに与えた。多くの方々から頂いたにも拘わらず、敢えて非礼を省みず、二つだけ記すことをお許し願いたい。千葉大学の永井均先生からのお手紙にあった「驚くべき早熟な哲学的思索とはいえまったく異端なところはなく、きわめて正当で正統な哲学的帰結」という言葉、青山学院大学の入不二基義先生からのお手紙にあった「この論集を書いたのが、まだ中学生の若者だからではなく、そこに書かれている思索が、哲学の核心部分へと届いている質の高いもの」という言葉には、このときほど私たちは昂に伝える手段があったなら、と痛感したことはない。

さらに、初期の昂の思索に理論社会学的視点からの影響を与えた『社会学原理』の著者、富永健一先生に第1巻を読んで頂くとした際のこととも忘れがたい。連絡先がわからなかった私たちが思いあまつてお願いした際、東京大学出版会編集部佐藤修氏が示して下さいました。厚意と、頂いた手紙の中で示していただいた温かいお言葉には、私たちは感謝の念でしばらく言葉が出なかった。

第1巻を出版した後の秋、インターネット新聞『JANJAN』に、中村孔治氏が内容紹介を兼ねた読後感を書いて下さった。むろん、中村氏とは一面識もない。内容は正に襟を正しつつ、一文一文拝読せざるを得ないもので、私たちは、ここまで真摯に昂と向かい合っただけで下さったことに心が震えた。

◆ 第1巻後記では自戒して控えさせて頂いたにも拘わらず、今回は、移ろいゆく時間の流れの中で、どうしても心が熱くなる一瞬を書きとめておきたい。場所柄やご迷惑を省みない記述となったことを改めてお詫びしたい。しかし、人との結びつきに教えられることは以上に尽きるものではなく、私たちの住んでいる地域の方々とのやりとりでも励まされるものがあつたし、何よりも職場においてそうであった。あらゆる形で人のつながりの持つ意味を教えられたことが第1巻出版後の日々であった。

頂いた心一つ一つを胸に刻みつつ、次なる第3巻の完成に向け努力することを、ここでお伝えして、ひとまず筆を擱きたい。

二〇〇七年八月

関野 豊 (関野 昂 父)  
関野 美絵 (関野 昂 母)



## ■著者紹介

関野 昂 (せきの たかし)

1989(平成元)年8月8日群馬県に生まれる。

四歳のころより多くの物語を書き、小学校六年生からは哲学への強い関心を持つ。館林市立第五小学校から館林市立第四中学校に進み、中学一年生より生徒会本部書記、陸上部部長。中学二年生の夏、館林市中学生オーストラリア派遣団に参加。帰国後の2003(平成15)年8月24日夕刻、栃木県足利市内のJR線踏切に入り、自ら命を絶つ。享年十四歳。2005年8月『関野昂著作選 1 関野昂哲学論集』刊行。

## 関野 昂 著作選 2 機巧館殺人事件

---

2007年 8月 8日 第1刷発行

著者 関野 昂

発行者 池上 淳

発行所 〒229-0013 神奈川県相模原市東大沼 2-21-4

株式会社 現代図書

TEL 042-765-6462 FAX 042-701-8612

URL <http://www.gendaitosho.co.jp/>

E-mail : [shoseki@gendaitosho.co.jp](mailto:shoseki@gendaitosho.co.jp)

振替口座 00200-4-5262 ISBN 978-4-86299-000-6

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan 2007



9784862990006

ISBN978-4-86299-000-6

C0093 ¥2857E



1920093028578



定価（本体価格 2,857 円＋税）